

中村・宿毛道路廻連遺跡発掘調査報告書 I

西ノ谷遺跡

第1分冊

1993.3

高知県教育委員会  
高知県文化財保護文化財センター



# 中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 I

西ノ谷遺跡

1993.3

高知県教育委員会  
財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



## 序

幅多と呼ばれる高知県西南部地域は、九州に近いということもあるって同じ高知にありながら中・東部とは異なった地域文化を歴史的に形成してきたところであります。今回調査を行った西ノ谷遺跡においても、弥生時代・古墳時代にさかのばってその特徴を顕著に実証することができました。歴史は現代の鏡であると言われますが、この両地域の異なる文化の発展と交流の結果が今日の高知県の文化・社会を形造っているものと思います。遺跡や遺物は、私たちの祖先が大地に刻み込んだかけがえのない歩みの足跡そのものであります。同時に、現在の私たちの文化的資質の向上をはかる上においても活用して行かなければならないものだと思います。今日、地域の見直し、地域の活性化ということが言われておりますが、それは地域の歴史を如何に私たちのものとして再生していくかということでもあろうかと思います。

本書が、埋蔵文化財の保護と斯学の向上のみならず地域文化・社会の発展のために生かされることを心から願っています。

最後に発掘調査にあたりまして全面的な協力を頂きました建設省中村工事事務所、また寒風の中を厭わず作業に従事して下さった地元の作業員の皆さまに心より厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター  
所長 小橋一民



## 例　　言

1. 本書は、高規格中村宿毛道路建設に伴う西ノ谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 西ノ谷遺跡は、中村市江ノ村西ノ谷に所在する。
3. 試掘調査を平成3年9月2日から10月17日まで実施し、本調査を平成4年9月24日から12月28日まで実施した。試掘調査面積は157m<sup>2</sup>、本調査面積は1,100m<sup>2</sup>である。

### 4. 調査体制

　　庶務　三浦康寛

　　調査員

　　試掘調査　曾我貴行（高知県埋蔵文化財センター）

　　本調査　出原忠三（高知県教育委員会文化振興課）

### 5. 狀況分担

　　第Ⅰ章、第Ⅳ章、第Ⅴ章の1、2及び3の(1)を出原が、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅴ章の3の(2)・(3)・(4)を曾我が執筆した。

6. 本調査における現地の測量実測は、公共座標によった。
7. 発掘調査及び整理作業の過程において、木村剛朗氏、田崎博之先生（愛媛大学）のご指導を得、植物種鑑定・土器底部の網代状出現については渡辺誠先生（名古屋大学）、木材樹種鑑定については山口誠治先生（大阪文化財センター）、木製品の保存処理については西山要一先生をわざわせた。また山口先生、渡辺先生には玉輶を賜わった。記して謝意を表す。
8. 調査にあたっては、建設省四国地方建設局中村工事事務所の協力を頂いた。また現場作業員並びに整理作業員の皆様の献身的な協力に対して多く感謝の意を表したい。
9. 出土遺物、その他関係資料は高知県埋蔵文化財センターに保管している。

## 報 告 書 要 約

1. 遺跡名 四ノ谷遺跡
2. 所在地 高知県中村市江ノ村四ノ谷
3. 立地 沖積低地 標高約8m
4. 種類 弥生前期・後期及び古墳時代前期の集落址
5. 調査主体 高知県埋蔵文化財センター
6. 調査契機 高規格中村宿毛線建設
7. 調査期間 平成4年9月24日から12月28日
8. 調査面積 1,100m<sup>2</sup>
9. 出土遺物 弥生前・後期土器、古式土師器、石器、木器（歯・他）
10. 内容要約 弥生前期末及び古式土師器の良好な一括資料を得ることができた。これらの資料は、これまで空白であった高知県西部の土器編年を確立する上に極めて重要な位置を占めると共に昭和・東部との比較研究を進め各々の地域性を明らかにする上においても重要な位置を占める。また、これらの土器の特徴から縄文時代に密接な関係にあった大分県地域との交流が弥生・古墳時代においても同様に展開していたことが窺われる。  
更に弥生前期土器組成に表れた、豊偏長の特徴は当地域の弥生文化発展期における強固な地域性を示すものとして興味深い現象である。

# 本 文 目 次

## 序

### 例言

報告書要約

本文目次

挿図目次

表目次

P L 目次

第Ⅰ章 西ノ谷遺跡周辺の地理・歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経過	5
第Ⅲ章 試掘調査	6
1. 調査の方法	6
2. 調査成果	6
第Ⅳ章 本調査	21
1. 調査の方法	21
2. 1区の調査	23
(1) 基本層序	23
(2) 考査成果	27
① 弥生時代前期の遺構と遺物	27
② 古墳時代前期の遺構と遺物	41
3. 2区の調査	49
(1) 基本層序	49
(2) 掘出遺構	55
(3) 遺物の出土状況及び出土遺物	56
第Ⅴ章 考察	64
1. 弥生時代前期後葉の土器	64
(1) 分類	64
① 壺	64
② 壺	65
③ 鉢	66
(2) 考察	66
① 器種組成	67
② 壺	67
③ 鉢	67
④ 鉢	70
2. 西ノ谷遺跡出土弥生前期後葉土器の位置付け	71
(1) 人田遺跡出土の土器	74
(2) 西ノ谷遺跡出土の前期後葉壺形土器の位置付け	76
(3) 下城式土器との関係について	77
3. 西ノ谷遺跡出土の古式土師器について	80
(1) 分類	80
① 壺	80
② 壺	80
③ 鉢	80
(2) 1区出土の土器について	81
(3) 2区出土の土器について	82
(4) 西ノ谷遺跡出土古式土師器の縦年的位置付けの試み	83
付掌	
1. 西ノ谷遺跡出土木製品の樹種について	山口誠治 82
2. 底部压痕と植物遺体	渡辺誠 91

## 挿 図 目 次

- Fig. 1 : 西ノ谷遺跡の位置及び周辺の遺跡  
Fig. 2 : 試掘坑配置図  
Fig. 3 : TR 3 出土遺物実測図  
Fig. 4 : TR 3 土壌断面図 (柱状模式図)  
Fig. 5 : TR 3 第 VII 層遺物分布図  
Fig. 6 : TR 3 出土遺物実測図 (弥生土器)  
Fig. 7 : TR 3・6 出土遺物実測図 (弥生土器)  
Fig. 8 : TR 6 土壌断面図 (柱状模式図)  
Fig. 9 : 本調査区位置図 1  
Fig. 10 : 本調査区位置図 2  
Fig. 11 : 1 区検出遺構・トレンチ・セクション位置図  
Fig. 12 : 1 区基本層序  
Fig. 13 : 弥生時代前期の検出遺構及び遺物  
    出土状況  
Fig. 14 : SK 1 及び SK 1 遺物出土状況実測図  
Fig. 15 : SK 1 出土遺物実測図  
Fig. 16 : SK 2 及び遺物出土状況実測図  
Fig. 17 : SK 2 出土遺物実測図  
Fig. 18 : SK 2 出土打製石器実測図  
Fig. 19 : SK 1 の周辺 (32~34) 及び SK 2 の  
    周辺 (35~38) 出土遺物実測図  
Fig. 20 : 集石 1 及び SD 1 平鉢出土状況実測  
    図  
Fig. 21 : 集石 1 出土遺物実測図  
Fig. 22 : 集石 1 出土遺物実測図  
Fig. 23 : 集石 2 及び出土遺物実測図  
Fig. 24 : 1 群 (50~55・64) 及び 2 群 (56  
    ~63) 出土遺物実測図  
Fig. 25 : 2 群 (65~73) 及び 3 群 (74~78)  
    出土遺物実測図  
Fig. 26 : D 層出土遺物実測図  
Fig. 27 : D 層出土遺物実測図  
Fig. 28 : SD 1 出土の平鉢実測図  
Fig. 29 : SK 3 実測図  
Fig. 30 : 第 VII 層 (古墳時代前期) 遺物出  
    出土状況  
Fig. 31 : VII 層出土遺物実測図  
Fig. 32 : VII 層出土遺物実測図  
Fig. 33 : 砂疊層出土遺物実測図  
Fig. 34 : 砂疊層出土の木器実測図  
Fig. 35 : 2 区検出遺構  
Fig. 36 : 2 区西壁基本層序  
Fig. 37 : 2 区清状遺構エレベーション  
Fig. 38 : 2 区 XVI 層遺物出土状況実測図  
Fig. 39 : 2 区 XVI 層出土遺物実測図  
Fig. 40 : 2 区 XVI 層出土遺物実測図  
Fig. 41 : 2 区 XXVII 層及び XXIX 層上面出  
    出土遺物実測図  
Fig. 42 : 2 区 XXVII・XXIX 層上面出土  
    (184・185) の木製品  
Fig. 43 : 烏の型態分類  
Fig. 44 : 人山遺跡出土漆鉢実測図  
Fig. 45 : 入山遺跡出土漆鉢実測図  
Fig. 46 : 入山遺跡出土漆鉢実測図  
Fig. 47 : 成部玉振モーリング陽像  
Fig. 48 : 植物遺体

## 表 目 次

表 1	遺跡名一覧表
表 2	遺物觀察表 1 (1~11)
表 3	遺物觀察表 2 (12~21)
表 4	堺分類別比率
表 5	1区 VII 扉及 2区 XVI 扉出土土器組成表
表 6	遺物觀察表 3 (22~32)
表 7	遺物觀察表 4 (33~43)
表 8	遺物觀察表 5 (44~56)
表 9	遺物觀察表 6 (57~68)
表 10	遺物觀察表 7 (69~82)
表 11	遺物觀察表 8 (83~93)
表 12	遺物觀察表 9 (94~107)
表 13	遺物觀察表 10 (108~123)
表 14	遺物觀察表 11 (124~137)
表 15	遺物觀察表 12 (138~150)
表 16	遺物觀察表 13 (152~162)
表 17	遺物觀察表 14 (163~176)
表 18	遺物觀察表 15 (177~183)

## P L 目 次

- PL 1 : TR 3 調査前近景 (東より), TR 3 第 V 層検出状況 (西より)  
PL 2 : TR 3 第 VI 層遺物出土状況 (東より), 同上 (北より)  
PL 3 : TR 3 第 VII 層遺物出土状況 (東より), 同上 (東より)  
PL 4 : TR 6 作業風景 (北西より), TR 6 西壁上層断面 (東より)  
PL 5 : TR 3 出土遺物  
PL 6 : TR 3 第 VI 層遺物出土状況, TR 3・6 出土遺物  
PL 7 : 樹種細胞顕微鏡写真  
PL 8 : 樹種細胞顕微鏡写真  
PL 9 : 西ノ谷遺跡全量 (北東から), 同上 (北から)  
PL10 : 1 区東壁, 1 区南壁  
PL11 : 1 区南壁, 1 区 TR 3 北壁セクション (SD 1 付近)  
PL12 : 1 区弥生前期 1 ~ 3 群の遺物出土状況 (北から), 弥生前期集石 2 検出状況  
PL13 : 1 区弥生前期土器集中出土状況, 同上 (52)  
PL14 : SK 1 検出状況, 同上  
PL15 : SK 1 遺物出土状況, 同上  
PL16 : SK 1・2 遺物出土状況 (北西より), SK 1 遺物出土状況  
PL17 : SK 2 遺物出土状況, SK 1 遺物出土状況 (23・24)  
PL18 : SK 2 検出状況, SK 2 セクション及び遺物出土状況  
PL19 : SK 1 完掘状況, SK 2 完掘状況  
PL20 : 1 区古式土師器出土状況 (埴層), 同上  
PL21 : SK 3 半截状況, SK 3 半截断面  
PL22 : SK 3 ドングリ出土状況, SK 3 完掘状況  
PL23 : 1 区古式土師器出土状況 (埴層), 同上  
PL24 : 古墳時代前期遺物出土状況, 同上  
PL25 : 1 区完掘状況 (北より), 1 区調査後の断ち割り  
PL26 : 2 区西壁セクション, 2 区完掘状況 (北東側半分)  
PL27 : 2 区完掘状況 (北東側半分), 同上 (南西側半分)  
PL28 : 2 区木製品出土状況, 同上  
PL29 : 2 区古墳時代前期土器出土状況, 同上  
PL30 : 2 区古墳時代前期土器出土状況, 同上  
PL31 : 2 区古墳時代前期土器出土状況, 同上  
PL32 : 2 区古墳時代前期土器出土状況, 2 区エブリ出土状況  
PL33 : 瓢文土器 (167) 及び弥生前期土器 (37・46・50・63・72)  
PL34 : 弥生前期石器, 同上裏面  
PL35 : 弥生前期土器, 同上  
PL36 : 弥生前期土器, 古墳時代前期土器  
PL37 : 古墳時代前期土器  
PL38 : 古墳時代前期土器

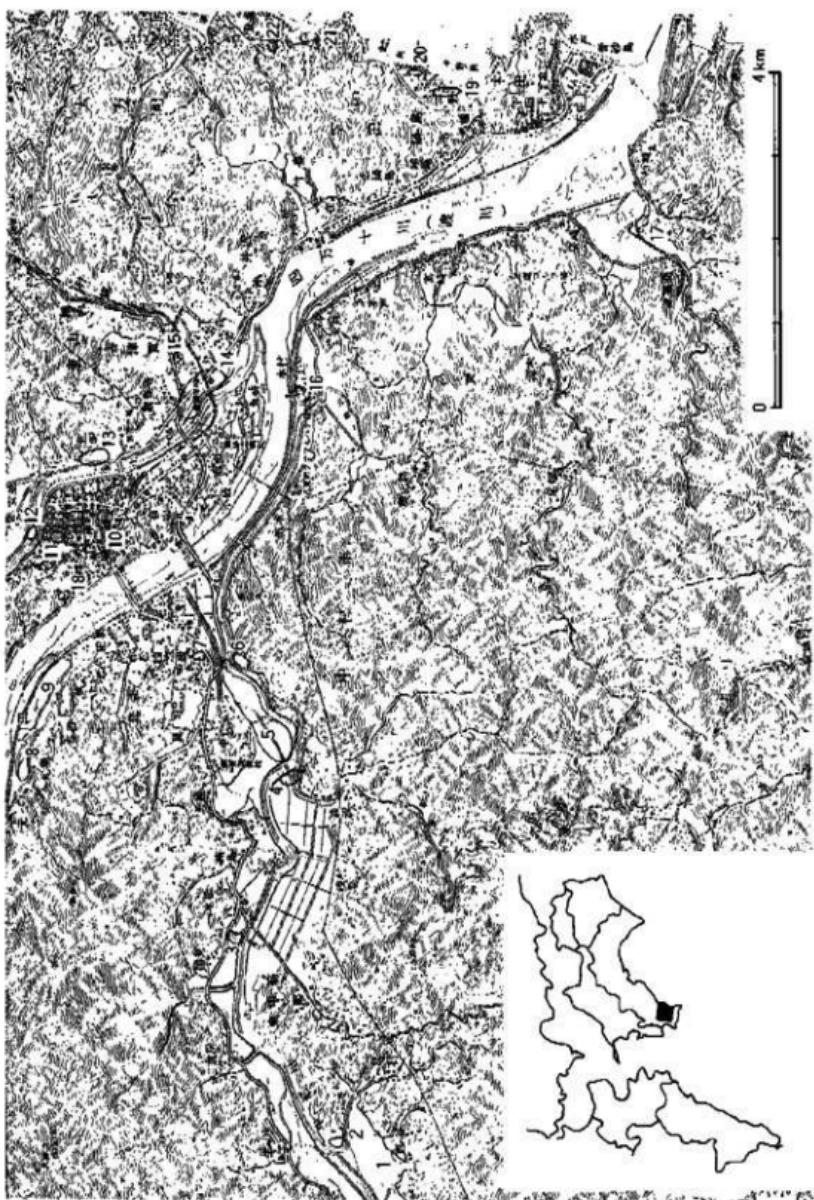
## 第Ⅰ章 西ノ谷遺跡周辺の地理・歴史的環境

西ノ谷遺跡は高知県西南部の中村市江ノ村にある。四万十川に西方から流れ込む支流中筋川右岸に開けた低湿地に位置し、標高8m前後を測る。中村と岩毛を結ぶ中筋川流域の東西に帶状(幅500~1,000m、長さ14km)に伸びる平野部は、特に中筋平野と呼ばれる地質学上第4紀地史を解明する上で重要な地域として位置付けられている。上流の有岡、竹石・車岡付近には中位段丘堆積層(中筋層・戸内層)の分布が認められる。この時期(洪積世第2間氷期)、中筋川流域には海水が侵入し、南岸は四国本土から分離していたと考えられている<sup>(1)</sup>。中筋平野を形成する沖積層は、国見で32m、有岡で20m以上と予想されており、これらの堆積は紀文海進以降によるものである。またこの流域は有名な水害常習地帯であり、洪水となれば四万十川本流からの逆流現象がおこり、付近一帯が海水に浸る状況が続いた。建設省の『渡川四十年史』によれば、「野中兼山の中筋川改修以来明治中期までの230年間ににおける水位10m以上の大洪水は23回、反復6割以下の中洪水72回、没水50時間以上の大洪水・24時間冠水以上を含めると1,000回近い浸水記録」がある<sup>(2)</sup>。有史以来付近の住民が如何に河川の猛威にさらされてきたのか看取ることができる。周辺遺跡の展開は、このような自然環境に強く規定されていたことが考えられる。従って遺跡の立地や性格など各時代の自然地理的環境を念頭においた解釈を求めるには当地域の人々の歴史を正しく認識することはできないであろう。西ノ谷遺跡と現

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	西ノ谷遺跡	弥生(前)~古墳(前)	12	後川橋西遺跡	弥生
2	江ノ村遺跡	弥生(前・後)	13	佐岡遺跡	弥生
3	国見遺跡	紀文(早)~古墳	14	古津賀遺跡	古墳(中・後)
4	船川遺跡	紀文(後)~古墳	15	古津賀古墳	古墳(後)
5	共同中山遺跡群	弥生~古墳	16	山路遺跡	弥生(後)(中広銅心)
6	具重遺跡	古墳	17	宮ノ沢(初崎)遺跡	紀文(後)
7	西和田遺跡	弥生(後)	18	吹山越遺跡	弥生(中)
8	源池遺跡	弥生	19	半野遺跡	紀文(前)
9	入田遺跡	紀文(晚)~弥生	20	磯ノ上遺跡	紀文(前)
10	中村貝塚	紀文(晚)	21	反海遺跡	旧石器・紀文
11	古城山遺跡	弥生(中・後)	22	モモトノダバ遺跡	紀文(早・前)

表1 遺跡名一覧表

Fig. 1 西ノ谷遺跡の位置及び周辺の遺跡  
(縄文時代～古墳時代)



中筋川の最短距離は約500mであるが、これは上述した近世初期の改修結果によるものであり、本来はもっと南にカーブし、すなわち遺跡に近接したところを流れている。

この付近で最も古く位置付けられる遺跡は、ホルンフェルス製のナイフ形石器を出した双海遺跡(21)を挙げることができる。双海遺跡は土佐湾に臨む海岸段丘に立地し、宿毛市所在の宇須々木遺跡などと共に県下で数少ない山石器時代遺跡の1つである。縄文時代草創期の遺跡は未確認であるが、早・前期に至ると海岸段丘に点々と出現するようになる。図示した平野(19)・磯ノ上(20)・モモトノダバ(22)・双海遺跡(21)は、猪毛湾から足摺半島にかけて発達しているリアス式海岸に展開する一連の諸遺跡に列なる一群の中で理解することができる<sup>(3)</sup>。これらの遺跡は土器の散布が比較的少ないので対して鄭島黒曜石製の石錐が多く出土することを特徴とする。このことはこれら臨海性の遺跡の多くが定住性の集落というよりもキャンプ地的な性格を有し小集落であったことを物語っている。また臨海性の遺跡が早期～前期へと継続するものが多いのに対し、唯一内陸性の国見遺跡(3)は前期が欠如している。当遺跡は、中後期への発展を遂げる長期定住型の遺跡であり、前期が欠如しているのは縄文海進との関係を考えられ興味深い<sup>(4)</sup>。続く中期は国見遺跡から船元式、四万十川流域の三里遺跡・間崎遺跡からは宿毛C式土器、後川流域の大用遺跡からは福田K III式土器が出土している<sup>(5)</sup>。本格調査がなされた遺跡は少ないが、中期後半からは遺跡が河川流域の平野に進出してくる傾向があり生業との関係で今後追求すべき課題である。後期に至るとこの傾向は更に促進され、沖積の進行した中筋川流域の国見遺跡、新川遺跡(4)、四万十川流域の初崎遺跡(17)、三里遺跡など多くの遺跡が展開し、その多くはこれまでに例を見なかった石錐や打製石斧を有しており、三里遺跡では72点もの石錐が確認されている。土器型式も後期初頭の中津式併行期から末の福田K III式までが見られ地理的な位置関係を反映して瀬戸内と豐後水道を隔てた九州からの影響が認められ、中葉からは近畿の影響も加わる<sup>(6)</sup>。

晩期の遺跡は、入田遺跡(9)・中村貝塚(10)・中筋川上流域のツゲロ橋下遺跡を挙げることができる。これらはすべて刻目突帯文を有する晩期後半に属するが入田遺跡(標高13m)は、1952年、日本考古学協会弥生文化特別委員会によって発掘調査がなされ、四回では初めて突帯文土器(入田B式土器)と共に遠賀川式土器(入田I式)が出土し、以後南北の弥生文化成立を明らかにするうえで指標の一つとなった遺跡である<sup>(7)</sup>。中村貝塚(標高7.5m)も1965年に小発掘がなされ、下層と上層とに分離して無刻目突帯文土器(中村I式)と刻目突帯文土器(中村II式)が出土し、県西部における晩期後半の標式遺跡となっている<sup>(8)</sup>。

弥生時代に至っても継起的な展開を見せるが、入田遺跡以降本格的な調査例に恵まれていないのが現状である。前期の遺跡は、西ノ谷遺跡と近接する江ノ村遺跡(2)や国見遺跡が存在するが共に前期末からであり、入田I式との間をつなぐ時期が不明である。このことは入田遺跡においても同様であり、前期中葉の段階がどのような内容をもっていたのか大きな課題となっている。前期末は全県的に遺跡の量的・質的な増加が認められるが、当地においてもその傾向に

あり小河川の河口に開けた谷平野には多くの遺跡がまだ埋没しているものと考えられる。中・後期に至ると冲積地と共に古城山遺跡(11)や吹山越遺跡(18)など高地性集落の出現が認められる。同様の遺跡は県東部にも認められるが、東部のそれが山丘の斜面に多く立地するのに比して西部では山頂にある例が多い。また青銅器は具同中山遺跡群(5)の東神ノ木地区から中広銅矛式が、山路遺跡(16)から同II式が各1点出土している<sup>(9)</sup>。

古墳時代に至ると中筋川上流の宿毛市平田に前期円墳の高岡山1・2号墳や中期前方後円墳(推定)の曾我山古墳が築造されるが、中村市域においては後期円墳の古津賀古墳(15)が知られているに過ぎない。当地域における古墳の分布は極めて稀薄であると言わざるを得ない。しかしながら中筋川・後川流域には、具同中山遺跡群・船戸遺跡(4)・具重遺跡(6)・古津賀遺跡(14)などの一大紀遺跡群が存在している。これらの諸遺跡は数次にわたる調査が実施され、石製・土製模造品などの祭祀遺物と共に祭祀に供した多量の土師器・須恵器等が出土している<sup>(10)</sup>。しかもこれらの遺跡は、遺存状況が良好であり祭祀の単位やセット関係、更に祭祀形態の変遷をも把握することのできる遺跡として注目されている<sup>(11)</sup>。

## 註

- (1) 甲藤次郎『高知県の地質』高知市民図書館
- (2) 建設省四国地方建設局中村工事事務所『渡川改修40年史』1980年
- (3) 木村剛朗「四十万川流域の歴史的環境」「四十万川流域の縄文文化研究」幡多埋文研 1987年
- (4) 橋田麻次『中村市史』中村市史編纂室 1969年
- (5) 木村剛朗「前期～中期の生活と文化」「四十万川流域の縄文文化研究」幡多埋文研 1987年
- (6) 木村剛朗「土佐における後期縄文文化について」『高知の研究』1 地質・考古 清文堂 1983年
- (7) 岡本健児「入田遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂
- (8) 岡本健児『高知県史』考古編 高知県 1968年
- (9) 岡本健児「高知県発見の銅矛について」『高知の研究』1 清文堂 1983年
- (10) 高知県教育委員会『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書I』古津賀遺跡・具同中山遺跡群 1988年
- (11) 出原恵三「祭祀発展の諸段階—古墳時代における水辺の祭祀」『考古学研究』第36巻 4号 考古学研究会 1990年

## 第Ⅱ章 調査に至る経過

国道56号線は、高知市から海岸線沿いに西進し、松山市へと通じており、高知県においては県中央部と西南部とを結ぶ重要な幹線道路である。この沿線の各所において道路改良計画が準備され、また進行中であるが、中村市と宿毛市を結ぶ区間においても、建設省四国地方建設局中村工事事務所によって、高規格中村宿毛道路の建設計画が進められている。

中村市は、高知駅の中でも特に遺跡の分布密度の高い地域の一つとして挙げることができるが、中村宿毛道路の計画路線に該当した中筋川流域の平野及び丘陵地帯は、具同中山遺跡群をはじめとする多くの遺跡が分布する地域として特筆することができる。

建設省四国地方建設局中村工事事務所と高知県教育委員会は、高規格道路建設計画と埋蔵文化財保護との調整について、路線決定以前から福密な協議を積み重ねてきた経過があり、事業の進捗に伴って立会調査及び確認調査等を実施してきた。

今次調査の対象となった江ノ村一西ノ谷地区には、江ノ古城跡・ハナノシロ城跡をはじめとして、西ノ谷城跡・久木ノ城跡等の遺跡が所在している。そして、高規格中村宿毛道路の計画路線にはこれらの4城跡すべてが含まれており、工事の実施によってこれらの埋蔵文化財が何らかの影響を受けることは必定である。そこで、平成3年度にこれら城跡の中で用地交渉の進んでいる江ノ古・ハナノシロの両城跡と江ノ村一西ノ谷区間の沖積地の工事予定範囲について埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査によって、江ノ古・ハナノシロ両城跡に城跡の遺構・遺物が遺存していることを確認し、また西ノ谷の沖積地において弥生一古墳時代を中心とする遺跡（西ノ谷遺跡）を検出することができた。

この確認調査の結果に基づき、建設省四国地方建設局中村工事事務所及び高知県教育委員会が、これら3箇所の遺跡の発掘調査実施について合意し、今次調査の運びとなった。調査は高知県教育委員会が受託し、財團法人高知県文化財埋蔵文化財センターがこれを実施した。発掘調査期間は平成4年5月21日から平成4年12月28日まであり、発掘調査面積は3箇所を総計して約6,500m<sup>2</sup>である。

## 第Ⅲ章 試掘調査

高規格中村宿毛道路建設計画に伴い、計画路線上に位置する高知県中村市江ノ村～西ノ谷地区について、平成3年度に事前の確認調査を実施した。西ノ谷遺跡はその際に発見された遺跡である。調査は平成3年9月2日から10月17日までの間実施した。

### 1. 調査の方法

中村市江ノ村西ノ谷川左岸から西ノ谷城跡東麓までの間に9箇所の試掘坑（TR1～TR9）を任意に設定し、遺物包含層及び遺構等の確認を行った。各試掘坑の調査に際しては必要に応じて試掘坑の拡張を行い、調査面積は157m<sup>2</sup>であった。試掘坑の掘り下げには重機を使用し、遺構及び遺物包含層の検出、及び掘り下げは人力で行った。遺構の検出された試掘坑については遺構平面図及び土層断面図（各図版1／20）の記録を行い、これ以外の試掘坑についても土層堆積状況の記録を行った。

### 2. 調査成果

今次の調査区間は南から枝状に延びる丘陵の谷間に相当し、湧水の非常に多い谷地形をなしている。各試掘坑とも、その調査に当たってはこの湧水に悩まされた。土層の堆積状況では、シルト状の灰色粘土層と緑灰色小角礫層が交互に堆積しているのが特徴的であり、南方の山塊からの土石流等による比較的短期間のうちに形成された堆積であると考えられた。

調査の結果、TR1・2・4・5・7～9に関しては遺物包含層・遺構とともに検出されなかったが、TR3・6から弥生時代及び古墳時代の遺物包含層を確認した。以下、試掘坑毎にその内容を記述する。

#### (1) TR3 (Fig. 2-5)

当初、4×4m大的試掘坑を設定していたが、遺物の出土に伴って、北及び西に2mの拡張を行い、最終的には6×6m大的試掘坑となった。

#### 層序 (Fig. 4)

現地表面下約3.6mまでの確認を行った。土層の堆積状況は、第I層：表土、第II層：灰色砂礫土、第III層：暗灰色粘土、第IV層：青灰色砂礫土、第V層：暗褐色粘土、第VI層：青灰色砂礫土、第VII層：暗灰色粘土、第VIII層：灰色粘砂土、第IX層：明青灰色砂礫、第X層：暗褐色粘砂土、第XI層：灰褐色粘砂土、第XII層：明青灰色砂礫である。砂礫土と



Fig. 2 試掘坑配置図

粘土及び粘砂土との互層をなす点が特徴的であり、度重なる土石流によって谷が埋められてきた過程が想像される。しかしながら、この疊層の堆積によって一時期の遺物包含層がほぼ純粋な状態で保護されてきたことも付言せねばならない。遺物包含層は、第V層・第VII層の2枚を確認することができた。表土下約2mの第VII層から弥生土器326点、スケレーパ1点が出土し、また表土下約1mの第V層から古墳時代前期の土師器7点が出土した。明確な遺構は検出されないが、2時期の遺物包含層が存在することが確認され、本格調査が必要と判断された。

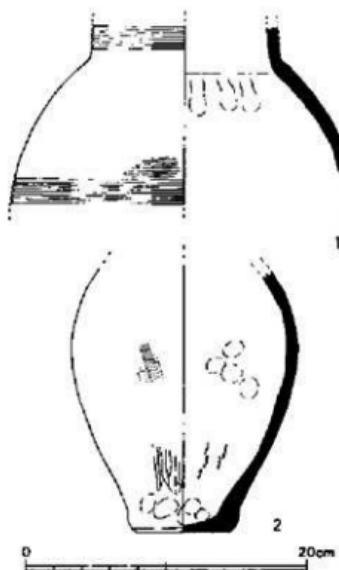


Fig. 3 TR 3 出土遺物実測図

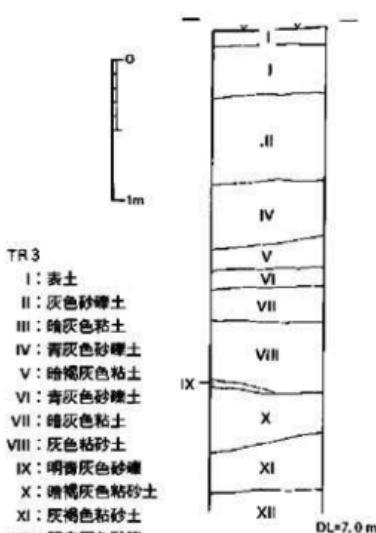


Fig. 4 TR 3 土層断面図 (柱状模式図)

#### 出土遺物 (Fig. 3・6・7)

第V層出土の土師器2点、第VII層出土の弥生土器17点及び、スクレーパー1点を図示することができた。第VII層の弥生土器に関しては、第5図の分布図に示したように、出土範囲には一定の集中箇所がみられ、また図示できた土器で見る限り50cm以上離れて接合する個体は認められないことが指摘できる。以下、第VII層・第V層出土の遺物について概述する。

1~17・21が第VII層出土の遺物である。1・2は甕で、外面はミガキ調整である。3~6・8~12は甕である。甕には大きく分けて3つの形態のものが認められる。すなわち、口縁端部に刻み目をもつもの（3~6・11）、口縁部直下外面に突起をもつもの（9・10）、刻み目も突起も有しないもの（8・12）の3者である。6・11は刻み目をもちらながら口縁部直下外面に沈線を造らす。3は甕よりも甕形の鉢と呼称すべきものであろう。7は鉢とみられ、外面はミガキ調整である。14~17は底部片である。21はサヌカイト製のスクレーパーで、約半分が欠損している。

18・19が第V層出土の遺物である。18は土師器の底部、19は高壙の脚柱部である。

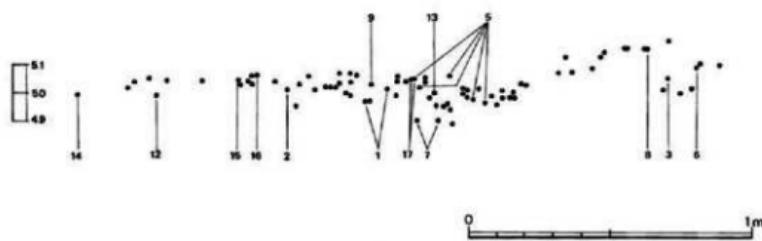
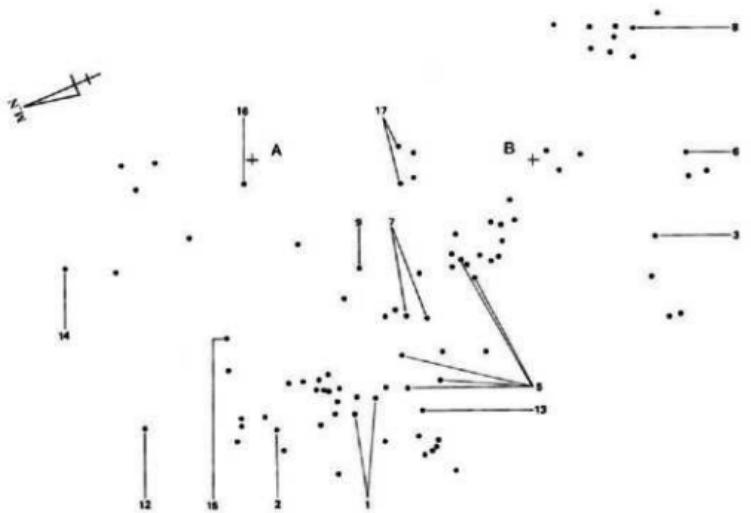
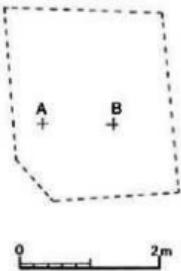


Fig. 5 TR 3 第VII層遺物分布図



作業風景（南より）

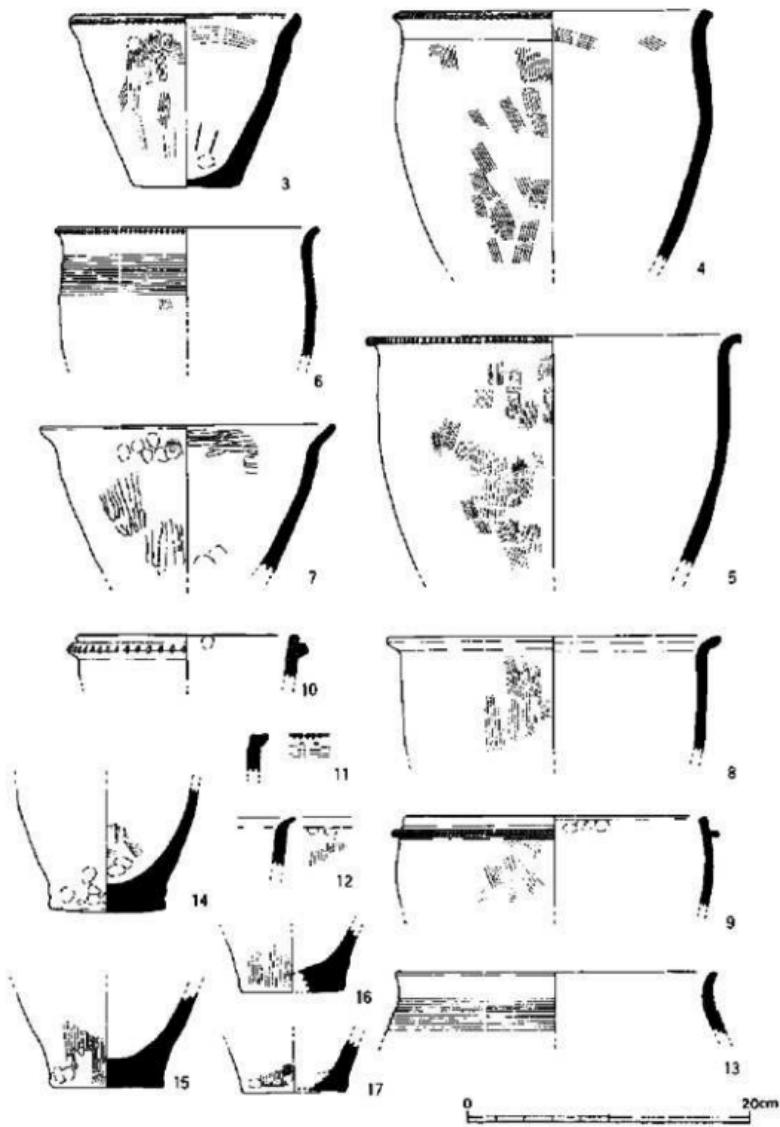


Fig. 6 TR 3 出土遺物実測図（弥生土器）

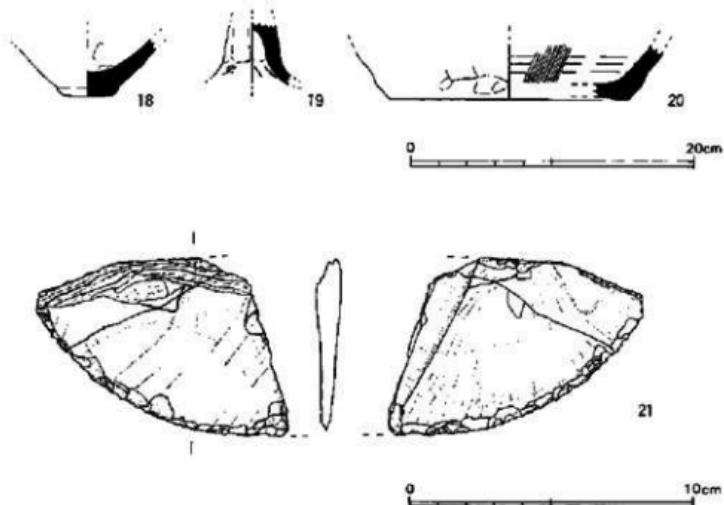


Fig. 7 TR 3・6 出土遺物実測図（弥生土器）

## (2) TR 6

$3 \times 4$  mの試掘坑で、TR 3 の北東方約60mに位置する。

### 層序 (Fig. 8)

現地表面下3.7mまでの確認を行った。上層堆積状況は、第I層：表土、第II層：明灰褐色粘質土、第III層：明灰褐色粘質砂礫、第IV層：暗灰色砂礫、第V層：暗灰褐色粘質土、第VI層：暗褐灰色粘砂礫土、第VII層：暗褐色粘質土、第VIII層：青灰色砂礫、第IX層：暗灰色粘土、第X層：青灰色砂礫、第XI層：暗灰色粘土、第XII層：青灰色砂礫である。TR 3と同様に、砂礫土と粘土との互層をなす。表土下約2mの第IX層、及びそれに続く第X層から弥生土器細片36点が出土しており、その下面の第XI層で杭跡を検出した。また、第III層から備前焼1点が、第IV層から土師質土器片1点がそれぞれ出土した。第XI層の杭跡に間

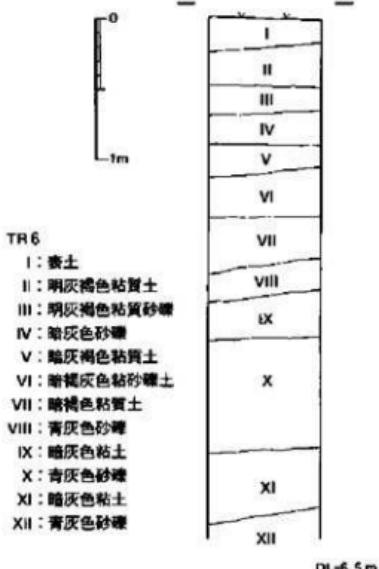


Fig. 8 TR 6 土層断面図(柱状模式図)

しては詳細な確認ができないかったため明らかにはしないが、少なくとも弥生時代の遺物包含層が存在することは明確であり、本格調査が必要と判断された。

**出土遺物（Fig. 7）**

図示できたのは第Ⅲ層出土の備前焼片1点のみである。20は擂鉢の底部片で、内面には縦一斜方向の条線を施す。

検査番号	遺物番号	器種	口径 底面 側面 形状 法蓋 (cm)	断面・文様	手 感	備考
Fig 3-1	TR3 第9号	朱绘土器 盖	— (12.5) (11.5) —	上縁部～底部のみ残存。体部は内 方に立ち上がり、底部はほぼ直立して いる。	外表面はミガキ調整。底部は底 面のハケ調整の後、ミガキを施す。 内面は器表側の剥落が著しく、 調査不明。	腹部外縁に傷の付 着がみられる。
* - 2	*	*	— (18.7) 16.2 6.6	上縁部以上は欠損。底部はやや凸 状をなす平底で、体部は内寄して 立ち上がる。	外表面は被方側のミガキ調整。底 部付近には擦痕跡を有す。 内面はナゲ・底面押圧を施し、 底部付近には擦痕と凹凸部に よる仔細がみられる。	外縁には部分的に 傷が付着。
Fig 5-3	*	*	15.8 12.3 — 7.4	12.0型形。底部は平底で、体部は やや内寄して外方に立ち上がり、 上縁部は強く側曲して外傾し、底 部は直す。	外表面は底面のハケ調整。口縁部 直下には横位のハケ・擦痕跡を 有す。 内面は底面押圧・ナゲ調整。口 縁部直下には擦痕のハケ調整。 底部付近には擦痕と凹凸部に よる仔細がみられる。	
* - 4	*	*	21.4 (18.0) — —	F型部～底部は欠損。体部は内 方に立ち上がり、口縁部 直下で強く側曲して外方にのび、 底部は凹い円錐をなす。 1) 縁部外縁には有輪する痕み目 を有す。	外表面は底面～斜位のハケ調整の 後、ナゲ調整。 内面はナゲ調整。	
* - 5	*	*	26.8 (16.6) — —	F型部～底部は欠損。体部は内 方に立ち上がり、口縁部 直下で強く側曲して外方にのび、 底部は丸くおさめる。	外表面は底面のハケ及びナゲ調整。 内面は調査不明。	
* - 6	*	*	18.5 (19.4) 18.1 —	F型部～底部は欠損。体部は内 方に立ち上がり、口縁部 直下で強く側曲して外方にのび、 底部は直す。 1) 縁部直下外縁には沈痕跡。1) 縁部外縁には剥み目を有す。	外表面は被方のハケ・ナゲ調整。 内面はナゲ調整。	外縁には部分的に 傷が付着。
* - 7	*	*	30.8 (10.0) — —	F型部～底部は欠損。体部は内 方に立ち上がり、口縁部 直下で強く側曲して外方にのび、 底部は丸くおさめる。	外表面はミガキ調整。口縁～斜部 にはハケ・擦痕跡を有す。 内面は擦痕跡・ナゲ調整。 口縁～斜部には横方向のミガキ 調整を施す。	*
* - 8	*	*	23.6 (8.8) 21.9 —	11.5型のみ残存。体部は直立し て立ち上がり、口縁部は強く側 曲して外傾し、底部は丸くおさ める。	外表面は底面のハケ調整。 内面はナゲ調整。 1) 縁部は内外面ともナゲ調整。	外縁には傷の付着 がみられる。
* - 9	*	*	21.2 (6.5) — —	11.5型のみ残存。体部は内 方に立ち上がり、底部は直す。 1) 縁部直下外縁には擦痕跡と内 部を有す。端面に有輪する痕み 目を有す。	外表面は底面～斜位のハケ調整。突 部の上下は横方向のナゲ調整。 内面は擦痕跡・ナゲ調整。	外縁には傷の付着 がみられる。
* - 10	*	*	15.0 (3.3) — —	11.5型のみ残存。体部は直立して 立ち上がり、底部は直す。 1) 縁部直下外縁には擦痕跡と内 部を有す。端面に剥み目を有 す。	外表面はナゲ調整。 内面は擦痕跡・ナゲ調整。	
* - 11	*	*	— (2.9) — —	11.5型のみ残存。体部は直立して 立ち上がり、底部は直す。 1) 縁部直下外縁には擦痕跡と内 部を有す。端面に剥み目を有 す。	外表面とも擦痕跡・ナゲ調整。	外縁には傷の付着 がみられる。

表2 遺物観察表1

探査番号	遺物番号	種類	重量 kg	口径 mm 断面 形状	形態・文様	手 細	備 考
Fu6-12	TR3 第3種	食生上器 蓋	— 13.6 —	11縫合のみ残存。体部は内凹形 に立ち上がり、瓶く頭曲して口縫 部は外方にのせる。端部は丸くお さめる。	外面部は瓶底のハケ調整。 内面部はナデ調整。	外面部には僅の付着 がみられる。	
* - 13	*	*	22.5 14.5 — —	11縫合のみ残存。体部は直線的に 内上方に立ち上がり、11縫合部は外 方に立ち上方にのせる。 11縫合部下外面部には6本以上の大 縫を残す。	内外面ともナデ調整。口縫端部 は器表側の剥落が強烈で、本底 の端部である右角が不明。		
* - 14	*	*	18.8 — 8.6	上縫合～底部のみ残存。体部は直線的に 内上方を呈する小瓶で、体部は内 向外して外方に立ち上がる。	体部外側は剥落が著しく調整不 明。底部外側は剥落跡付近ナデ 調整。 内面部は横一筋位のハケ・ナデ調 整。		
* - 15	*	*	— 16.8 — 8.0	底部付。底部は平底で、体部は内 向外して上方に立ち上がる。	外面部は瓶底のハケ調整の後、右 位の2ガタ調整で、底部には指 痕跡跡を加える。 内面部は剥落著しく、調整不明。		
* - 16	*	*	— 44.6 — 7.6	底部付。底部は平底で、体部は内 向外に上方に立ち上がる。	外面部は瓶底のハケ調整。 内面部・底面はナデ調整。		
* - 17	*	*	— 13.8 — 7.0	底部付。底部は平底で、体部は内 向外に上方に立ち上がる。	外面部は瓶底のハケ及びナデ調 整で、剥落痕跡がみられる。内面 部は剥落著しく調整不明。 底面はナデ調整。		
Fu7-18	TR4 第4種	土師器 地蓋	— 44.1 — 2.8	底部付。底部は内凹形を呈する瓶 (4.1) 外部は内凹して外方にのせる。 —	外面部・底面ともナデ調整。 内面部には瓶底より外縁による付 着がみられる。	外面部には僅の付着 がみられる。	
* - 19	*	*	— 44.0 — —	— 瓶底部のみ残存。瓶底部はやや平 (4.0) フラット状をなし、瓶底は外向外 に立ち上り、瓶底部は内凹して 外方に立ち上り、瓶底部は内凹して 外方に立ち上る。 —	外面部は瓶底上部によるナデで調 整した後、ナデ調整。瓶底は 右側するタキナ調整の後、ナデ 調整。 内面部はナデ調整。瓶底は瓶底工 具による押さえを右回りの動き と共に施した後、ナデ調整。		
* - 20	TR6 第6種	漆漆器 器身	— 74.0 — 17.0	底部付。底部は平底で、体部は内 向外に上方にのせる。 — 内面部には瓶～斜方側の条縫 (4条 /cm) を残す。	ロクロ底部。外面部ともロクロ によるナデ調整。		
* - 21	TR3 第3種	スクレーパ	全长 6.0 全幅 7.9 全厚 0.6 重量 48 g	右半部は欠損。扁平を半円形を呈 するものとみられる。	漆漆の削片を基材とし、背面側 には一部漆先端を残す。刃部は 刃刃である。	サスカイト鋸	

表3 遺物観察表2



SK 1 検出状況



同上 遺物出土状況





平鉢（109）出土状況



有孔板状木製品（184）出土状況





3



69



23



52



80



32





30



113



77



157



171



31

弥生前期土器 (30・77), 同石器 (31), 弥生後期土器 (171), 古式土師器 (113・157)





TR 3 調査前近景（東より）

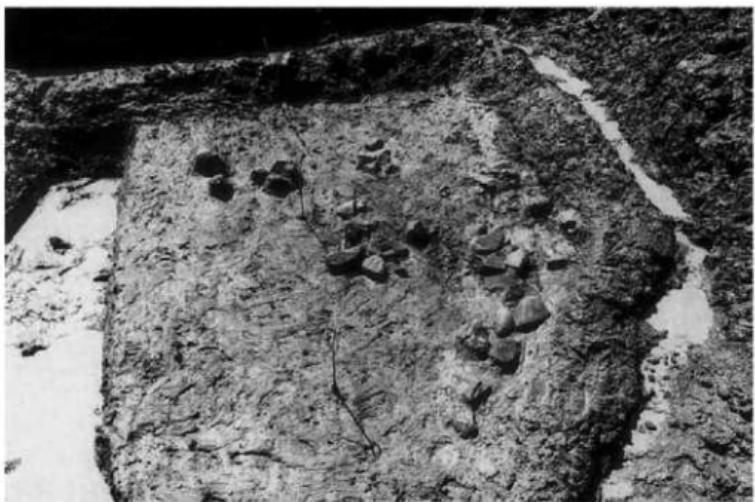


TR 3 第V層 検出状況（西より）

PL 2



TR 3 第4層 遺物出土状況（東より）



同上（北より）



TR 3 第Ⅲ層 遺物出土状況（東より）



同 上（東より）

PL 4



TR 6 作業風景（北西より）



TR 6 西壁土層断面（東より）



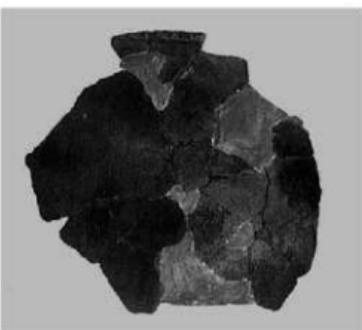
1



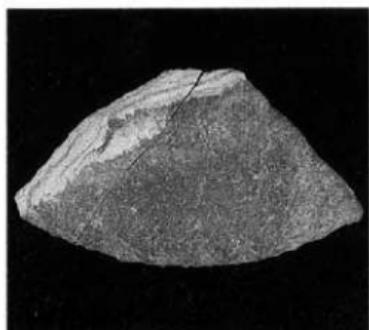
2



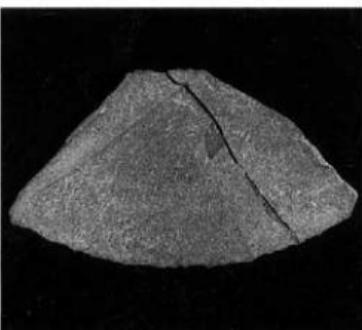
7



5



21 (表)  
TR 3 出土遺物

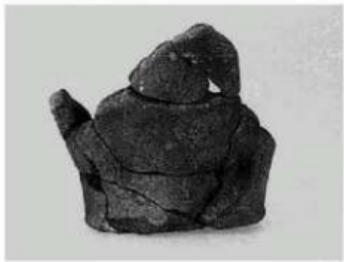


21 (裏)

PL 6



TR 3 第四层 遗物出土状况



14



15



18



20

TR 3 · 6 出土遗物

## 第Ⅳ章 本 調 査

### 1. 調査の方法

西ノ谷道路は、米柄神社が載る丘陵の前方に広がる低湿地に占地する。その範囲を明確に把握するには至っていないが、丘陵西側の谷部を含んで数千m<sup>2</sup>の広がりをもっているものと考えられる。調査は遺跡を東西に2分するかたちで走る市道線を界に西側を1区、東側を2区として調査区を設定した。調査面積は1区が600m<sup>2</sup>、2区が500m<sup>2</sup>である。試掘調査により遺物包含

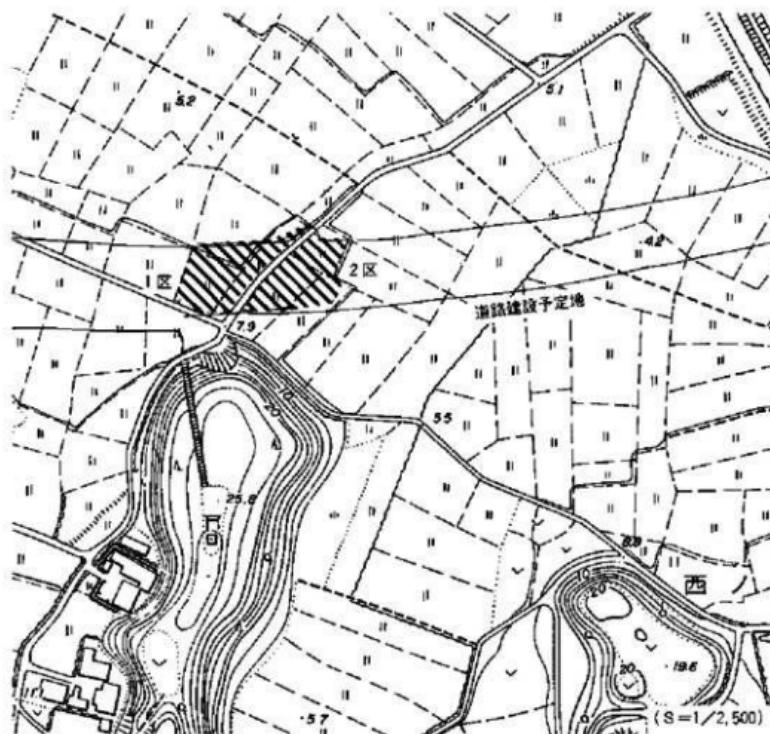


Fig. 9 本調査区位置図

材及び生活面は、地表下2~3mにあることから発掘作業の保安上あるいは作業の速やかな推進をはかるため調査区に長さ9.5mの鋼矢板を打ち込み囲繞した。1区は全周を開いた。2区は道路側と南北面を開いたが、東面は安全な勾配で掘り下げた。表土層以下は古墳時代の遺物包含層直上までは、重機を使って掘削し、古墳時代の遺物包含層以下弥生時代の遺物包含層・遺構検出面までは人力で慎重に掘り下げた。遺物の取り上げ及び平面実測は、公共座標第IV系による基準点を使用した。包含層出土の遺物については4mグリッド毎に取り上げたが、遺構出土及び原位置を保った状態で出土した遺物については原則として20分の1で平面実測を行い、必要に応じて40分の1あるいは100分の1の平板測量を併用した。

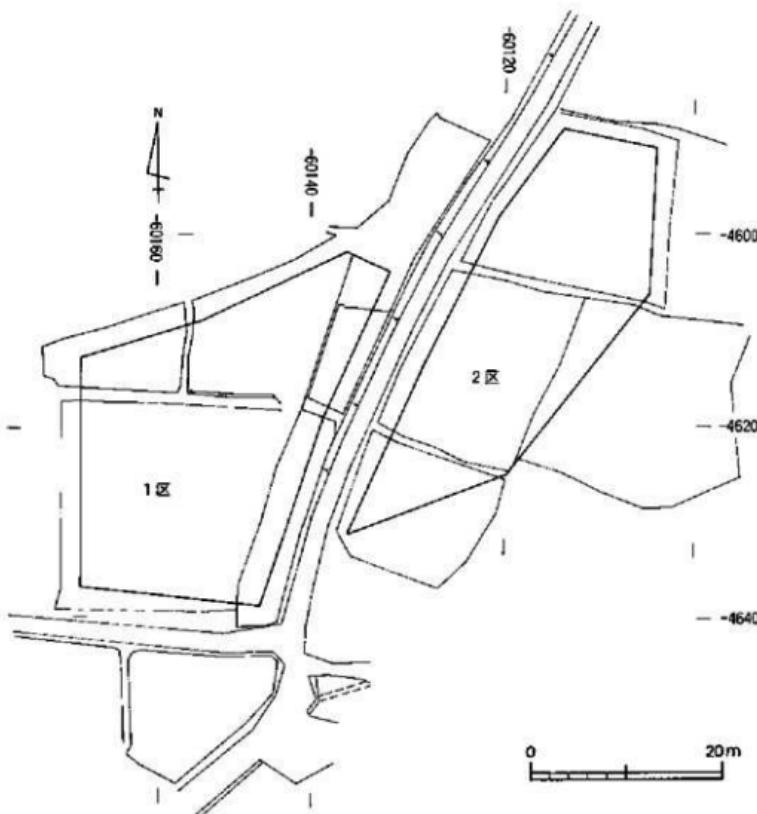


Fig. 10 本調査区位置図2

## 2. 1区の調査

### (1) 基本層序 (Fig. 12)

1区の層序は、調査区南面の壁と道路沿いの東側の壁の一部及び、調査区内に5本のバンクを残して層序の観察を行った。南壁と東壁では表土（I層）下1~1.5mの深さまでは、礫層

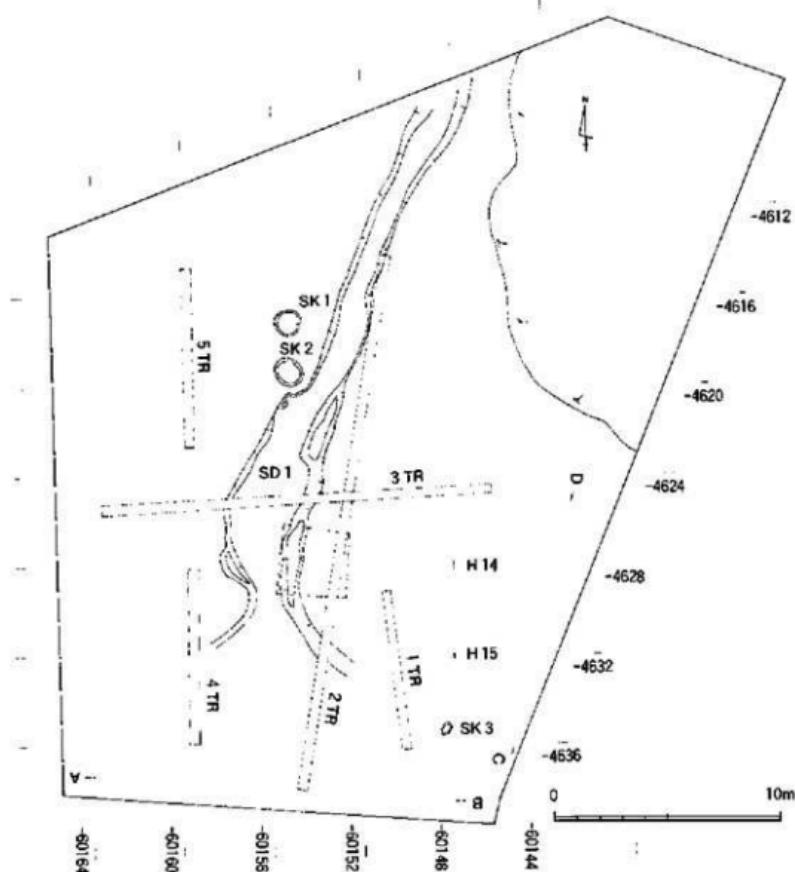


Fig. 11 1区検出遺構・トレーンチ・セクション位置図

と粘土層が交互に整合を保って堆積(I~IV層)しているが、V層より下層については、礫層・砂礫層・粘土層が無秩序的に複雑な堆積を示している。複雑な堆積を示す東・南壁の層準は、調査区内で十分に面的な広がりを把握できないものも多い。これらの砂礫層は、南の丘陵及び南に伸びる谷部から洪水などに際して流出したものや堆積性の堆積物であり、VI・VII層などの粘土層は、植物遺体など腐食物を多く含んでいることから比較的安定している環境下で堆積、あるいは四万十川からの逆流現象による冠水時に沈殿堆積したものである。

これらの層準の中で遺物を多く含み安定しているのはX層とXIII層(南壁では確認できない)である。X層は南壁に一部を切られながらも安定した堆積をしており、南壁の東側では後述するように古墳時代前期の包含層(VII層)を載せており、X層上面にも原位置を保った状態で同時期の遺物を検出することができた。XIII層は南壁では確認し得なかったが、東壁ではXII層の下に堆積している。本来は南壁にも堆積していたと考えられるが、XII層(礫層)によって削られたものと考えられる。このXIII層は調査区内にも安定して広がっていることがトレンチ1~4によって確認することができる。そしてXIII層上面には弥生時代前期の遺物包含層D層を載せている。

## (2) 各トレンチの層序

これらのトレンチは弥生時代前期遺物の出土層位及びその堆積状況を明らかにするために設定した。南・東壁に対応する層準も存在するものの各壁では認められない堆積もあることから、トレンチ内のみで確認された層準についてはA~Iの層名を付した。

### ① トレンチ2の東壁層序

南端より7mまではXII層が、それより北にはXIII層が傾斜斜しながら安定した堆積を示す。その上には部分的に砂礫層が堆積する所もあるが、弥生時代前期の遺物包含層D層がほぼ整合で堆積している。南部のXII層は洪水による礫層の堆積でありXIII層を抉り取ったものであろう。D層の上面はA層(灰青色砂礫の無遺物層)で被われ、A層は北に向かって層厚を増しており、北端ではA・XIII層を切って急に厚くなっている。A層上面の凹地にはVII層が堆積する。

### ② トレンチ3北壁

XIII層が基層にあるが、XIII層を切るSD1を境に西と東とでは層準が異なっている。東側はXIII層の上にD層が整合で堆積、D層はSD1に落ち込んでおり、傾斜部分には水辺特有の木葉、小枝などの植物腐食物が堆積している。SD1は洪水砂礫層B層(灰色砂礫)によって完全に埋没したことがわかる。西側は無遺物層G・H層が堆積し、その中の砂礫層が抉るように堆積している。この砂礫層はXII層と同じ層準であることが考えられるが追跡することができなかった。当層準は泥炭を大きく含んでおり洪水による堆積層と考えられる。

### ③ トレンチ5東壁

調査区西北に設けた長さ7.8mのトレンチである。ここではXIII層は確認できない。もっと下層に潜っているものと考えられる。G層の上には一部砂礫をはさんでD層が堆積しているが、

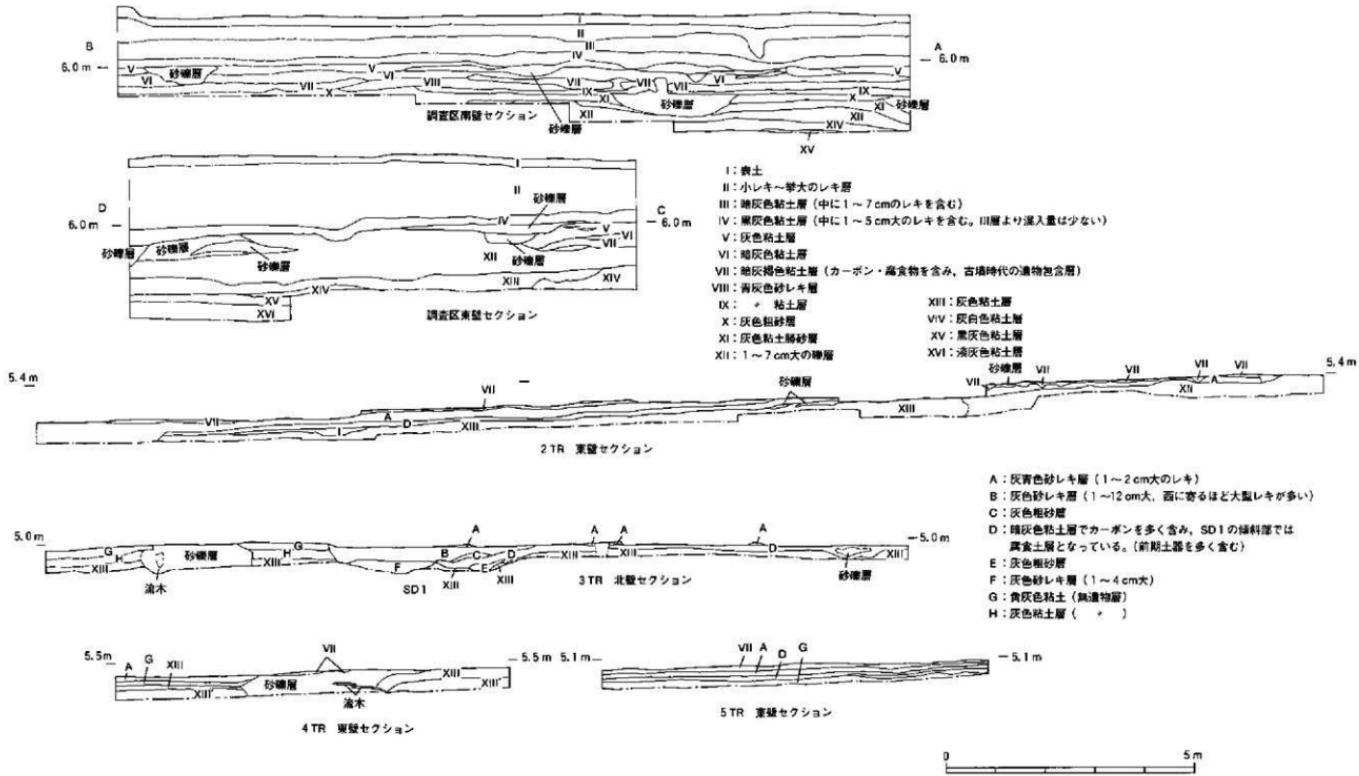


Fig. 12 1区基本層序



ここでは前期土器は全く出土していない。D層の上にはA・VII層が安定した堆積を示している。

#### ④ トレンチ4東壁

調査区の西南に設けた長さ8mのトレンチである。XII層が早く堆積しており、その中央を切るように洪水による砂礫層の多い堆積があり流木を多く含んでいる。この砂礫層は XII層に対応する可能性がある。また XII層上・下で色調にわずかな違いがあるところからやや褐色色を帯びた下層部を XIII層とした。北半部の XIII層上には A・G層が砂礫層堆積後に沈澱堆積している。

以上1区の層序について見たが、表示した層準より下層についても、粘土と砾層が交互に堆積しており、この付近の沖積層の形成過程を知ることができる。先述のように洪水と四方十川の逆流現象による沈澱堆積とが交互にくり返された結果であり、人々が定住生活を営むには相当不安定な環境であったと考えられる弥生時代前期末に XIII層を基盤とする生活面が確認されたが、それまでは人工遺物の存在を確認することができない。従って XIII層が形成された後、弥生時代前期末に至って比較的安定した環境下で人々の最初の営みが開始されたものと考えられる。しかしながら中期以降の遺物が全く認められず古墳時代前期まで空白が続く。この空白期は前期末という限られた一時期でこの地を放棄したのか、中・後期の遺構・遺物が相次ぐ洪水によって流出されてしまったのかということは、今次調査結果からは明らかにすることができない。また古墳時代以降現代までの空白期についても同様のことが考えられる。ただ表土（現耕作土）直下は砂礫層となっており、更に下層についても旧耕作土層の存在が認められない。しかしながら天正年間に作られた長宗我部地検帳によれば水田化されていた記録があり、少なくとも近世以降水田経営がなされていたと考えなければならない。従って度重なる洪水中に水田は流失しそのつど新たな普請が繰り返されたものと考えられる。

## (2) 調査成果

### ① 弥生時代前期の遺構と遺物

SK1 (Fig. 14, 15)

楕円形のプランを有し長軸1.17m、短軸1.10m、深さ10cmを測る。床面はほぼ平坦面をなし壁は斜めに立ち上がる。埋土は炭化物を含んだ暗灰色粘土の単純一層である。遺物は土坑の縁辺部から甕(22・23・25・26)・鉢(24)の比較的大形の破片が出土している。甕底部(26)は床面に接しているが、他のものは検出面付近からの出土である。22・23は大きなカーブを描いて外反し口唇部には刻目を有する。外面ハケ調整を施すが上脣部で原体の方向が異なっている内部の指痕压痕と相俟って接合部で生じた変化の可能性がある。24は口縁端部をつまんだ強い横ナデを行い、下端に刻目を施す。口縁下に刻目突起を貼付している。25は口縁外面に1条、上脣部には3条の微隆帯を貼付。内外面ナデ調整。25は粘土中にチャートを多く含むなど色調・粘土共

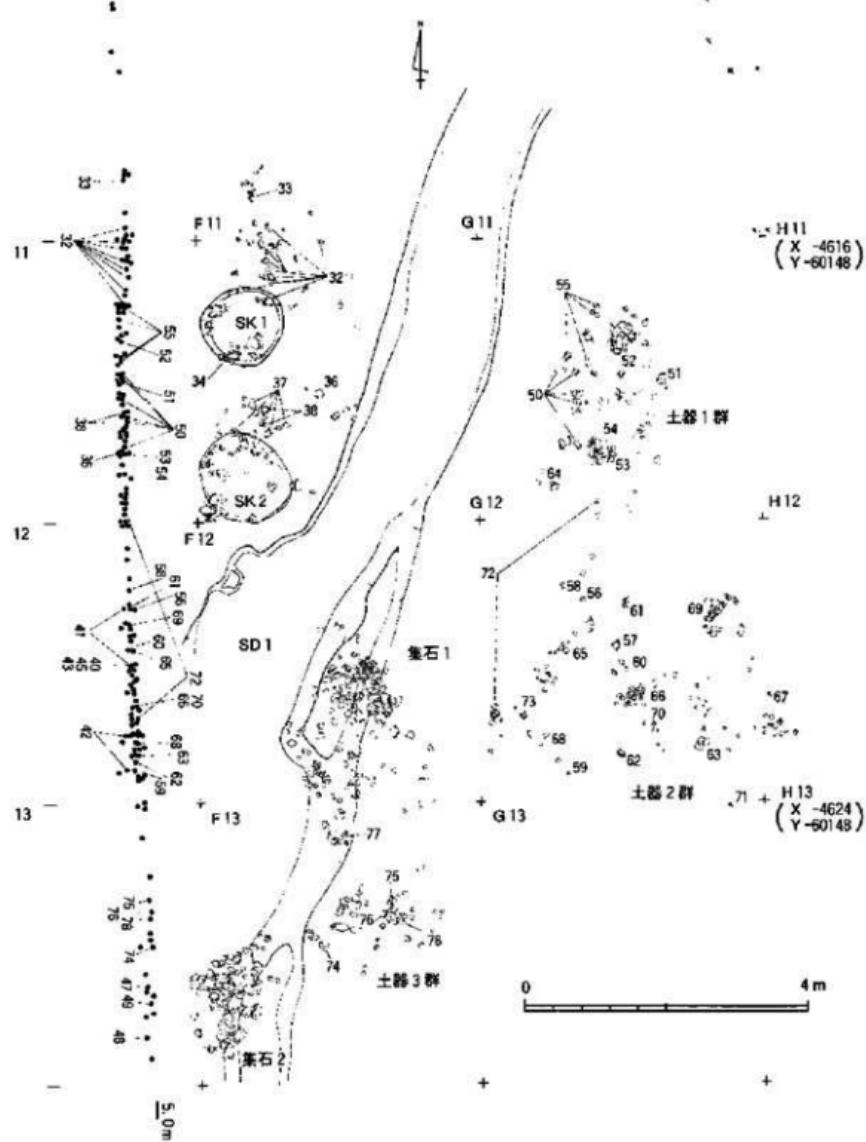


Fig. 13 弥生時代前期の検出造構及び遺物出土状況

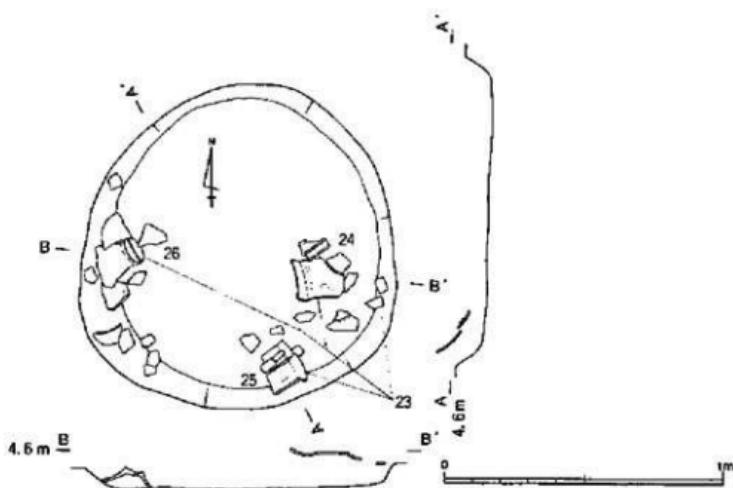


Fig. 14 SK1 及び SK1 遺物出土状況実測図

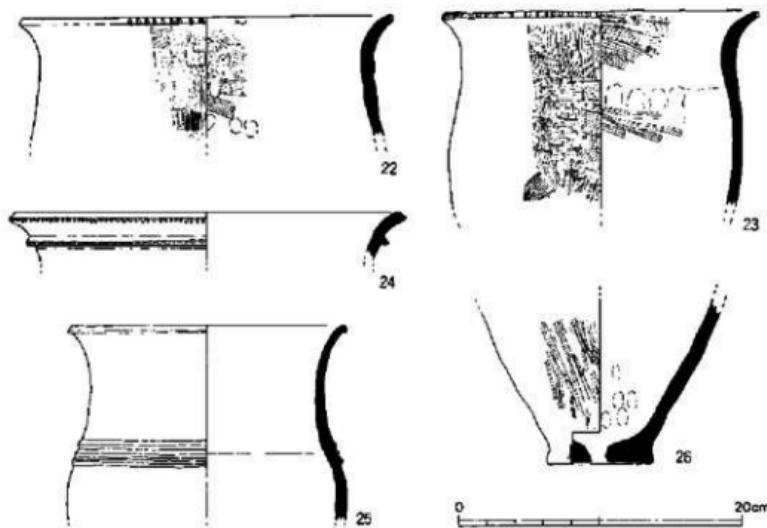


Fig. 15 SK1 出土遺物実測図  
器 III - A - ①類(22・23)・同 VIII 類(25)・  
同底部(26)・鉢 I 類(24)

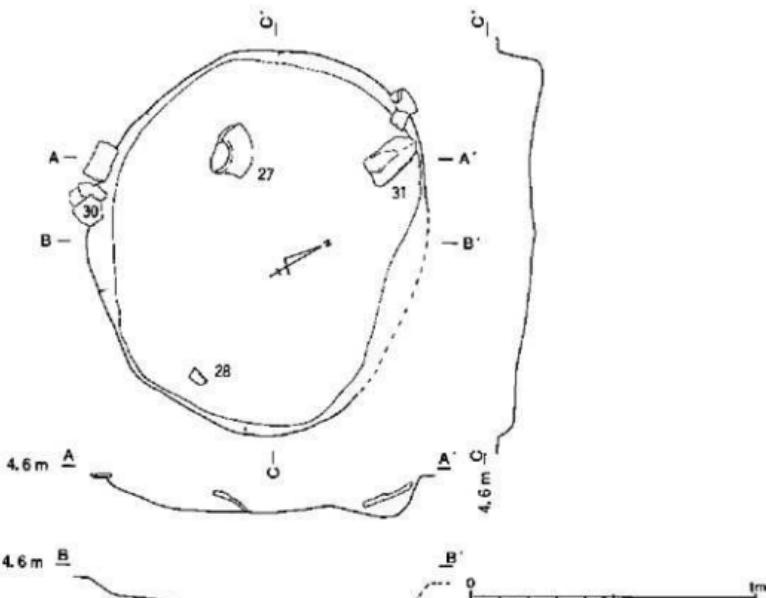


Fig. 16 SK 2 及び遺物出土状況実測図

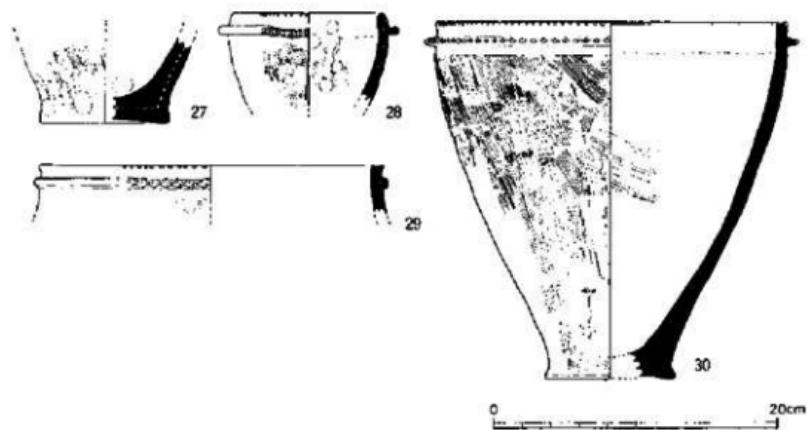


Fig. 17 SK 2 出土遺物実測図  
壳 VI - A - ② - ④類 (29・30)・  
壳 VI - A - ① - ④類 (28)・同底部 (27)

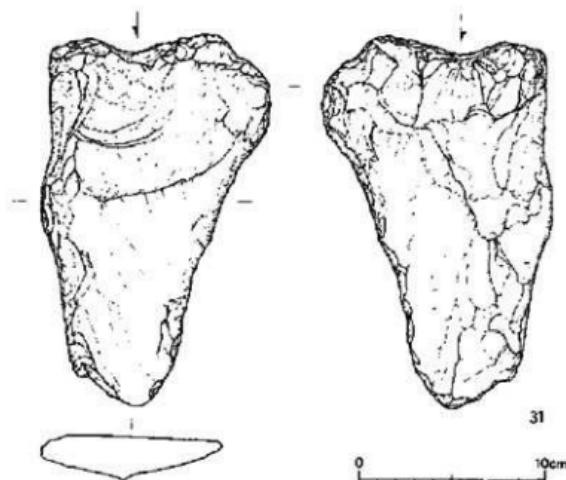


Fig. 18 SK 2 出土打製石器実測図

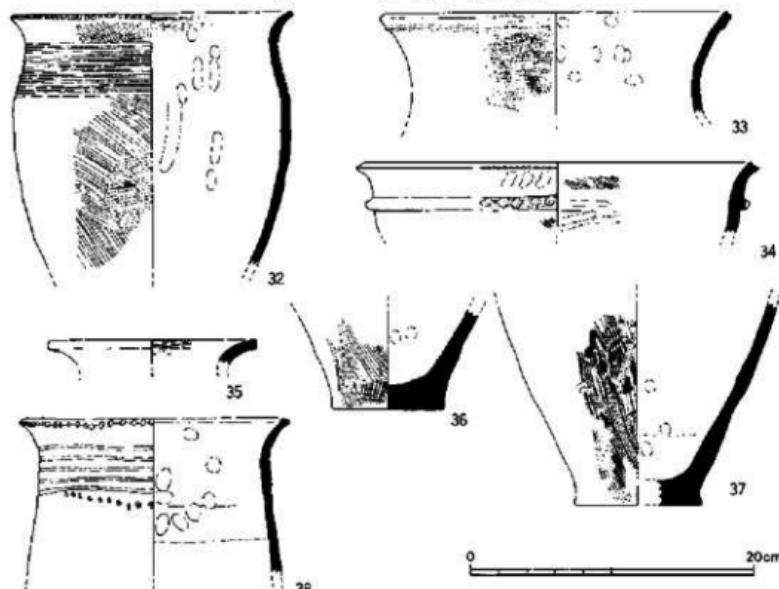


Fig. 19 SK 1 の周辺(32~34)及び SK 2 の周辺(35~38)出土遺物実測図  
 灰 I - A - ①類(32)・灰 I - B - ①類(38)・灰 VIII 類(33)  
 灰 I 類(35)・鉢 I 類(34)

に他の土器とは異なっている。26は台形状の底部を有し焼成後穿孔をする。外面は縦方向のヘラミガキ、内面には指痕圧痕が顕著である。24以外は外面が全面に焼けている。すべて前期末に属し、SK 1が堆积する一時期に廃棄されたものである。

なお、後述するようにSK 1の北側には多量の同時期の土器が出土しているが、SK 1との関連が考えられる。

#### SK 2 (Fig. 16・17・18)

SK 1の南2mにある。梢円形のプランを有し長軸1.37m、短軸1.2m、深さ7cmを測る。東側の壁の一部を十分つかむことができなかったが土坑として把握することは可能である。検出面には一面に炭化物が広がり、埋土にも炭化物を多量に含んでいる。床面は凹凸が見られ壁の立ち上がり角度も場所によって異なる。遺物は底底部(27)が床面に接する状態で、打製石器(31)が北側の壁に倒れかかるような状態で出土している。28・29は検出面付近で、30は肩にかかる状態で出土している。28・30は口唇部に刻目を有し、口縁下には刻目突帯を貼付している。外面はハケ調整を基調としている。(27)の底底部付近及び(28)の内面にはヘラ磨きが施される。すべて外面が焼けている。SK 1と同時期であり同様の廃棄パターンが考えられる。

#### SK 1及びSK 2周辺出土の遺物 (Fig. 19)

SK 1・2の周辺からは、図示した土器を中心に多量の土器片が集中して出土している。なかには壳(32・37)のように土坑の検出面出土の土器と接合するものもある。鉢(34)は、検出面直上の出土であるところから周辺出土の遺物として扱った。32は如意状口縁を有し、口縁に刻目、上脣部に10条のヘラ彫沈線を施している。33は口縁部に微隆起帯を貼付する壳、34は口縁部を強く擒み出し下端に刻目、口縁下に刻目突帯を貼付した鉢である。35は底口縁部、38は口縁端を擒み出し下端に刻目、上脣部に5条の沈線帯を有しその下に竹管状原体による刺突文を配する。36・37は底底部である。以上のうち壳はすべて焼けしており、底底部の2つは被熱赤変している。これらの土器はすべてSK 1・2と同時期の前期末に属し、一連の廃棄遺物として把握することができよう。

#### 集石1及びその出土遺物 (Fig. 20・21・22)

集石1はSD 1の東側肩部に集中する砾群で、2×2.5mの範囲に集中するがSD 1の立ち上がり部にあるテラス部分からは浮いている。これらの砾は、四万十川群に多く認められる砂岩の円角砾で構成されており、砾群の中には大小の土器片を多く含んでいる。図示し得たものは壳のみである。39・41は如意状口縁を有し、40・41は口縁を擒み出し下端に細い刻目、40は上脣部に8条以上の沈線帯、41は1条のヘラ彫沈線を有す。42は口縁下に刻目突帯、41は口縁部に無刻の太い突帯を貼付し内面に1条の沈線を配す。46は大きなカーブを描いて外反する口縁を有し口縁端部を強く擒み出している。44・45は底底部である。例外なく焼けている。これらの土器もすべて前期末に属する。

#### 集石2及びその出土遺物 (Fig. 23)

集石1の4m南にある。SD 1の検出面上にあり1.1×1.6mの範囲に集中する。石材及び土器の出

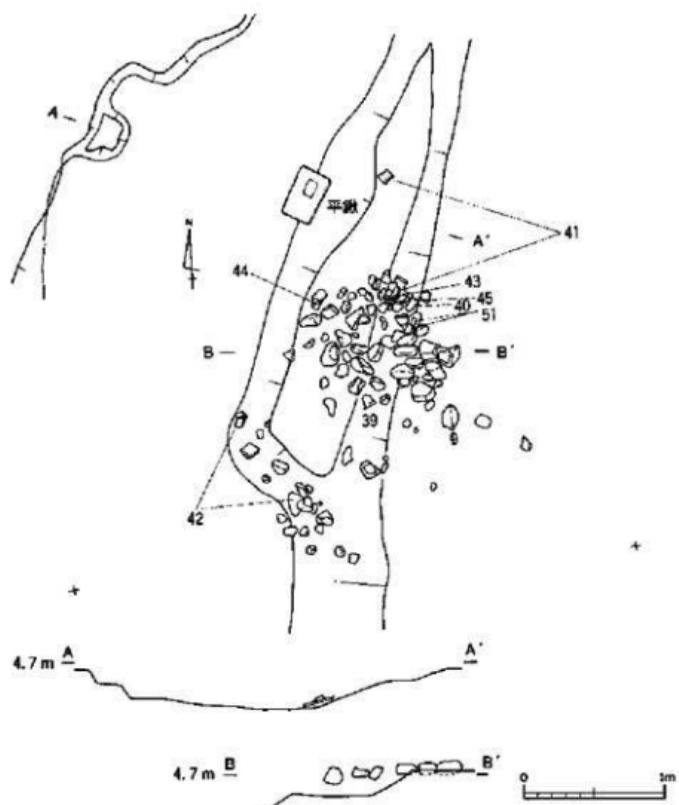


Fig. 20 集石 1 及び SD 1 平地出土状況実測図

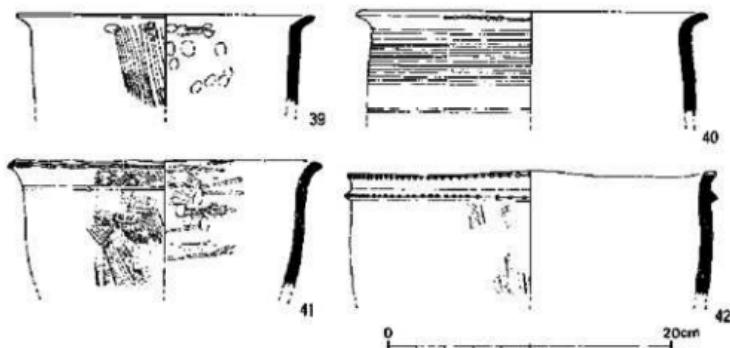


Fig. 21 集石 1 出土遺物実測図  
壳 I - ① - ② 瓶(39)・同 I - B - ① 瓶(40・41)・  
同 VI - A - ② - ③ 瓶(42)

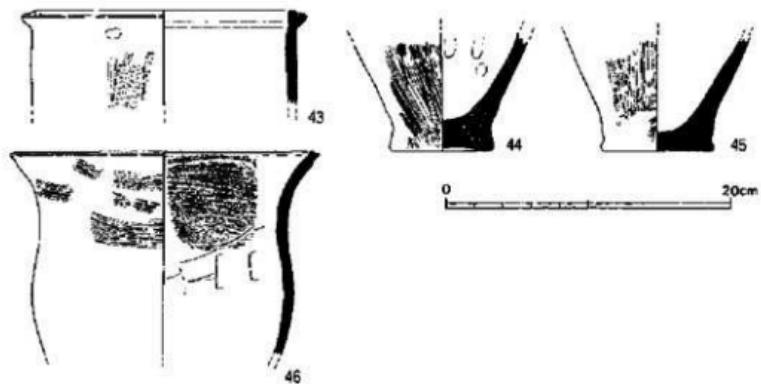


Fig. 22 集石 1 出土遺物実測図  
堺 III-B-②類(46)・  
同 VII-B類(43)・同底部(44・45)

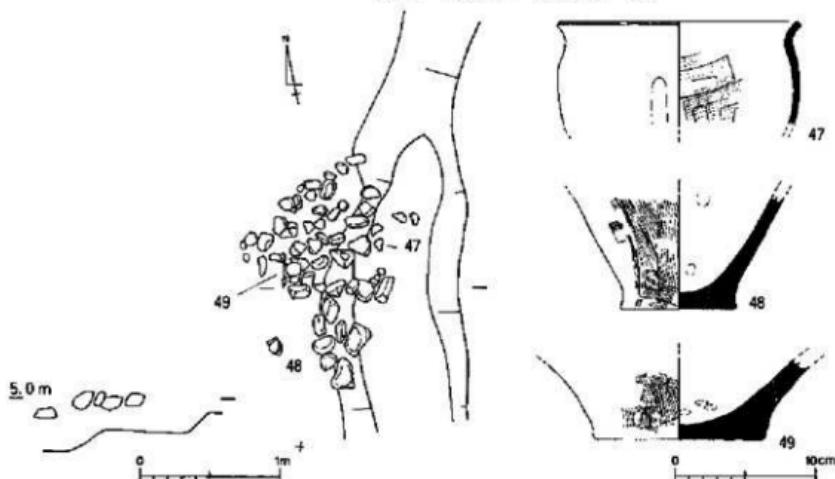


Fig. 23 集石 2 及び出土遺物実測図  
堺 I-A-③類(47)・同底部(48)・同底部(49)

土状況も集石 1 と全く同じである。47はII層部に細い沈線を有した如笠状口縁を有する堺、48は堺底部、49は堺底部である。図示した 3 点も例外なく外面が煤けている。すべて前期末に属する。

集石 1・2 は、SD 1 が機能しつつも壁側に泥が詰まり SD 1 の幅が減じはじめた時期に集石がなされたものと考えられる。その時期は土器の入り具合から判断して、前期末に比定することができる。

### 1群の土器 (Fig. 13・24)

SD 1 の東側に集中する土器群であり XIII 層直上及び XIII 層の上にのる D 層中から出土し、 $2 \times 3.2\text{m}$  の範囲に集中する。これらは 50・55 のように最大 1 m 近くはなれた位置の接合資料もあるが、52 のように 1 個体が折り重なった状態で出土した例もある。50・51 は如意状に外反する口縁を有し、端部を摘み出し下端に細い刻目を施す。52 は口縁部に断面三角形の太い無刻突帯を貼付、内面には指頭によるナデが顕著。53 は直立する口縁端部を摘み出し細い刻目を施し、口縁下に断面三角形の無刻突帯を貼付。54・55 は底部であり、55 は焼成後穿孔する。図示し得たのはすべて壺であり、外面は例外なく焼けている。この他扁平な形状をなした磨製石器(64)が出土している。一見扁平片刃有状を呈するが刃部の研ぎ出しあは全く認められない。純文岩である。出土遺物はすべて前期末に属する。

### 2群の土器 (Fig. 13・24・25)

1群の南にある。 $4.4 \times 3.8\text{m}$  の範囲に集中しており 1群より広く遺物量も多いが、分布密度は緩慢である。出土層位及び出土状況は 1群と同様である。56・58 は小型の壺、59 はラッパ状に外反する口縁部を有し頸部や口唇部に刻目突帯・ヘラ描沈線・刻目で文様を多く施す。内面にも三角突帯を貼付している。60 は無頸壺で内外面ヘラ磨きを施す。63 は底成部である。62 は口縁下に刻目突帯を貼付した鉢である。61 は口縁を摘み出し端部に細い刻目、口縁下に刻目突帯を貼付する。65・67~69・71 は如意状に外反する口縁を有し、67・68 は上胴部に数条の沈線帯を有す。68・71 は口唇部に刻目を施すが他のものは無刻である。66・70 は口縁部がほとんど外反せず端部を強く摘み出し細い刻目を施す。上胴部に各々 4 条のヘラ描沈線を有す。72 は兜底部で断面台形状を呈す。外底に網代の圧痕が認められる。73 は扁平な磨製石器であるが刃部は研ぎ出されていない。壺底部(63)及び壺(65~72)は外面が焼けており、中でも(69)は胴部中位以下被然亦変が激しい。なお(72)は、1群との接合資料であるが 2群に含めた。2群の遺物もすべて前期末に属する。

### 3群の出土遺物 (Fig. 13・25)

集石 1 の南にある。 $2 \times 2\text{m}$  の範囲に分布する。その密度は緩慢であるが一辺群として把握した。74~76・78 は如意状に外反する口縁部を有し、74 は口唇部に刻目、上胴部に 8 条以上のヘラ描沈線帯を有する。77 は頸部から大きなカーブを描いて外反する口縁部を有し、口唇は直をなす。76 以外は外面が焼ける。3群の遺物も前期末に属する。

### D層出土の遺物 (Fig. 26・27)

壺：79 は直立気味の頸部から口縁部が強く外反する。頸部外面には 6 条以上のヘラ描沈線帯を有する。80 は卵形の体部に直線的に立ち上がる口縁部がつく。

壺：82・85~91・83・94 は如意状に外反する口縁を有す。82・85~91・93 は口縁端に刻目を有し、82・85・90・93 は上胴部に数条のヘラ描沈線帯を施し、82 と 85 は沈線帯下に刺突列点文、90 は沈線間に刺突列点文を配す。81・84 は頸部から大きく外反する口縁部を有する

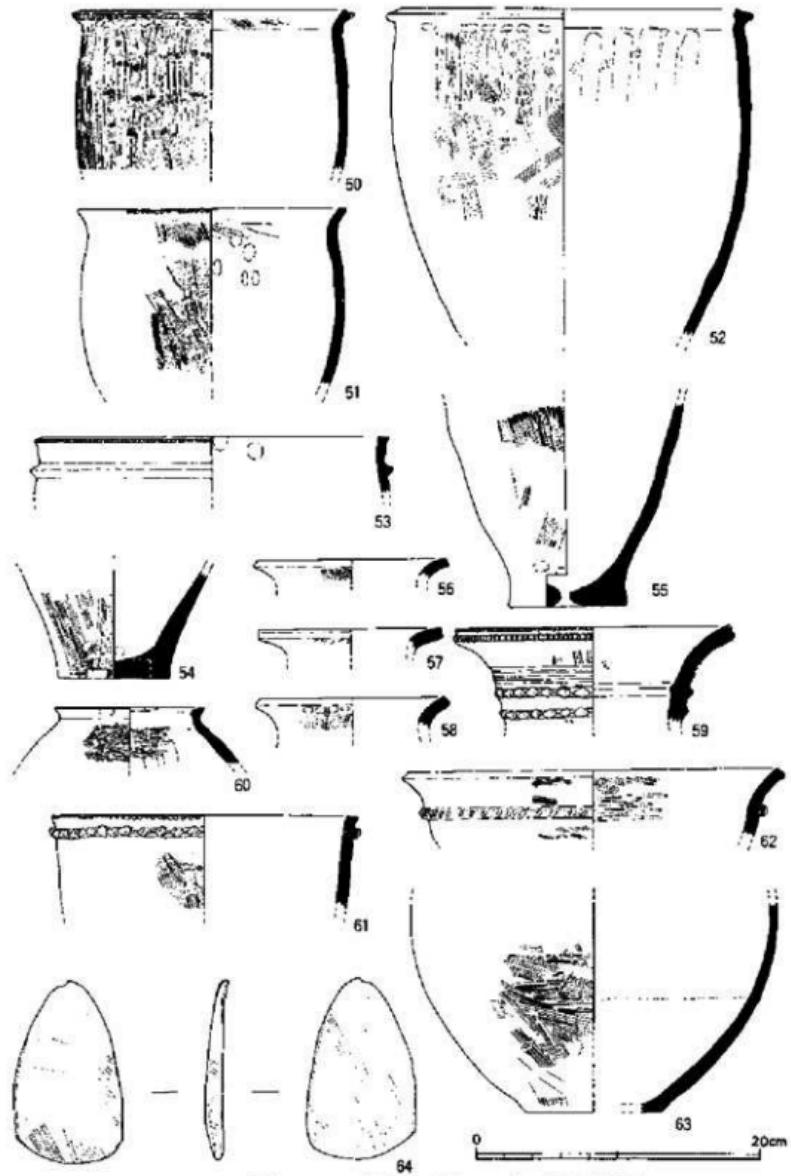


Fig. 24 1群(50~55・64)及II 2群(56~63)出土遺物實測圖  
 繩I - B - ①類(50・51)・同VI - B - ②-③類(53)・  
 同VI - A - ②-③類(61)・同VI - B類(52)・同底部(54・55)・  
 壺I類(56~58)・同II類(59)・同IV類(60)・同底部(63)・  
 鈎I類(62)・石器(64) (64是S = 1/2)

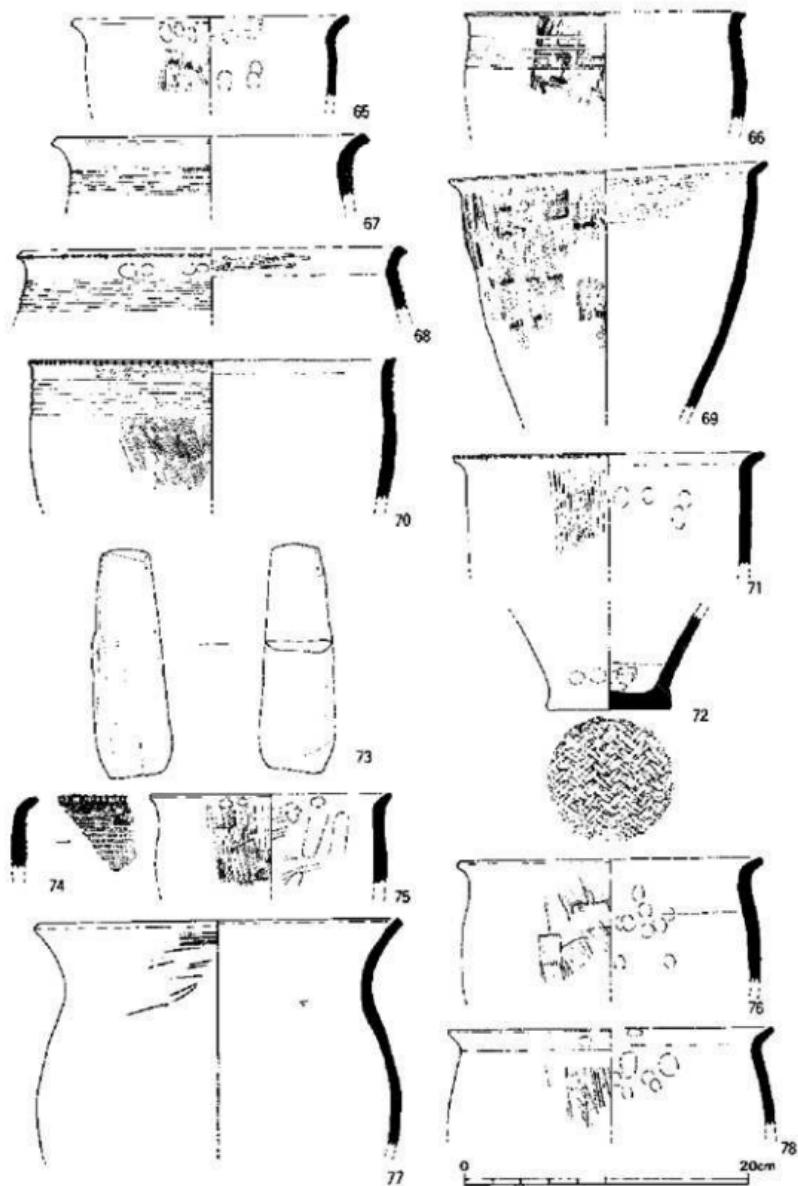


Fig. 25 2群(65~73)及び3群(74~78)出土遺物実測図  
 集Ⅰ - A - ①類(71・74)・同Ⅰ - A - ②類(65・69・75・76・78)・  
 同Ⅰ - B - ①類(68)・同Ⅰ - B - ②類(67)・同Ⅱ - ①類(66・70)・  
 同Ⅲ - A - ②類(77)・同底部(72)・石器(73) (73はS=1/2)

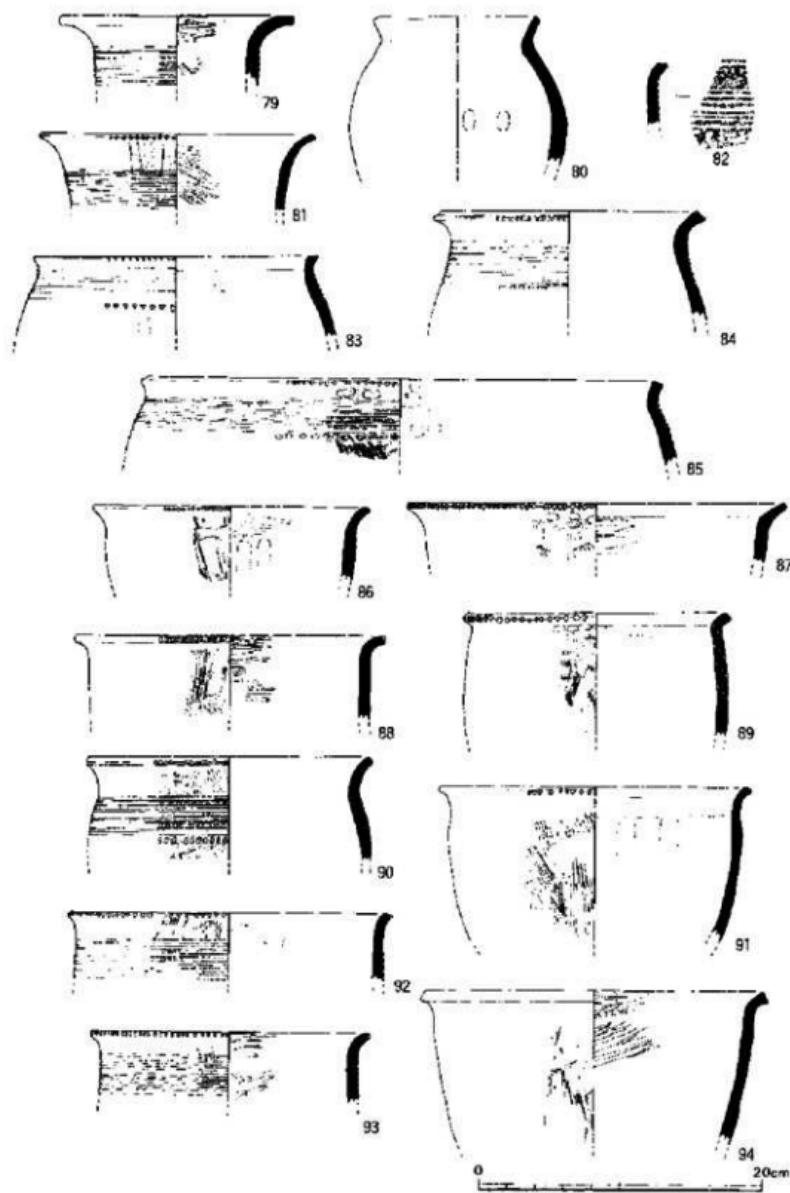


Fig. 26 D層出土遺物実測図  
 点1類(79)・同III類(80)・壳I-A-①類(87・88・90・  
 93)・同I-B-①類(82・85・86・89・91)・同I-B  
 -②類(94)・同II-①類(83・92)・同III-A-①類  
 (81)・同III-B-①類(84)

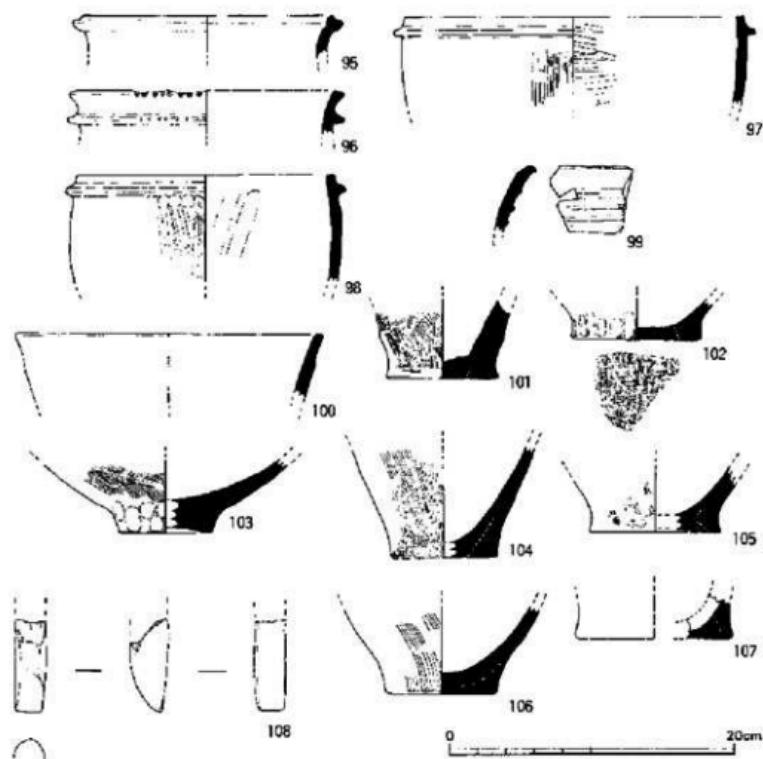


Fig. 27 D層出土遺物実測図

同VI-A-(2)-(3)類(96)・同VI-B-①-(3)類(97・98)・  
同VII-B類(95)・同VIII類(99)・同底部(101・102・104-107)・  
鉢II類(100)・壺底部(103)・有器(108) (108はS=1/2)

タイプで、84は口縁端部を擒み出し強い横ナデを施す。両者共に上胴部に7・9条以上のヘラ描沈線帯を有し口唇端に刻目を施す。83・92は口縁部の外反が弱く、端部を強く擒み出し横方向にナデる。両者共に口唇端に細い刻目、上胴部には数条のヘラ描沈線を有し、83は沈線帯下に刺突列点文を配す。95は口縁部外面に無刻帯を貼付、内面に太い沈線を配す。97・98は口縁下に無刻帯、96は口縁下に刻目帯を有し擒み出された口縁端部にも刻目を施す。99は口縁下に断面三角の小突筋が3条認められる。

鉢：100が1例見られるのみである。直線的に立ち上がり口縁部に至るタイプである。

底部：103は巻底部、101・102・104～107は巻底部である。総じてハケ調整で仕上げるが(102・103)は底部付近に指頭圧痕が顯著、(102)の外底には(72)と同じ網代圧痕がある。以上29点の土器のなかで26点に煤の付着が認められる。

石器：ノミ状を呈する柱状片刃石斧(108)が1点出土している。基部が欠損しているが、幅1.1cm、厚さ1.4cmを測り前面研削している。結晶片岩製である。

#### SD 1 (Fig. 11)

調査区を西南方向から東北方向に走る溝である。確認延長24mを測るが、南部では口部を検出することができなかった。土石流によって流出したものと考えられる。溝幅は1.2～3.8mで集石1・2の付近が最も広い。埋土は基本的に砂礫層であるが、集石付近は3TR北壁セクション (Fig. 12) で示したように木葉や小枝の腐食物を含んだ泥土が東側から流れ込むような状態で堆積している。この泥土はD層に腐食物が入ったものであり、前期土器片を含んでい

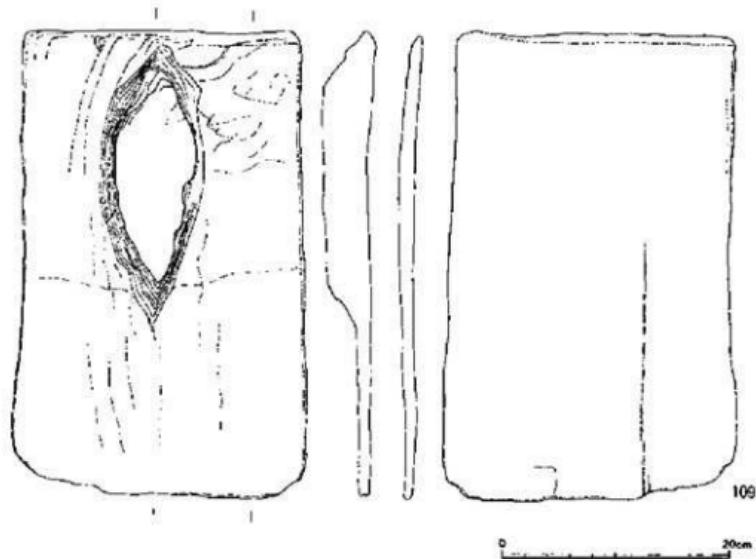


Fig. 28 SD 1 出土の平鏡実測図

るが、砂礫層(B層)には全く遺物を含んでいない。また集石1付近で東壁にかかるように (Fig. 20) 平鏡 (Fig. 28-109) 未製品の完形が出土している。この鏡の材はコナラ亜属に属し、長さ41.6cm、幅24.6cm、厚さ1cmを測る。杏仁形の島状高まりは舟形状の断面をなし、上底の長さは18cm、幅7.0cm、下底の長さ23.6cm、幅9.2cmを測る。長さと幅の比率は2.5:1、身

長と島部長（下底）の比率はほぼ1.7:1である。柄穴と刃部の造り出しのない本製品であるが、平面形は長方形で側縁の反りは全く認められない。

SD 1は、先述したように前期末に機能しながらも、泥土の堆積によって少しづつ幅を減少させつつあり、集石が形成された時には東側のテラス部は完全に埋没していたと考えられる。その後洪水により一挙に砂礫がたまり完全に機能を失したものである。

## ② 古墳時代前期の遺構と遺物

### ③ SK 3 (Fig. 29)

調査区南東隅に位置する。古墳時代前期の遺物包含層 = VII 層直下の当該期の生活面から掘り込まれている。楕円形を呈し長軸56cm、短軸41cm、深さ13cmを測る。床面は中央部が最も深く凹状をなし、壁は斜めに立ち上がる。埋土は炭化物・腐食物（木葉・小枝など）を多く含み、ドングリが多く出土した。

### ④ 古墳時代前期の遺物出土状況 (Fig. 30)

古墳時代前期の遺物出土状況は大きく2つに分けることができる。1つは、調査区東山隅を中心にして安定して広がる VII 層及びその下の XIII 層上面（古墳時代前期の生活面）で検出された一群である。他は VII 層を切って堆積した洪水による砂礫層出土の遺物である。砂礫層が堆積する以前、VII 層は北に向かって傾斜しながらもう少し長く伸び沼状になった湿地へと沈んでいたと考えられる。VII 層及び VIII 層上面出土の遺物は、図示したように集中度が高く、接合資料からもあまり原位置を移動していないことが考えられる。また VII 層には他時期の遺物が全く入っていないことから純粋な前期の遺物包含層として把えることができ、しかも一括性の高い遺物群とすることができる。砂礫層中の遺物は、本来 VII 層あるいは XIII 層中にあったものが、流されたものであろう。土器群北側に多く出土した木片類は、その際に流れついた流木と考えられる。

### VII 層及び XIII 層出土の遺物 (Fig. 31・32)

点：(110)と(111)の2点のみである。110は直線的に立ち上がる。口縁部で端部は尖り気味、111は直線的に立ち上がる口縁部を有し、口縁下に三角突起を貼付、外面に叩きが認められる。

壳：112・113・123・129は、口縁部が長く立ち上がるが屈曲が弱い。口縁部外面の立ち上がり

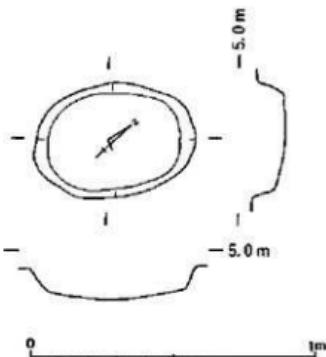


Fig. 29 SK 3 実測図



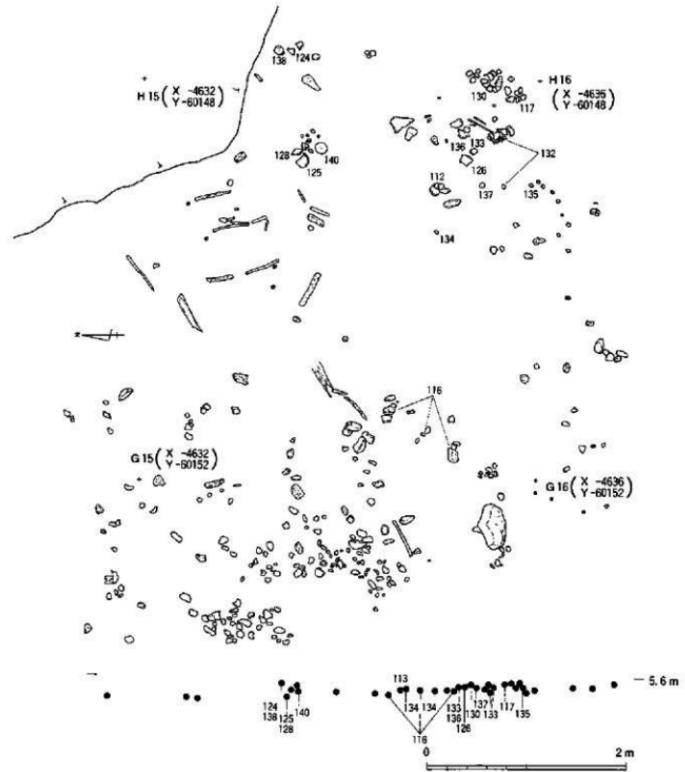


Fig. 30 第VII層（古墳時代前期）遺物出土状況



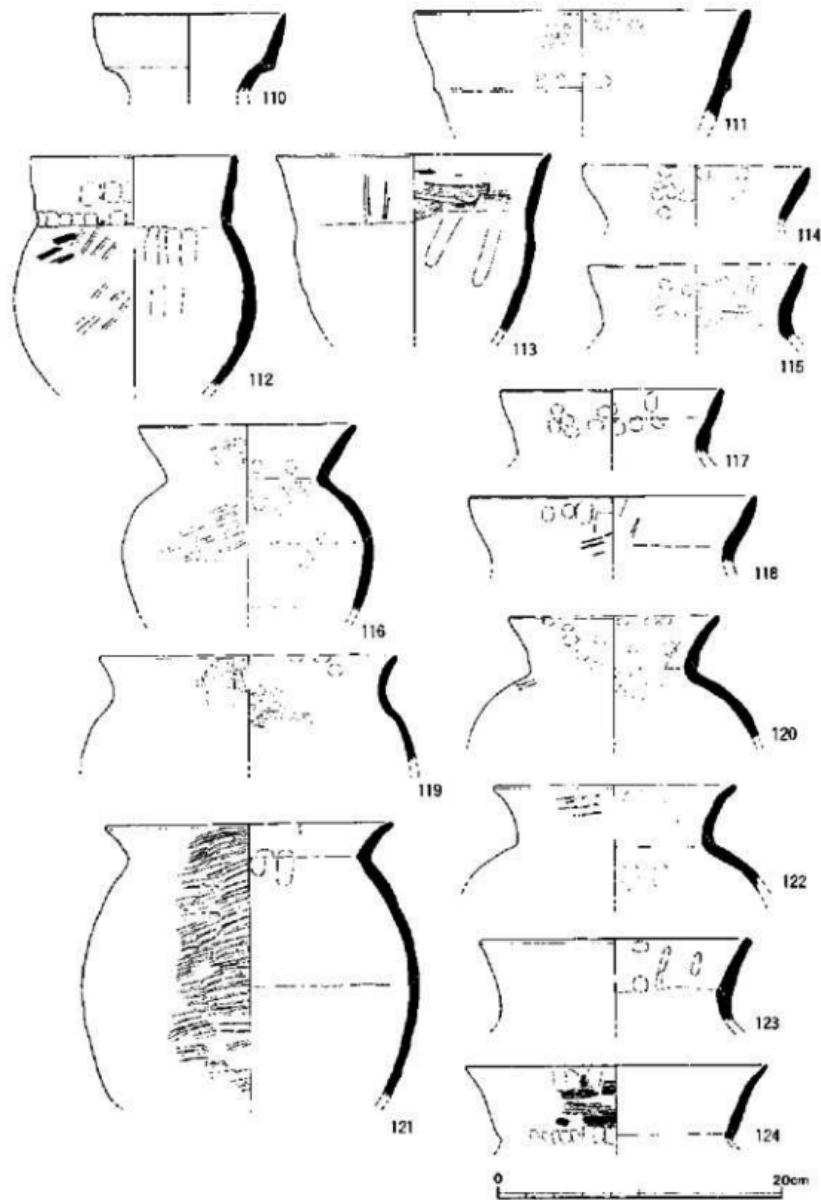


Fig. 31 VII層出土遺物実測図  
甕III類(110)・同IV類(111)・甕I-A類(114~118・120・  
122・124)・同I-B類(112・113・123)・甕II類(119・121)

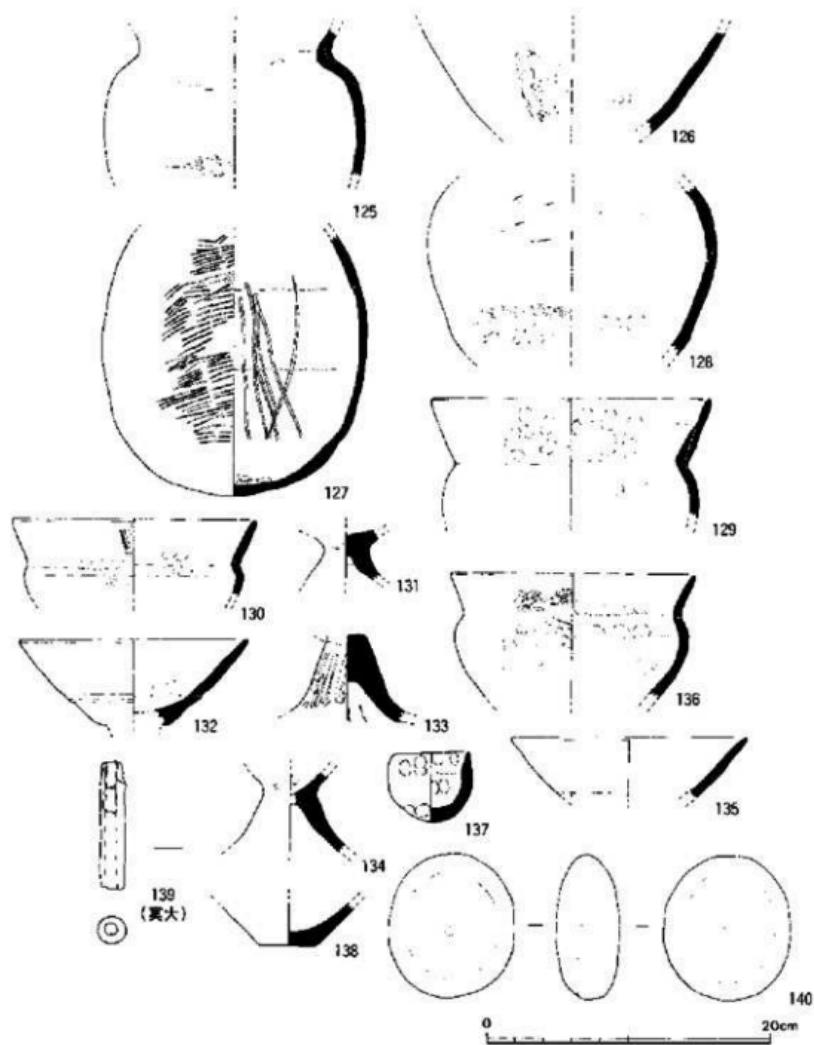


Fig. 32 VII 層出土遺物実測図  
 瓢 I - A 類(129)・同側底部(125~128・138)・  
 鍋 III 類(130・136)・高杯(131~135)・  
 手握ね土器(137)・管状(139)・叩石(140)

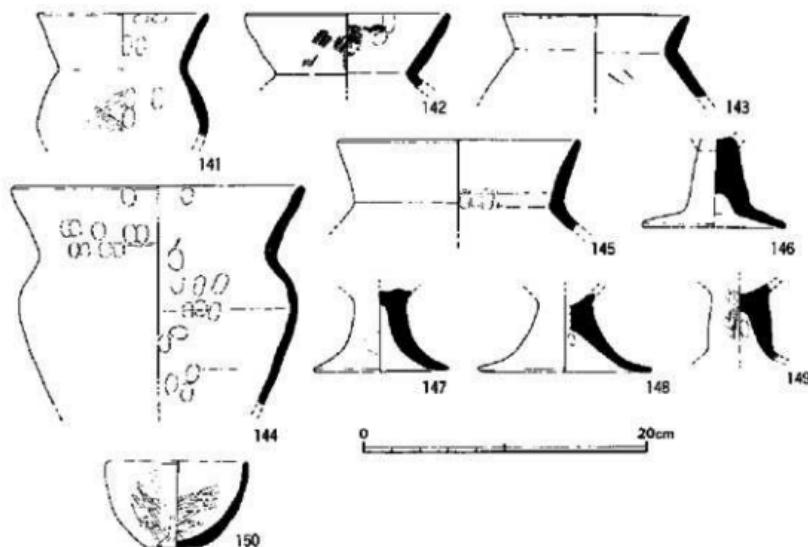


Fig. 33 砂礫層出土遺物実測図  
壺II-A類(141)・壺I-A類(142・144・145)・  
壺II類(143)・鉢I類(150)・高坏(146~149)

付近に、接合時に生じた指頭圧痕が残り、内面は指頭によるナメが顯著である。112の胴部外面は右上がりの印きが見られる。114~118・120・122・124は、口縁部が長く立ち上り外反の屈曲が強い。口縁部外面立ち上がりの指頭圧痕は(124)以外あまり顯著でないが、断面観察では体部上端に口縁部粘土帶を巻ぎ足している。(116・118・122)の口縁部外面には印きが認められるが、口縁部印き出し手法によるものではなく、口縁部成形後に印きを施したものである。119・121は、口縁部が強く外反するもので、(119)は丸いカーブを描き(121)は内面に後をなして屈曲する。121は外面全面に右上りの印きを施しており、印き出し口縁の可能性が強い。125~128は胴部片である。127は丸底・外面に右上がりの印きを施すが内面に顯著に現れた粘土帶接合部に対応して印きの方向が微妙に変っている。胴部一段成形による。内面にヘラによる沈線が数条縱方向に引かれる。また内底には指頭圧痕が顯著である。128の胴部外面下位には弱いヘラ削り(左→右)が認められる。126の外面にはヘラ磨きが認められる。138は平底の底部である。

鉢：130・136は、肩が張り頸部でくびれ、口縁部は直線的に外方に立ち上がる。130は外面ハケ調整、136はヘラ磨きを施す。両者共に内面に指頭圧痕が顯著であり、比較的長く立ち上がる口縁部は壺と同様の手法によって成形している。

高坏：132・135は壺部、131・133は胸部である。前者は比較的細い壺底部から直線的に立ち上

がるが、外面には成形時に生じた弱い段部を有する。口縁端部は丸くおさめる。脚部131は、环底部からそのまま聞くタイプである。133は、环底部への押入部で剥離しており分割成形手法のあり方をよく示している。柱状部はやや中服れし脚部で強く外反、外面へラ磨き、内面はハケ状原体による圧痕が認められる。

手握ね土器：137が1点出土している。土器集中部分から出土しているが、特に高环(132・133～135)鉢(130・136)の集中する地点から出土している。137は、内外面指痕压痕が顕著で内面にわずかに後をなす。

管玉：139が1点出土している。肩下部で長さ2.3cm、径4.5mm、孔径1.5mmを測る。片側穿孔の可能性がある。

叩石：140が1点出土している。平面形は9.5×10.2cmの楕円形で、厚さ4.5cm、重さ630gを測る。鈍縁部の全周及び両主面の中央部に敲打痕が認められる。硬質砂岩である。

#### 砂礫層出土の遺物 (Fig. 33・34)

壺：141は、口縁部がやや長く直線的に立ち上がる胴部外面ハケ調整、内面指痕压痕を施す。口縁部の成形は壺と同様である。

甌：口縁部がく字形に屈曲し長く立ち上がる(142・144・145)と短く立ち上がる(143)がある。142・145は屈曲部内面に棱をなし、144は丸味を帯びて外反する。144は、口縁部外面及び胴部内面に指痕压痕が顕著である。上胴部及び口縁部の接合痕を断面で確認することができる。内・外面部共に激しく焼けている。

鉢：150は、平底の底部から内済して立ち上がる。内・外面部へラ磨きを施す。

高环：脚部のみ4点出土している。146は充実した柱状部から脚部が強く屈曲して外反。147・148は脚部になめらかなカーブを描いて移行する。149は中空の柱状部で外面にヘラ磨きが施される。

木器：151は、長さ19.1cm、最大幅6.0cm、厚さ2.5mmを測る。3.6×2.6cmの方形孔を斜めに穿っている。方形孔は柄を押入する柄穴と考えられる。また先端部が僅かに段状をなしているが、刃部の着装部の可能性がある。したがって鍔を想定することができる。材質はケヤキである。

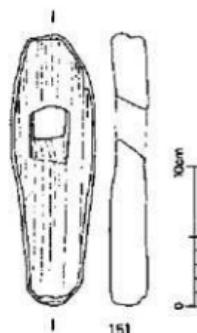


Fig. 34 砂礫層出土の木器実測図

### 3. 2区の調査

#### (1) 基本層序 (Fig. 36)

道路沿いの調査区西壁の地層断面観察を行った。I ~ XXXVIII 層に分層することが可能で 1 区以上に複雑な堆積を示している。II 層は 1 ~ 20cm 大の礫層で層厚は 76 ~ 128cm を測り北に向かって厚さを増している。1 区の II 層に対応する層準であり洪水による堆積である。III 層は北寄り部分のみに認められ層厚は 0 ~ 18cm を測る。腐食土を多く含んだ黒褐色粘質土であり、1 区に対応する層準を求めるることはできない。IV 層は、暗黄灰色砂礫層で層厚は 6 ~ 50cm を測り全面に堆積するが、場所によって層厚に変化が見られる。当層準は 1 区の IV 層に対応している。

V 層以下は、砂礫層・砂層・シルト・粘土層が複雑に堆積している。これは 1 区で見たと同様に洪水と逆流現象による沈没が繰り返し行われたことを示している。ただ南部にのみ認められる XVI 層（黒灰色粘質土）は、層厚 0 ~ 20cm を測り多量の古墳時代前期の遺物を包含している。当層準は 1 区の VII 層に対応するものであるが、1 区 - VII 層が粘土層（IX 層）あるいは粗砂層（X 層）の上面に堆積しているのに対して、2 区 - XVI 層は主として洪水砂礫層である XXXV 層の上面に載っている点が異なる。しかし XVI 層は後述するように復元完形を含む多量の土器が原位置を保って出土していることから古墳時代前期の生活面を形成していたと考えることができる。XXVII 層は、層厚 10 ~ 90cm を測る青灰色砂礫層で洪水による堆積である。南寄りの部分で X・XIII・XXIV・XXV・XXVI 層などに切られている。XXVII 層中からは純文後期土器 1 点の他弥生後期・古墳時代前期の遺物包含層が少量含まれている。XXVII 層に対応する 1 区の層準を明確に把握することができないが、1 区 - 東壁北端に見える砂礫層を想定することができよう。また XXVII 層を切る各層準からも同時期の遺物が少量出土している。このことは各層準が XXVII 層堆積後もなく形成されたことを示している。XXVII 層の下には XXVIII ~ XXXIII 層（粘土層）、XXXIV 層（粘土勝砂礫層）、XXXV 層（砂礫層）、XXXVI・XXXVII 層（粘土層）、XXXVIII 層（腐食土層）が北に向かって緩傾斜しつつ堆積している。これらは調査区方向に広がる沼状地あるいは中筋川の遊水地帯につながっていると考えができる。ただ XXIX 層上面では、後述するように半完形の弥生後期土器と木器及び杭列が検出された。XXIX 層は弥生後期のある時期、比較的安定した生活面を形成していた可能性がある。北側に厚く堆積する XXXV 層（灰 - 黄灰色砂礫層）は、洪水砂礫とも川堆積とも考えることができ。無遺物層で 1 区の XII 層に対応する。

2 区は 1 区に比べて洪水砂礫層や沈殿層の堆積が少く、また 1 区で確認された弥生前期の遺物包含層や生活面は存在しない。これは田地形が東に向かって傾斜していることを示している。



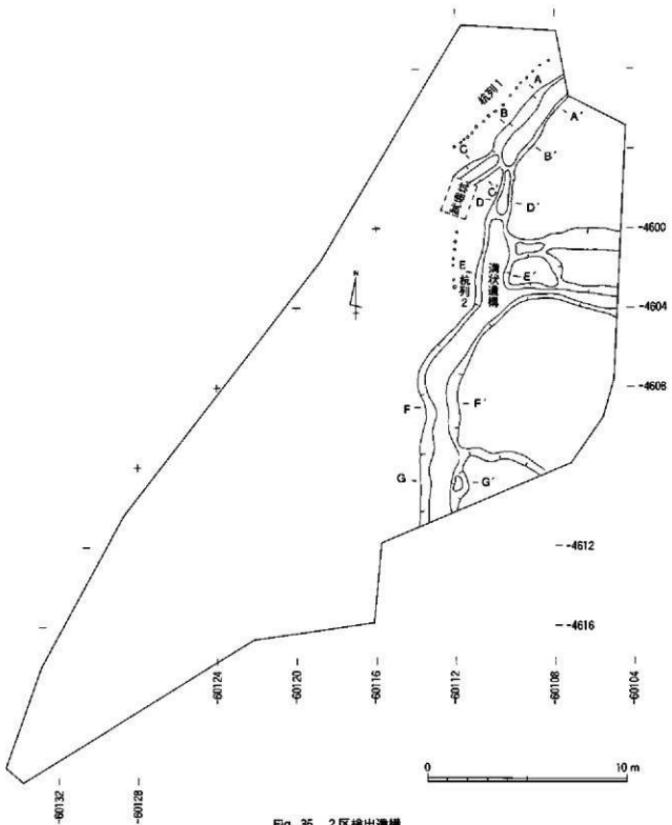


Fig. 35 2区検出造構



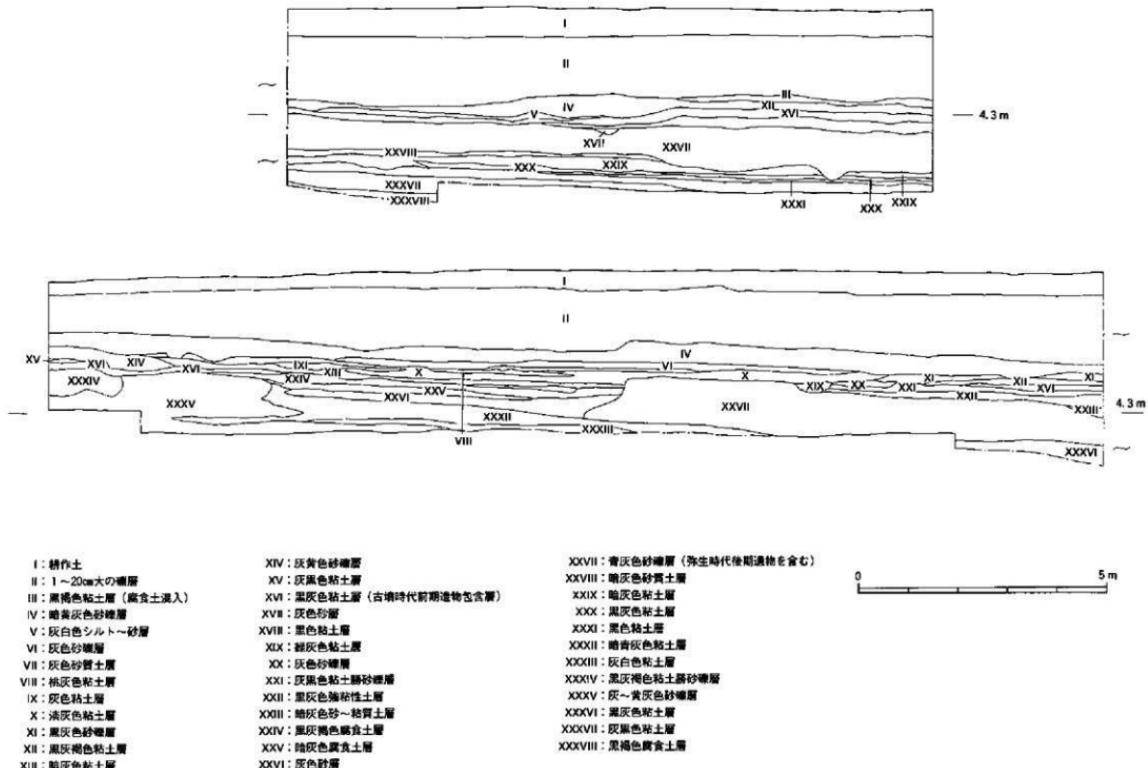


Fig. 36 2区西壁基本層序



## (2) 検出遺構

### ① 杖列1 (Fig. 35)

調査区北隅で検出した。弥生後期の生活面の可能性がある XXIX 番に打ち込まれている。東西方向から北東方向に伸び延長 7 m の区间に 17 本の杖が打たれている。各杖の大きさは直径 5 ~ 7 cm 前後で長さは 70 ~ 80 cm と比較的統一性があり、各杖共に自然木が利用されているが、先端部は鉄刃によって鋭く尖っている。杖列は後述する溝状遺構に並行して打たれており、溝状遺構と関連して機能していたものと考えられるが性格については明確にし難い。

### ② 杖列2 (Fig. 35)

杖列1と同じ面に打たれ、同様の規格の材を用いている。方向はほぼ南北に並び、延長 3 m の区间に 7 本打たれているが、間隔は杖列1よりも広い。杖列2も溝状遺構に並行する。

### ③ 溝状遺構 (Fig. 35・37)

調査区の北半に南から北に伸びる延長約 25 m の溝状遺構である。幅 0.6 ~ 2 m、深さ 10 ~ 40 cm を測り最も深い D - D' 付近が最深を示している。XXIX 番から掘り込まれておらず、埋土はすべて XXVII 番の洪水砂疊層で埋土中より少量の古墳時代前期土器片が入っている。溝の材は絶じて西壁側が高く東壁側が低い。検出面から見て杖列1・2と共に機能した遺構と考えられるが、性格については不明と言わざるを得ない。

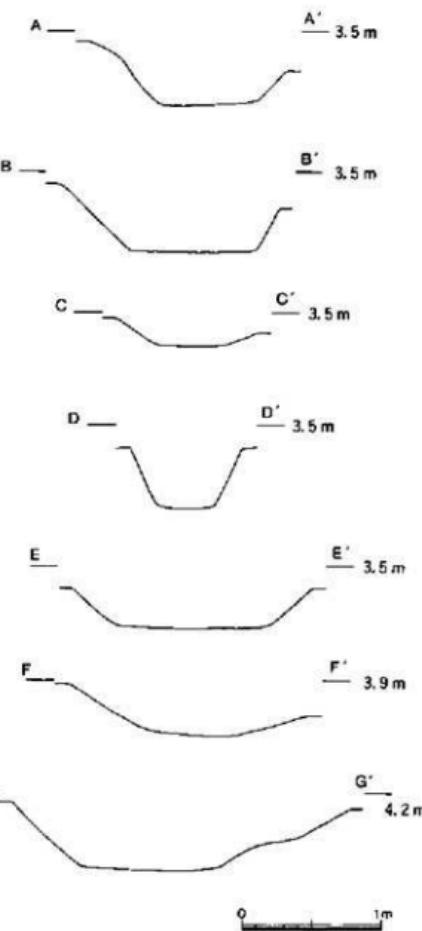


Fig. 37 2 区溝状遺構エレベーション

### (3) 遺物の出土状況及び出土遺物

#### ① XVI層遺物の出土状況 (Fig. 38)

XVI層は、2区南隅にのみ堆積が認められ、1区のVII層に対応する。図示したように復元完形及びそれに近い状況で原位置を保った状態で出土している。遺物はすべて古墳時代前期に属するが出土状態から西の土器群(152・163・158など)と東の土器群(153・165)に別かれ、その間には土器の出土が認められない。この遺物空白部分はXVI層の基盤となっているXXXV層を切る砂礫層や粘土の互層堆積の上面部にある。したがってこの部分はしばしば自然の流路となっていたと考えられる。西の土器群付近にある流本は流路となつた時に流れついたものである。

本来、西の土器群は東方に広がりをもち東の土器群と一体をなしていたことが考えられる。1区のVII層の北端が切られたのと全く同じ原因で2区の土器群が流され、空白部分が生じたと結論付けることができる。2区の遺物出土レベルが1区に比べて絶して20cm程低いのは旧地形に規格されたものである。

#### ② XVI層出土の遺物 (Fig. 39・40)

壺：(152・155)の2点出土している。152はやや肩の張った上胴部から直立気味の口縁部が立ち上がる。叩き成形後、外面には丁寧なヘラ磨きが施される。上胴部内面には指頭圧痕が顯著、断面の底部付近、胴部中位、頸部に明瞭な粘土帶接合部を観察することができる。後二者は内傾接合による。胴部外面下半はタール状に炭素が吸着し、光沢を帯びる。平底である。155は、長い胴部を有し、口縁部は内面に棱を生じて直線的に外方に立ち上がる。外面はナデを基調とするが、頸部の付け根付近には接合時の圧痕が明瞭に残っている。内面は指頭圧痕が顯著に認められ、断面は胴部中位・上位に粘土帶接合痕を明瞭にとどめている。粘土帶の幅は6.5cm、内傾接合である。

甕：総じて口縁部の立ち上がりが長いが、く字状の屈曲が強いタイプ(154・156・157・163)と外反度の弱いタイプ(153・164・165)がある。両者共に叩き成形に依っているが、口縁部の叩き出しは認められない。154・157は断面に明瞭な粘土帶接合痕跡をとどめ。(157)は叩き目の方向も接合部で明瞭に変化している。154は上胴部が外傾、中・下部は内傾接合によっている。粘土帶の幅は3cm、接合部外間に段を生じる。(157)は上胴部が内傾、中位が外傾を呈し、粘土帶幅は4~5cmである。底部は(161)が丸底である他はすべて平底をとどめている。総じて被熱赤変し煤けが激しい。

高杯：(159・160)の2点が出土している。ゆるやかに外反する口縁部を有するが、1区出土の高杯と同じ作りで口縁部立ち上がりの外面に突起状の稜線が巡る。両者共外面はヘラ磨きを施し口縁部は丸くおさめる。

鉢：(158)が1点のみ出土している。浅い楕状を呈し内面ヘラ磨き外面ナデ調整。粘土帶接合

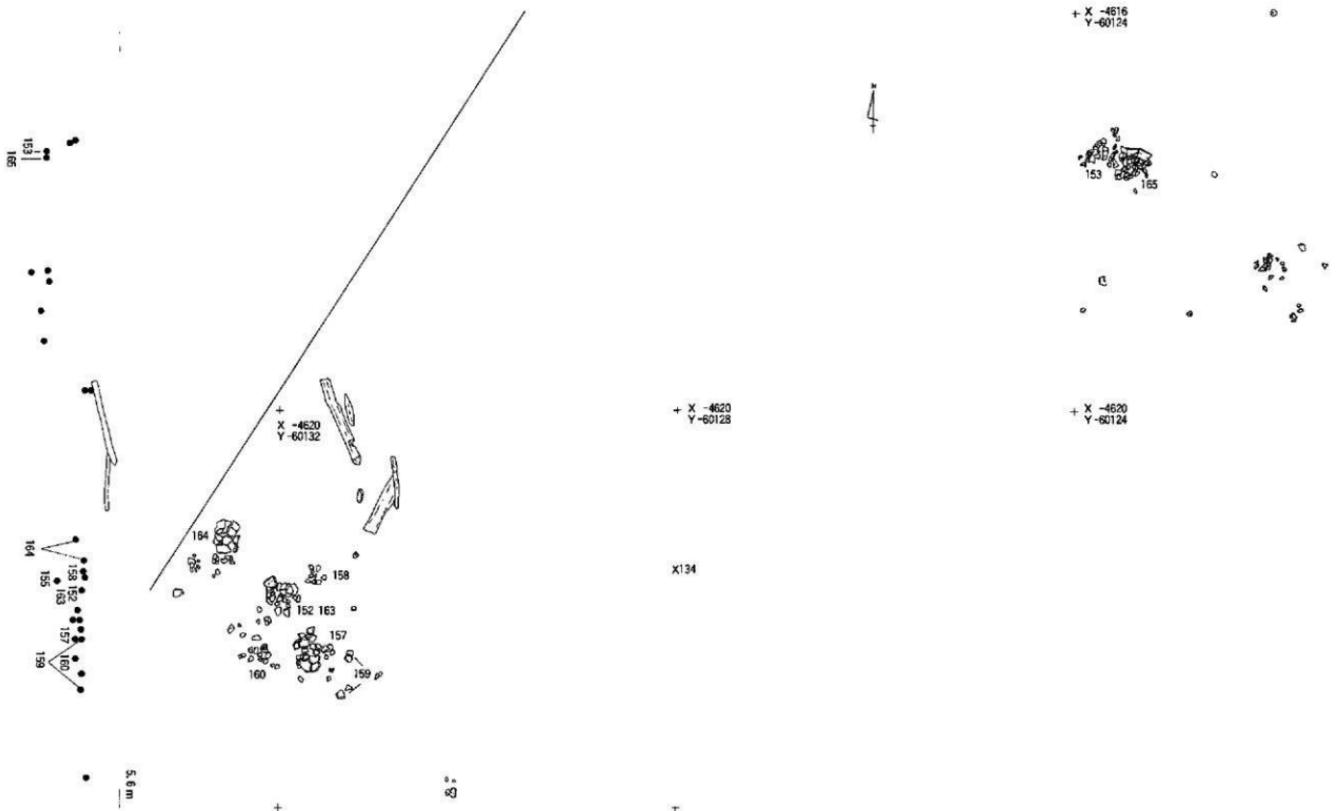


Fig. 38 2区XVI層遺物出土状況実測図 ( $S = 1/40$ )



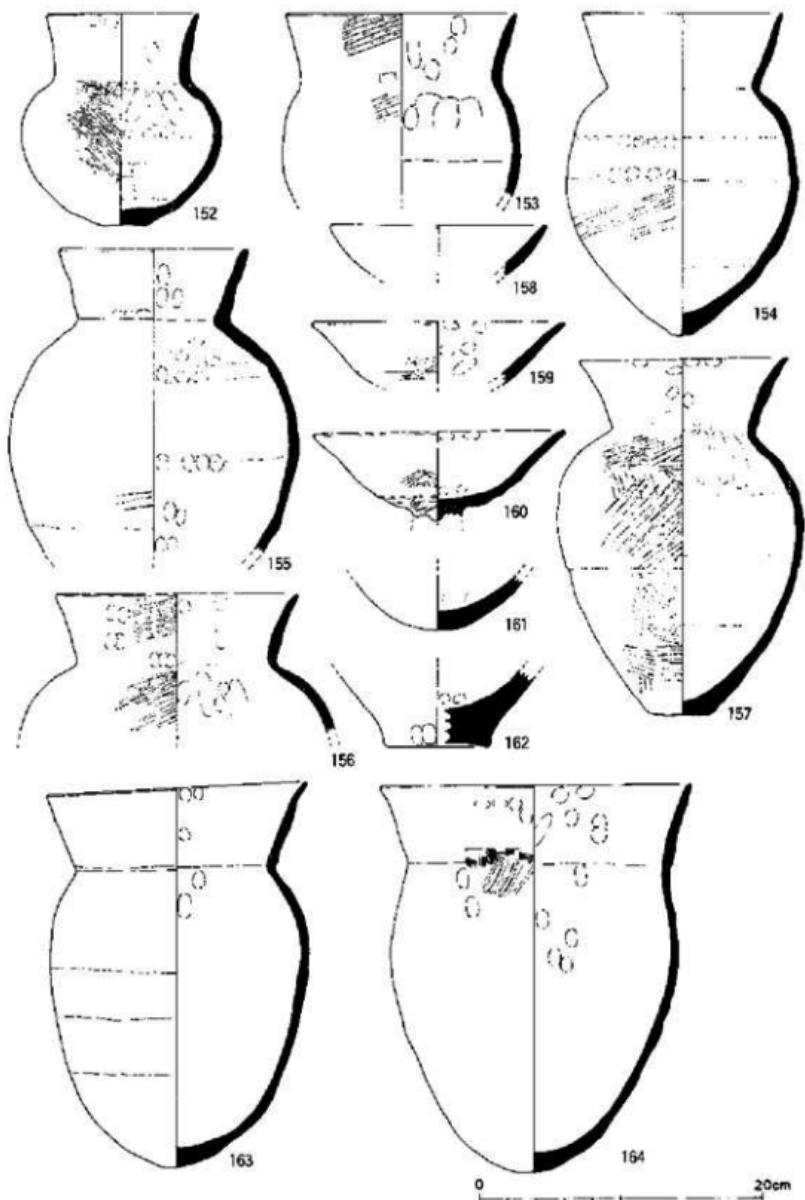


Fig. 39 2区 XVI層出土遺物実測図  
壺 I類(155)・同 II-B類(152)・壺 I-A類(154・156・  
157・163)・同 I-B類(153・164)・同底部(161・162)・  
高环(159・160)・鉢 II類(158)

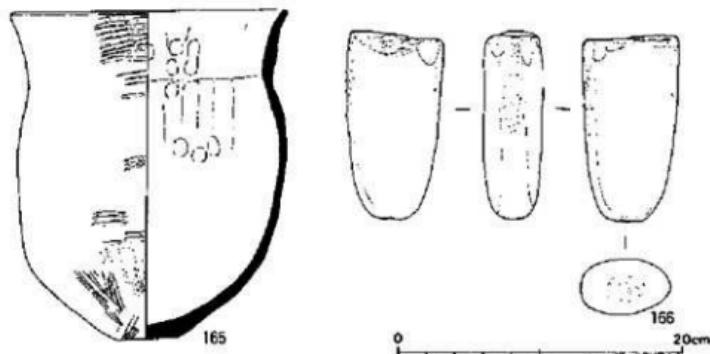


Fig. 40 2 XVI 層出土遺物実測図  
堀1-B類(165)・叩石(166)

態で剥離している。

叩石：(166)が1点出土している。棒状の河原石を打削したもので、両側縁及び先端部に敲打痕が認められる。長さ13.1cm、幅6.9cm、厚さ4.0cm、重さ600gを測る。砂岩である。

## ② XXVII 出土の遺物 (Fig. 41・42)

多く堆積する洪水砂堆积中からは純文後期土器1点を含む弥生後期～古墳時代前期土器が出上っている。純文土器はローリングによる磨耗が極めて激しいが、他の土器はほとんど磨耗が認められない。

純文土器：後期中葉深井の口縁部である。(167)は縁部が外方に肥厚し、頸部無文の縦帶文土器である。口縁部外面には純文が施されていたと考えられるが、磨耗のために消えていている。片袖式土器に属する。

弥生後期～古墳時代前期初の土器

壺：加飾壺の口縁部が2点出土している。169は口縁部外面に双線の山形文と円形浮文を貼付している。171は二重口縁壺で口縁部外面に2帯の横横波状文、頸部に断面長方形の粘土帯を貼付、外面には格子目文を施している。171は安国寺式土器に属する。

壺：XVI層で顯著であった口縁部が長く立ち上がるタイプは、1点(172)のみで他は短く外反するタイプで古められている(173～179)。172の口縁部の立ち上がりも XVI層のものに比べれば無い。總じて叩き成形であり、177は口縁部叩き出し手法によっている。170は口縁端部をつまみ出している。搬入品である。底部は、(180)が丸底である以外はすべて平底で(178)は木葉压痕が認められる。

高杯：杯部の下半が1点(183)出土している。底部からの立ち上がり部外面は棱をなすが、突起状にはならない。内外面横方向のハケ調整を施す。

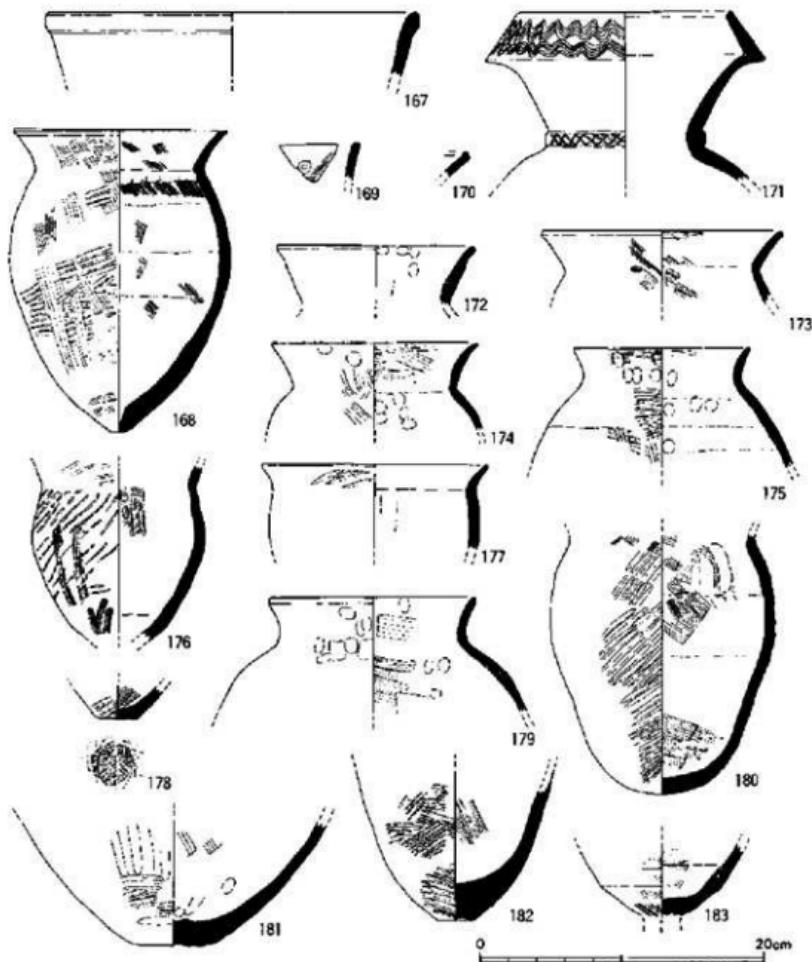
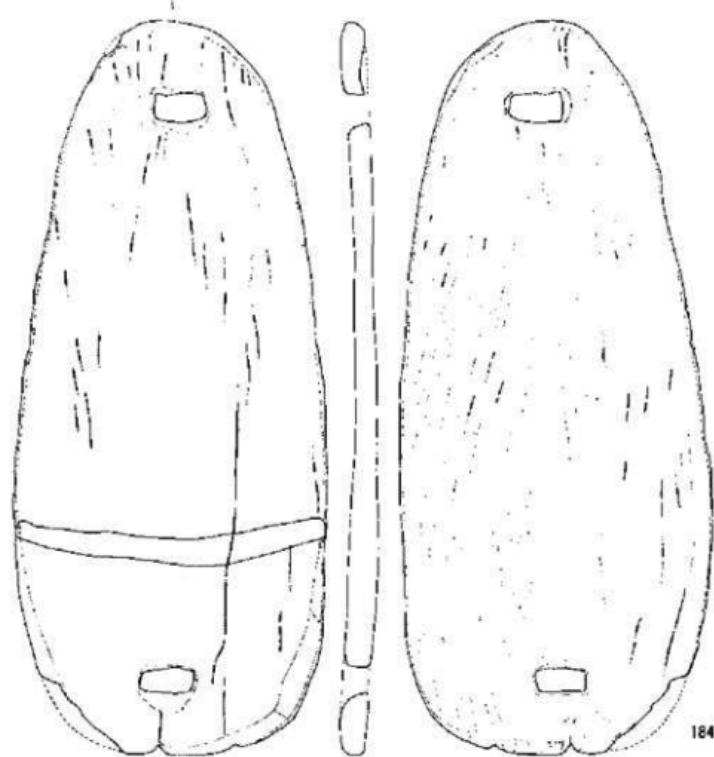
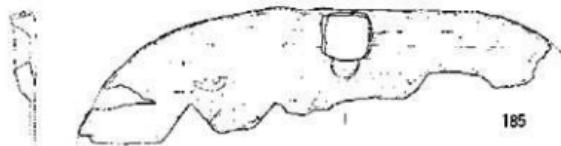


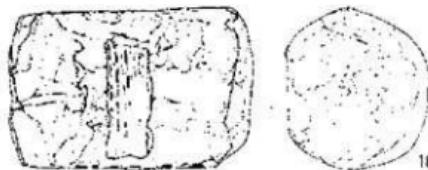
Fig. 41 2区 XXVII層及びXXIX層上面出土遺物実測図  
(168がXXIX層、他はXXVII層)



184



185



186

Fig. 42 2区 XXVII層(186)・XXIX層上面出土(184・185)の木製品  
両端有孔板状木製品(184)・エブリ状木製品(185)・  
木縞状木製品(186)

木器：楕状の木製品が1点(186)出土している。長さ21cm、径14.2cmを測り、上面に長さ9cm、幅4cm、深さ2cmの方形の挟りが施されている。柄の着装部であろうか。両端面に磨耗痕らしき痕跡が認められるが使用によるものかどうか不明である。ムクノキ製である。

### ③ XXIX 層上面の遺物 (Fig. 35)

弥生後期末の甌(168)と木器2点(184・185)が出土している。(168)の口縁部は内面に棱をなしてく字状に外反、叩き成形であるが口縁部叩き出し手法は用いていない。

木器：両端に方形孔を穿った板状木製品(164)とエブリ状木製品(165)が出土している。前者は、長軸63.6cm、短軸27.0cm、厚さ1.6~2.5cmを測り、わずかに湾曲している。長軸の左右両端に5×2.5~3.0cm前後の方形孔を有す。ヤマケワ製である。165は、いたみが激しいがエブリ状の木製品であることが判る。刃部長は45cm前後、幅13cm前後を推定することができる。背部は緩やかなカーブを描いて内湾する。背部中央部に4×4cmの方形孔を穿つ。刃部には鋸歯状の刃を作り出しているが本数は不明である。コナラ耶属製である。

## 第V章 考 察

本次調査は、道路が低湿地に立地していることによって生活遺構の検出は僅少であったが、弥生時代前期後葉及び古墳時代前期の・括弧の高い土器資料を得ることができた。両者は、県西部（幡多地域）においては、その実態が十分に把握されていなかったものであり、当地の土器編年及び地域性を理解する上において標式的な資料になるものと考えられる。ここでは、両者について器種別に型式分類を行った上で諸特徴を抽出し、県中・東部との比較検討を通して古墳期における幡多地域の土器様相を明かにしたい。

### 1. 弥生時代前期後葉の土器

#### (1) 分類

##### ① 縁

主として口縁部形態からI～IV類に分けることができる。

I類：比較的小型で口縁部が強く外反する。内面には横位のヘラミガキが施される。(35・56～58・79) 図示し得なかつたものを含めると7点存在する。

II類：I類に比べて大振りでラッパ状に開く口縁部を有し、口縁部及び口唇に加飾を施す。(59) 図示し得なかつたものを含めると3点存在する。

III類：口縁部が短く直線的に立ち上がり球形の胴部を有する。(80) 図示し得なかつたものを含めると2例存在する。

IV類：無縁壺で球形の胴部を有し、内外面丁寧なヘラミガキを施す。(60) が1点のみである。以上を以て、図示し得なかつたものも含めて合計13点と極めて僅少である。I・II類は当該期に最も一般的に見られる広口壺であるが、I類内面に施された顯著なヘラミガキやII類の頸部内面の貼付突帯は、県下中・東部ではほとんど認められない手法である。II類(59)の口唇部上下の刻目は、中・東部においては中期初頭(II期前半)に盛行する手法であり前期末の段階にはほとんど見られない。またI類(35)やIV類の「黒色磨研」仕上げも当該期の中・東部の土器中には類例を認めることができない。西部の特徴であろうか。その系譜と共に今後追求していかなければならぬ。

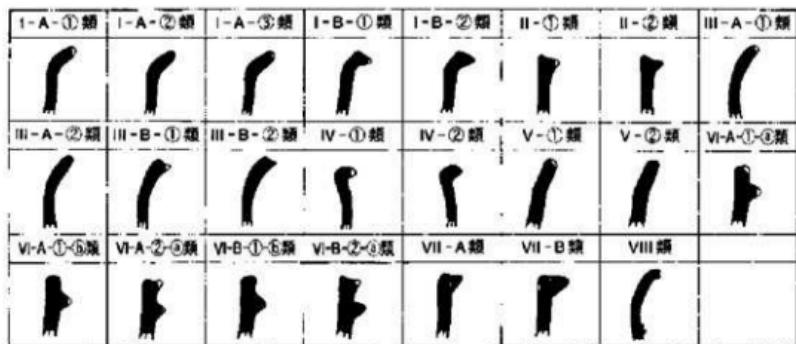


Fig. 43 牽の型態分類

## ② 牽

器種組成の中で 9 割以上を占めている。II 線部の形態、突起の有無やその位置などによって I ~ VIII 類に大別できるが、細部の諸特徴から更に細分が可能である。

I 類：いわゆる如意状に外反する口縁部を有するものである。口縫端部を丸くおさめる A 類と端部をつまみ出して横方向に強くナデる B 類があり、両者共に端部を削む①類、無削みの②類がある。更に I - A 類には口唇部に沈線を施す③類も少量ながら存在する。I - A - ①類には 32・71・74・87・88・90・93 が、I - A - ②類には 39・65・69・75・76・78 が、I - A - ③類には 47 が、I - B - ①類には 38・40・41・50・51・68・82・85・86・89・91 が、I - B - ②類には 67・94 が該当する。

II 類：口縁部が直立気味に立ち上がる形態で、端部は絶じて外方に摘み出しき

大別	細 分 類		
	①22点(57.9)	38点	
I	A ②15点(39.5)	38点	
	③1点(2.6)	(40)	
II	B ①47点(82.5)	57点	95点
	②10点(17.5)	(60)	(51.6)
III	①21点(67.7)	31点	
	②10点(32.3)		(16.8)
IV	A ①3点(42.9)	7点	
	②4点(57.1)	(53.8)	
V	B ①3点(50.0)	6点	13点
	②3点(50.0)	(46.2)	(7.8)
VI	①1点(33.3)	3点	
	②2点(66.7)		(1.6)
VII	①1点(50.0)	2点	
	②1点(50.0)		(1.0)
VIII	A ①-④1点(7.1)		
	①-④2点(14.3)		
IX	A ②-⑥6点(42.9)		
	細分不可能の A 5点(35.7)	14点	
X	B ①-⑥2点(66.7)	3点	17点
	②-⑥1点(33.3)	(17.6)	(9.2)
XI	A 4点(30.8)	13点	
	B 9点(69.2)		(7.0)
合		10点	
		(5.4)	

表 4 牽分類別比率 ( ) は %

方向に強くナデる。端部を割む II - ①類と無刻みの II - ②類がある。前者には 66・70・83・92 が該当するが、後者には図示可能な資料がない。

III 類：口縁部が大きなカーブを描いて外反するタイプであり全体の 7.8% を占める。I 類と同様に口縁端部を丸くおさめる A 類と摘み出して横方向にナデる B 類があり、更に両者共刻目を施す①類と無刻みの②類に細分することができる。III - A - ①類には 22・23・81 が III - A - ②類には 77 が、III - B - ①類には 84 が、III - B - ②類には 46 がそれぞれ該当する。

IV 類：わずかに脇らんだ上側部から口縁部が短く外反するタイプである。端部に刻目を施す①類と無刻みの②類からなる。両者共図示可能なものはない。

V 類：口縁部がわずかに外方に屈曲し直線的に立ち上がるタイプで、端部に刻目を施す①類と無刻みの②類からなる。両者共に端部は丸くおさめる。図示可能なものはない。

VI 類：口縁部の下に突帯を有するタイプである。刻目突帯を有する A 類と無刻み突帯を有する B 類に、口縁端部を丸くおさめる①類と端部を摘み出す②類に、更に端部に刻目を施す③類と無刻みの④類に細分することが可能である。VI - A - ① - ⑤類には 28 が、VI - A - ② - ⑤類には 29・30・42・61・96 が、VI - B - ① - ⑥類には 97・98 が、VI - B - ② - ⑥類には 53 が該当する。この他に口縁部が欠損し細分不可能な VI - A 類が 5 点ある。

VII 類：口縁部外面に接して突帯を貼付するタイプで、刻目の施される A 類と無刻みの B 類からなっている。VII - A 類は図示し得るものがないが、VII - B 類は 43・52・95 が該当する。VII - B 類には、25・95 など 9 例のうち 4 例が I 線内面に沈線を有する。

VIII 類：全体のプロポーションは III 類に似ているが、總じて器壁が薄く他の甕に比べて焼成際で胎土も異なっている。口縁及び上側部外面に微隆起帯を貼付する。25・33・99 が該当する。

### ③ 鉢

I 類：如意状に外反する口縁部の下に刻目突帯を貼付するタイプで、24・34・62 が該当する。前二者は口縁端部に刻目を施すが、62 は無刻みである。

II 類：直線的に立ち上がる口縁部を有し突帯はもたない。90 が該当する。

## (2) 考察

以上壺・甕・鉢について型式分類を行った。以下この分類にもとづいて、県中東部や他縣の資料との比較検討も行いながら西ノ谷遺跡出土土器の特徴について考察を進めたい。

### ① 器種組成

壺・甕・鉢からなり高杯は認められない。図示し得なかったものも含めると壺13点(6.5%), 壺184点(91.5%), 鉢4点(2.0%)であり、甕が尖に9割以上を占める。ここに西ノ谷遺跡の器種組成上の最大の特徴がある。県西部(南四国西部)において当該期の比較可能な資料が存在しないが、後述の諸要素から考えて、甕が極端に多いという今次調査結果は県西部の傾向として一般化することが可能である。県中央部の高知平野では前期上器(1期)が1~4期に編年されており、西ノ谷遺跡の土器群は高知平野の1期~4に併行関係を求めることが可能である。高知平野の中央部に位置し南四国最大の拠点的集落である田村遺跡群においては、前期初・中期の1期~1~3の土器組成は甕が最も多くを占め全体の6~7割で推移するが、前期末の1期~4になると壺と甕の比率が逆転し、壺が65%、甕が34%となる<sup>(1)</sup>。また高知平野東端に位置する前期末の道路である下分遠崎遺跡<sup>(2)</sup>においては、壺が3割、甕が6割と甕が多いが、西ノ谷遺跡ほどではない。後述するように県西部は、県中央部と比べて弥生上器の形成過程が異なっているが、様式構造にも大きな違いがあるとしなければならない。

### ② 壺

I, II類は当該期に最も一般的にみられる広口壺であるが、I類の内面に施された顯著なヘラミガキやII類の頭部内面の貼付突帯(59)は、県中・東部ではほとんど認められない手法である。後者は西部灘<sup>(3)</sup>内の影響であろうか。またII類(59)の口唇部上下の刻目は、県中・東部においては中期前葉(II期)に盛行する手法であり前期末の段階にはほとんど見られない。I類(35)やIV類(60)の「黒色磨研」仕上げも当該期の県中・東部には類例を認めることができない。貼西部の特徴であろうか。口縁断面三角形、上面が平坦面をなす無頸壺(60)は県下では出土例を見ない。大分県下都遺跡 SH02<sup>(3)</sup>出土土器の中に類似相がある。また県中・東部ではこの時期から長颈の壺が登場するが、ここでは見られない。

### ③ 甕

如意状口縁を有するI類が最も多く51.6%をしめている。この比率は田村遺跡群や下分遠崎遺跡と大差がないが、I類に現われた口唇部形態や文様構成などには顯著な差異が認められる。まず口唇部の形態では端部を摘み出して強く横にナデるB類がA類を凌駕しているが、当該期の県中・東部ではB類はほとんど存在しない。B類と類似相の口唇部はI~1期、すなわち高知平野前葉初頭の達賀川式土器と經文曉期系の突唇文土器が共存する時期のバリエーションの中に存在するのみである。B類口縁端部の摘み出し横ナデは、突唇の横ナデ技法がそのまま口唇

部に移行したものである。前期後葉に発現したB類の口唇形態は、後述する突唇文土器の成形・調整技法に規定された現象として理解することができる。またA・B類共に刻目を施す例が多数を占めているが、この口唇部の有無と上脣部に施されるヘラ描沈線との対応関係を観察したところ興味ある傾向を示していることが明らかとなった。すなわちI-A-①類(有刻)では複数可能な19点の資料のうち11点(57.9%)にヘラ描沈線が施されるに対し、I-A-②類(無刻)では15点のうち僅かに1例に施されるのみである。B類についても同様の結果を得ている。I-B-②類42点中32点(76.2%)にヘラ描沈線が施されるのに対して、I-B-③類は7点のうち1点施されるにすぎない。I類ではA・B類共に刻目施文とヘラ描沈線とは密接な対応関係にあることが窺える。II類は16.8%に過ぎないが、I類に次いで多くを占めている。県中央部では見られないタイプである。口唇部の刻目の有無は、概ね2:1の割合で刻目を施すものが多い。ヘラ描沈線との対応関係ではI類以上に顕著な結果が出ている。すなわちII-①類(有刻)21点中14例にヘラ描沈線が施されるのに対しII-②類(無刻)には全く施されない。III類は7.8%と少数であるが、高知平野においてはI類に次いで多いタイプであり、田村遺跡群Loc 10で37.1%、下分遠崎遺跡で43.2%を占めており、中期に盛行する土佐型鏡<sup>(1)</sup>の祖形となるものである。III類は4型式に細分されるが、上脣部に沈線を有するものはやはり口唇部に刻目を施される個体に限られている。IV・V類は、1.6%、1.0%と極少数派である。VI類は9.2%と一割に満たないが三番目に多いタイプである。II類と共に当該期の高知平野には全く認められないタイプであり、今次調査によってその存在が初めて明らかとなった。刻目突唇を有するA類と無刻み突唇のB類とに分かれさらに細分されるが、口唇部の刻目はA類に多くB類に少ない。本類は、完形品に貧しいが総じて深鉢形を呈し、上脣部で内側に屈曲して立ち上がる29・53及び直立する61を除くと、上脣部から口縁部に向かってゆるやかに内斎しながら立ち上がる器形を有する。また1例であるが42のように弱い波状口縁を有するものも存在する。上脣部にヘラ描沈線が全く見られないのも本類の特徴である。本類は、後述するように純文晩期の頬目突唇の系譜を続ぎ人分県を中心に盛行を見せる下城式土器の範疇に位置付けられるべきものである。VI類の存在は、弥生文化成立・發展期において、縣西部が高知平野を中心とする県中央部とは大きく異なった展開をしていった証拠となろう。VII類も7.0%と少数派である。刻目を有するA類4例のうち3例にヘラ描沈線が見られ、無刻みのB類9例中の4例にまで口縁部内面に沈線が認められる。本類は県中央部にも少数存在するが、ほとんどがA類であり、内面に沈線を有する例は全くない。B類の内面沈線は、入田B式に比較的多く認められ、そこからの系譜が考えられる。VIII類は5.4%を占める。本類は、県中央部よりも「西の地方から生まれたもの」<sup>(5)</sup>とされる「薄手式土器」<sup>(6)</sup>に属するものである。田村遺跡群や下分遠崎遺跡においては1%未満に過ぎないが、県中央部でも西寄りの山根遺跡では30%強を占めており、更に西方の新花川流域の永野遺跡<sup>(7)</sup>では土器の大半を占めている。また西ノ谷遺跡の周辺では、入田遺跡・有岡遺跡などからも出土しており、比率は県中央部よ

りも高い。

次に壺の成形手法や器面調整、文様について触れない。VIII類を除くと県中央部の土器に比して総じて器壁・底部がやや厚く作られている。底部外面に網代状圧痕をもつ38・81と席状圧痕をもつ86があるが、この種の圧痕は県中央部では全く見られないものである。後川流域の安賀遺跡出土の底部にも網代状圧痕を有する例が見られるところから県西部の特徴として把握してよかろう。成形手法についてはルーベを用いてかなり丹念な断面観察を行ったが、接合方法や粘土の単位が把握できたものは極めて少数例に過ぎない。接合方法においては、外傾接合と内傾接合の両者が認められ、前者に属する例は41・42・44・51・61・66・67・72・89・91・93を挙げることができ、後者については28・38・53である。すでに問題のように外傾接合は、縄文土器成形手法の伝統にはないものであり、輪積技法と共に韓國無文土器が弥生文化成立期の日本に影響を与えたものである。<sup>(4)</sup> そしてこの手法の特徴は粘土帶の接合面の幅が広いことにある。先に挙げた外傾接合を示す11例中粘土の単位がある程度明確に観察できるものは41・42・89・94であり、41が約2cm、42・94が約4cm、89が約1.5cmの幅を示している。41・89は粘土帶というよりもむしろ粘土裡に近いものであり、外傾接合法を採用しているが粘土帶輪積みであるかどうか疑わしい。42・94は輪積みと考えてよいかも知れない。内傾接合を有する28の粘土の単位幅は約1cm、38は2.5cmを測る。成形手法の明確な例が僅かであることから結論付けはできないが、I類(38・41・51・67・89・91・94)とした遠賀川式土器にも、VI類(28・42・53)とした典型的な縄文晩期系の土器にも両手法が見られる。このことは当該期、西ノ谷遺跡においては、各々の壺の系譜とは無関係に両方の成形手法が用いられていたことになる。県中央部においては前期初頭以来一貫して外傾接合が用いられていたが、前期末に到って内傾接合法が復活する。このことと西ノ谷遺跡の現象とが軌を一にするものなのか、それとも伝統的に内傾接合法が存続していたのか、県西部における弥生土器の成立と展開を明らかにするうえで注目すべき問題である。今後資料の増加をまって検討したい。

文様は、I・II・III・VII類にヘラによる多条沈線、あるいは多条沈線+列点文が認められる。これらの文様は当該期の南紀内・南四国に一般的に見られるものであるが、県中央部に比べると列点文の施用される頻度がかなり高い。また県中央部では半截竹管状原体による双線や浮文・山形文など多種の文様が施されるのに対して西ノ谷遺跡では文様の組み合わせが単純であることも指摘することができる。壺の中で胴部文様を有するものは65点であり、全体(184点)の35.3%に過ぎない。この比率は県中央部に比べるとはるかに低い。このことは県西部が県中央部に比べると本来胴部文様を施すことが少ない地域であったことを示している。下城式土器に類似するVI類においては全く胴部文様が認められない。更に興味深い現象は、すでに触れたようにI・II類に見ると観察可能な有刻土器88点のうち60点(68.2%)にヘラ彫沈線が認められるのに対して、無刻み土器は19点のうち僅かに2点(10.5%)しかヘラ彫沈線が認められ

ない。このような現象は高知平野においても指摘できるが、西ノ谷遺跡ほどには顕在化していない。概ね2:1程度である。このことは本末削済文様を施すことの少ない県西部においては、口唇刻目とヘラ描沈線という2つの属性が密接に関連して展開していることを示している。

最後に器面調整について見ることにする。VIII類を除いて、外面はほとんど本理の荒いハケ調整をタテ方向に施すことを基準とする。しかしIII類は、46・77のように頭部外面をヨコ方向に調整するものや、22・23のように頭部と胴部で調整の方向が異なる例がある。内面はナデ調整の例が多いが、口縁部については水平あるいは斜め方向のハケ調整を施すものが多く見られる。後者の場合は右下りか左上側が多い。また41・68・69・75のようにヨコ方向のヘラミガキを施すものも見られる。VIII類は内・外面共に例外なくナデ調整であり、高知平野の同類のものと一致する。

#### ④ 鉢

以上例が4点と最も少い器種であるが、このうち3点が刻目文器を有する1類である。このようなタイプの鉢は、当該期の高知平野には存在しない。類例を大分県の下郡桑苗遺跡<sup>(9)</sup>などに求めることができ、先IV類と共に下城式土器の影響下で成立した県西部独特のタイプとして位置付けなければならない。

#### 註

- (1) 出原忠三「弥生時代前期小結」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』山村遺跡群 第3分冊 高知県教育委員会 1986年
- (2) 高橋啓明・出原忠三「下分遠崎遺跡(1)」高知県香我美町教育委員会 1989年
- (3) 譲岐和夫「C-1・4区の調査」『下郡遺跡群』大分県教育委員会 1990年
- (4) 出原忠三「(土佐型) 突の提唱とその意義」『遺跡』第32号 遺跡発行会 1990年
- (5) 岡本健児「弥生土器—四回2—」『考古学ジャーナル』89 ニューサイエンス社 1973年
- (6) 出原忠三「(落手土器) の展開とその意義」『南国史談』第7号 南国史談会 1989年
- (7) 岡本健児「永野遺跡出土の弥生時代の遺物について」『高知県立葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書』葉山村教育委員会 1984年
- (8) 高橋透「遠賀川式土器」「弥生文化の研究」第4巻 雄山閣 1987年
- (9) 高橋信武他「下郡桑苗遺跡Ⅱ」大分県教育委員会 1992年

## 2. 西ノ谷遺跡出土弥生前期後葉土器の位置付け

前項においてSK 1・2及びXII層出土の一括土器について、器種毎に形態分類を行い諸特徴の抽出を行った。その結果器種組成や特に甕の展開については、県中央部との顕著な違いが明

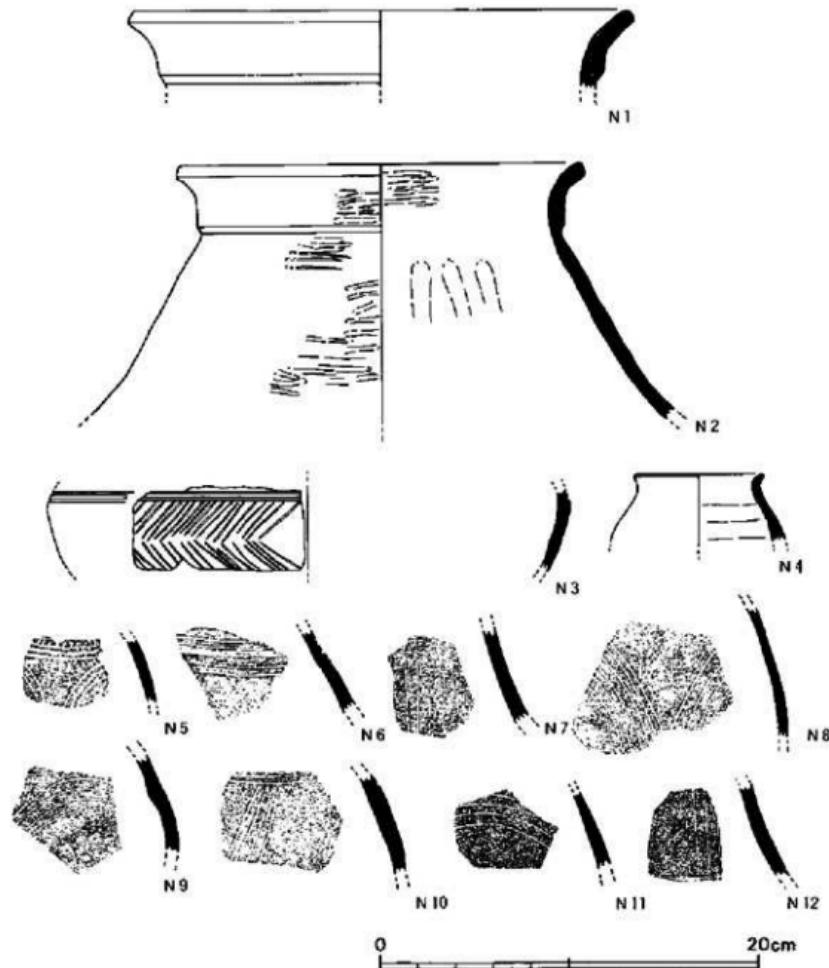


Fig. 44 入田遺跡出土壺実測図

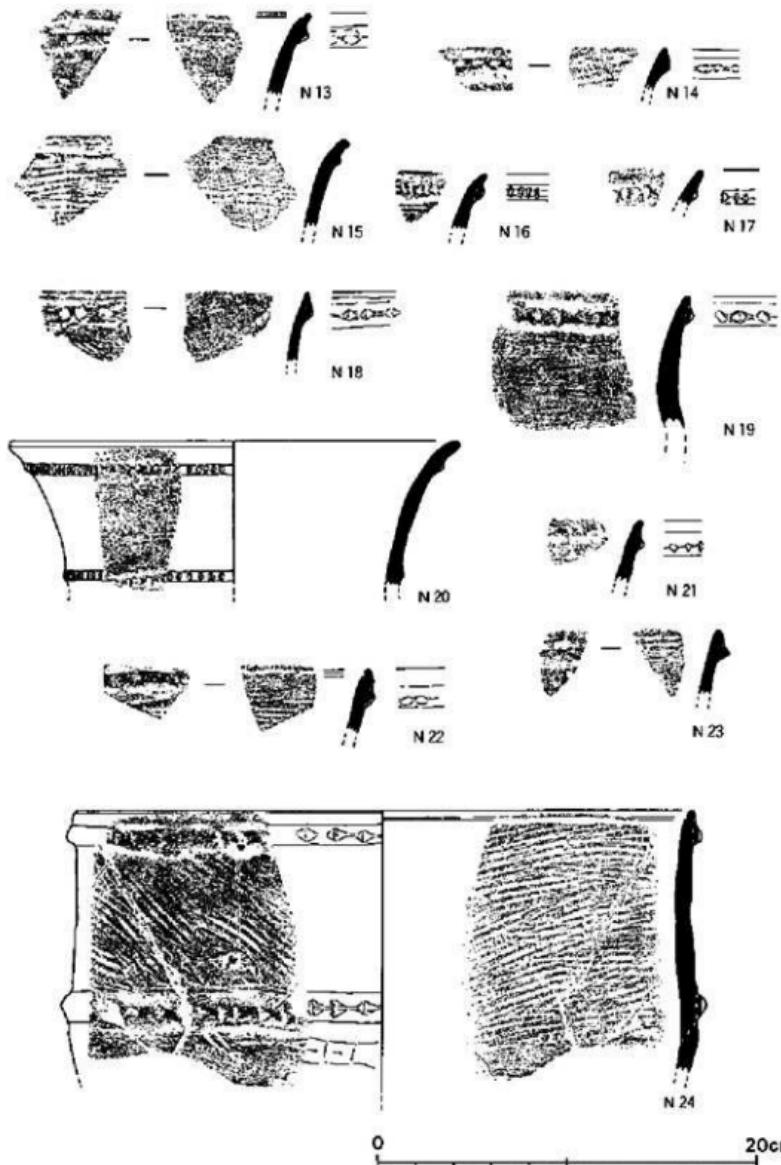


Fig. 45 入田遺跡出土深鉢実測図

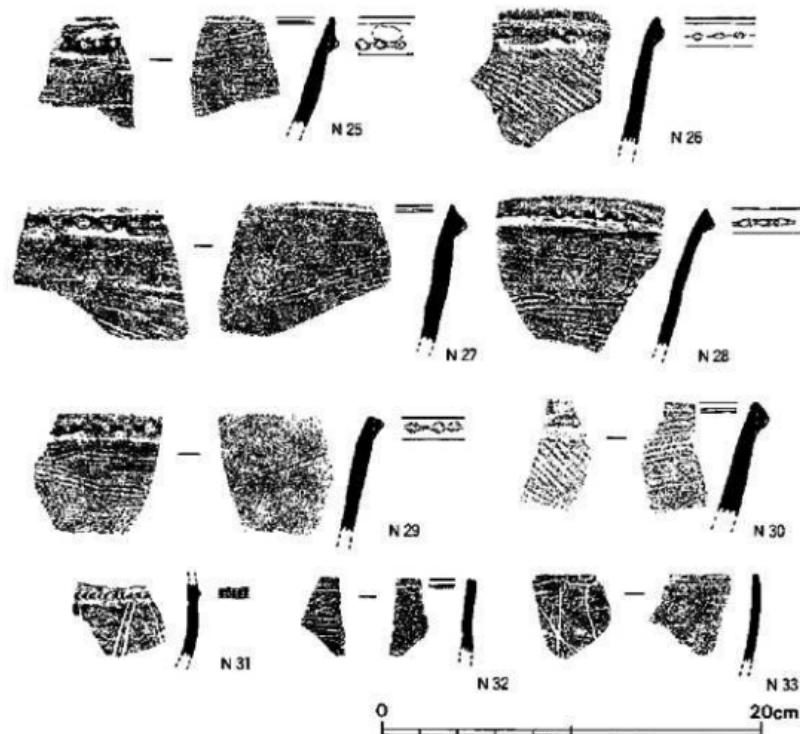


Fig. 46 入田遺跡出土深鉢實測図

らかとなり、また東九州との類似相の摘出など県西部における前期弥生土器の展開を知る上で注目すべきいくつかの事実が明らかとなった。ここでは前項の検討結果をもとに、最も出土量が多く且つバリエーションに富む甕について、西南四国における弥生文化の成立と発展というよりトータルな視点から検討するものである。甕の特徴を際立たせている刻目突帯（V型）や多くのタイプに見られる口唇部摘み出し、更に刻目とヘラ描沈線との相関関係などは、先行型式との比較を通して、より鮮明な当地域の特色として把握することができる。しかしながら当遺跡周辺は勿論、県西部においては前期後葉に先行する中葉の資料が皆無である。従ってまず当地域における縄文晩期末の遺跡として著名な入田遺跡出土の土器を検討材料としたい。

## (1) 入田遺跡出土の土器

入田遺跡は、西ノ谷遺跡の東方約4kmの四万十川右岸にあり、1935年治水工事の際に発見され、その後1950年岡本健児・上岡正五郎氏によって小発掘調査が行われ、1952年には日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会と高知県教育委員会による合同調査が実施されている。これらの成果については、岡本氏による「土佐入田遺跡調査概報」<sup>(1)</sup>や「日本農耕文化の生成」<sup>(2)</sup>に詳しく述べられている。すでに周知のように入田遺跡の調査で最も注目されたことは縄文晩期末の刻目突縫を貼付した条痕文土器と遠賀川式土器が伴出したことである。岡本氏は両者を同時期の所産であると認め、前者については南四国における「末期縄文式系統の条痕文土器」とし、後者については「新來の土器群」として弥生前期に属する入田I式土器として型式設定を行った。そして時間的位置付けについては、「入田I式土器は型式論からみれば板付式土器系統の古い様相を示して」いることを認めつつも「弥生時代前期の第二の段階」として位置付けられた。その後岡本氏は研究の進展の中で前者を入田B式土器として「南四国西部における弥生文化初頭の弥生土器に伴って発見される縄文系土器と定義」<sup>(3)</sup>し、「入田B式と入田I式の併出という事実は、後進地域での現象として把握するか、または入田I式がB式・持田式よりも古い段階の土器なるがゆえの現象と把握するのかの問題である。<sup>(4)</sup>」とされた。その後県中央部で田村遺跡群など良好な前期初頭の資料が増加し、中村市においても入田I式を作出しない入田B式が単独で出土する有岡遺跡（有岡B式土器）<sup>(5)</sup>などが明らかになってくるなかで、有岡B式土器を「板付式土器（古）併行」に比定し、入田B・I式土器についての時間的位置付けについては、必ずしも明確に示されていない<sup>(6)</sup>。

一方、木村剛朗氏は、入田B式土器の深鉢に見られる諸属性について詳細な検討を加え、その出自や展開について論じ、入田B式土器が「九州地方との親近な関係を保ちつつ、一方、瀬戸内文化を吸収し發展盛行」したものと位置付け、県中央部の様相とは大きく異なった展開を示していると分布論に言及している<sup>(7)</sup>。

入田B式土器や入田I式土器の編年的位置付けや分布論についての検討は、西日本各地において当該期の資料が増加しつつある今日、南四国における弥生文化の成立を考える上で急務な課題の一つである。しかしここではその問題については深入りをせず、西ノ谷遺跡出土の前期後葉の土器の位置付けにかかる点について触れることにしたい。ただ入田B式土器と入田I式土器という全く異質な土器の共存現象は、県中央部の田村遺跡の前期初頭（田村前期I）では全く認められない現象であり、田村前期Iに比して入田B式が占くなる根拠とはならないと考えている。

Fig 44-46は、筆者が現在実見し得る土器を同化したものである。上述の岡本氏や木村氏の報告、論文掲載資料と重複するものもあれば、欠けるものもある。

### 入田B式土器

深鉢 (Fig 45・46-N13-31) 入田遺跡の中で最も多くを占める。刻目突縫の深鉢・無刻

突帯の深鉢、粗製深鉢からなるが、1～2条の割目突帯深鉢が多い。ただ細片である場合は、1条か2条かを判別することが難しい場合もある。半体を占める割目突帯文深鉢は、口頭部の形態からいくつかのバリエーションが認められる。1類：上胴部でわずかに内傾して立ち上がるも（N24）。これは2条突帯を有す。2類：口頭部が外方に直線的に立ちあがるもの（N21～23・N26～29）。3類：口頭部が直立、あるいは内消するもの（N25）。4類：口頭部が外反するもの（N13・16・18・19・31）。上胴部で内傾する1類は、入田B式に先行する中村II式からの系譜上に位置付けることができるタイプであり、外反する4類は瀬戸内的な特徴とすべきもので入田B式土器の段階になって認められる新たな動きとして注目しなければならない。更に1～4類の口頭部内面には、沈線の施される例（N13・22・24・25など）が見られる。この種の沈線は、瀬戸内の沢田式<sup>(2)</sup>や津島岡大道跡<sup>(3)</sup>の資料に類例を求めるができるもので、当該期<sup>(4)</sup>内からの影響が顕著であったことを示している。

無刻突帯（N15）は、中村I式土器の系譜上に属するものであるが、当該期のものは突帯の退化が著しく微隆起帯状を呈している。

壺は、（Fig 44-N 4）の小腹壺の他に浅鉢から変容<sup>(5)</sup>したことが考えられるやや大振りのものが1点出土している。浅鉢は、輪状を呈する単純なものが1点認められる。入田B式土器成立の背景には、これまでの九州的な要素から瀬戸内的な要素への転換があったものと考えられる。入田B式土器の時間的な位置付けや、他の地域の土器型式との併行関係を現段階において確定することは難しいが、浅鉢のあり方を一つの指標とすれば、沢田式よりも後出することが考えられる。

#### 入田I式土器

壺（Fig 44-N 1～3・N 5～12） N 1・2は、有段部をもち段部から一旦垂直に立ち上がり、端部近くで外反する特徴は、田村前開<sup>(6)</sup>の壺A-1類と酷似する<sup>(7)</sup>。成形手法は、輪上帯輪積による外傾接合であり、段部も粘土接合時に生じたものである。N 3・5～12は胴部片で、重弧文複線山形文・無輪羽状文が見られる。N 5を除いて沈線の原体は細く、田村前開<sup>(1)</sup>に共通する。

壺は、図示し得なかった。『日本農耕文化の生成』には、遠賀川式土器が2点掲載されている。壺に対して壺の比率は極めて少ない。田村前開<sup>(6)</sup>は、遠賀川式土器として型式が確立する前の、いわば型式の移行期の特徴を示しているのに対して、入田I式土器は、一見して判るように齐一性をもった型式として確立した段階の土器として位置付けることができる。従って入田I式は、田村前開<sup>(6)</sup>に後出すると考えなければならない。入田I式土器は遠賀川式土器の古い段階に属することには違いないが、入田B式土器との関係においては、遠賀川式土器の生成地帯の周辺部で生じた「二重構造<sup>(11)</sup>」として理解しなければならない。この二重構造が、入田I式土器以降の土器のあり方にどのような影響を与えて行くのか、西ノ谷遺跡の前期後葉の土器の中にそのあり方を見ることにする。

## (2) 西ノ谷遺跡出土の前期後縁彫形土器の位置付け

さて、筆者はかつて弥生前期末に至ると各地域において個別の特徴をもった焼が出現し、それまで齊一性を保っていた遠賀川式土器が急速に衰退に向かうことを述べ、高知平野においては中期に確立を見る「土佐型窓」の先駆窓窓の出現について示した。<sup>(12)</sup> この段階に至る過程としては、まず前期初頭（田村前期Ⅰ）における遠賀川式土器生成期とも言うべき複雑な移行期があり、次いで縄文晩期的な要素を払拭し、一旦遠賀川式土器によって席巻せられるところの前期中葉（同Ⅱ・Ⅲ）の段階を経ているのである。<sup>(13)</sup> 齊一性を保ち且つ飾られることの比較的少ない遠賀川式土器が、なぜ再び地域色の濃いな精緻なまでに飾りたてられた土器に取って変わられるのか。この変化は文様や形態にとどまらず成形手法の転換も伴うものであった。この問題について、今正確に答えを出すことはできない。ただ土器に再び多くの文様を施すことが要求されるという弥生時代社会の構造的本質にかかる問題が横たわっていることだけは確かであろう。

県西部における前期末の様相は、これまでほとんど不明であった。当該期に至って当地域においても城郭的な遺跡の増加が認められることは明らかであったが、良好な資料に欠けていた。先述した入田B式・入田I式土器と地点を異にして出土した入田II式土器<sup>(14)</sup>が少量明らかとなっていたに過ぎない。前項において詳しく述べたように、県西部の前期後縁の様相は高知平野を中心とする中央部とは著しい違いがあることが明らかとなった。窓の大半を占めるI類の一部（I-A類）、III-A類とⅣ類には共通点を見出すことが可能であるが、他の7割近くは県中央部では全く認められない型式ばかりである。この違いは、前述した前期後縁に生じる地域性の特徴を現わしているものとして、すなわち県中央部と同じ歴史的性格を有し発現形態のみが異ったものとして理解することが可能であろうか。このことの解明のためには、当該期と入田I式とをつなぐ時期の資料を検討しなければならないが、先述のように相当時期の資料が皆無の状況にある。従って今次資料と入田B式・I式から追求する以外にその方法はない。前項の分析をもとに今少しトータルな観点から検討したい。

西ノ谷遺跡の窓を歴史的に位置付ける場合最も重要なことは、バリエーションの豊富さにある。大分類で8類、細分すると23類にも分けることができた。一時期におけるこれほどのバリエーションは、当地が東九州や瀬戸内の両地域からの影響によるところの、地理的環境に起因することも考えられないではないが、より本質的には田村遺跡群の前期初頭に生じた現象に類似するものであり、「型式の移行期に現象する特色」<sup>(15)</sup>として理解することができる。具体的に見ればI-B、II-A、III-B類の口縁端部摘み出しは、突窓を強く意識した手法である。また入田B式土器の弧形的展開として把握した骨盆に見られる口唇部直接刺目は、当地域の晩期土器には伝統的に施文されることのなかったものであり、遠賀川式土器からの影響として理解することができる。更に前項において刻目とヘラ擦沈線を主とする胴部文様帶との相關関係

を注目するべき事象として指摘した。両属性を最もよく具備するのは瀬戸内の中晩期諸型式においてである。口縁部内面の沈線などと共に晩期以来漸進的に影響を受け続けた左證とことができよう。おそらく遠賀川式土器（入田式土器）もこのルート上に当地域へ到達したことが考えられる。しかしながら当地域には、東九州的な様相をもつ晩期系土器の伝統が根強く横たわっており、前期初頭以来、中葉を通して県中央部に見られたような構造的転換は果し得ず、二重構造を引き摺りながら推移していたのである。従って当地域における前期後葉に見られる特徴は、県中央部のそれとは歴史的過程を全く異なるものであると言わなければならぬ。そして前期末に至って二重構造の解消が果されつつあったと理解しなければならない。

県西部における弥生文化の成立は、土器を通して見る限り、東九州と密接に関係があった晩期末葉土器群の中に瀬戸内から遠賀川式土器が入り、二重構造の様相を呈するが瀬戸内要素の漸進的浸透の過程、同時にそのことによる東九州的要素の退潮過程として理解することができる。このことは縄文文化成立以來県西部の石器石材として重要な役割を果してきた鹿島産黒曜石の消長によっても窺われる。すなわち縄文後期までは同黒曜石製の石器がかなり見られたが、晩期になると全く消滅しサスカイトや頁岩製のものに完全に転換する。それでも剥片は久保塚遺跡<sup>(16)</sup>や中村貝塚において少暈の出土を見るが、入田遺跡からは剥片すら出土しない。この石材流入ルートの劇的な転換は、県西部における弥生文化の成立にとって特に東九州的な要素の退潮として大きな意味をもったに違いない。

県西部における弥生文化成立期の諸特徴は、二重構造の成立について高橋義氏が言及された「縄文文化の伝統を継承する地域と遠賀川系文化に転換した地域との地域間の関係によって現像する」ということを如実に示しているものと言えよう。また成立期に見られたかかる現象が中期以降の展開にどのような影響を及ぼして行くのか興味深い問題である。

### (3) 下城式土器との関係について

前項において日頃が下城式土器類似相であることを指摘した。すでに周知のように下城式土器は、大分県佐伯市下城遺跡出土の変について型式設定<sup>(17)</sup>されたものであったが、宇佐平野から別府湾岸で前期後半に成立し<sup>(18)</sup>、中期中葉まで西部を除いた大分県全域に分布する東九州を代表する土器型式であるとされている。その特徴は、縄文晩期の伝統を強く残した口縁下の一条突帯、深鉢状の体部、厚目の平底、タテハケ調整などを挙げることができる<sup>(19)</sup>。下城式土器の成立は北部九州前期後葉様式の亀ノ甲式土器の発生と軌を一にした現象<sup>(20)</sup>として位置付けることができよう。そして下城式土器の成立や分布・編年については、小川富士雄氏<sup>(21)</sup>や坂本嘉弘氏<sup>(22)</sup>はじめ多くの先駆によって論じられている。

今日、四国島内においても八幡浜市德云坊遺跡や愛媛県宇和町の深ヶ川床などから出土しているが<sup>(23)</sup>、四国出土の下城式土器について最初に着目し論じられたのは岡本健児氏である。

岡本氏は宇和町永長深ヶ川出土の突唇土器を下城式と認定し、西四国における弥生前期後半の課題として「下城式土器文化と阿方式土器文化、それに大篠式土器文化の三つがどのような接觸を示しているかにある<sup>(22)</sup>」という極めて示唆に富む指摘をしている。すでに述べたように、高知県西部と東九州が共通した晩期土器を有している以上、下城式土器の分布は当然予想されるところであったが、検出事例としては今次調査の成果を得たなければならなかった。

西ノ谷遺跡における貝類の存在は、前期末葉においてもなお当地域に東九州的な要素が残っていたことを示すものである。並が極めて少ないとされる種成上の特徴なども共通した要素である。しかしながら西ノ谷遺跡の壳は遠賀川式土器が5割以上を占めており、貝類は1割にも満たない少數派である。これが西ノ谷遺跡の壳は遠賀川式土器の一般的なあり方であろう。大部分下においても下城式土器は、遠賀川式土器と併出しているが、圧倒的多数を下城式土器が占めており遠賀川式土器は少數派である。西ノ谷遺跡とは全く逆の現象を示している。これは両地域における遠賀川式土器の受容のあり方の相違を端的に示したものであり、同時に土器について見る限り豈後水道四岸地域が縄文晩期以来の伝統をより強固に残し続けたことを示している。大部分下における下城式土器の出土遺跡は数多く報告されているが、管見の限りでは西ノ谷遺跡で認められたような型式の移行期を示す現象が認められないことからも明らかである。

## 註

- (1) 岡本健児「上佐入田遺跡調査概報」『考古学雑誌』38巻 5・6号 1952年
- (2) 岡本健児「入田遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編 1961年
- (3) 岡本健児「弥生土器—四国2—」・『考古学ジャーナル』89 ニューサイエンス社 1973年
- (4) 岡本健児「有岡ツグロ橋遺跡」『月刊考古学ジャーナル・特集、地域考古学界動向』1979年 ニューサイエンス社
- (5) 岡本健児「南四国弥生I期初頭の土器—東松木式土器について」『考古学叢考』下巻 1988年 吉川弘文館
- (6) 木村剛朗「高知県入田遺跡出土の入田B式土器」『遺跡』27号 1985年 遺跡刊行会
- (7) 中野雅美・岡田博・他「百間川沢田遺跡」「百間川沢田遺跡2」「百間川長谷遺跡2」 1985年 岡山県文化財保護協会
- (8) 山本俊世「縄文晩期の土器群について」『津島岡大遺跡3』1992年 岡山大学理蔵文化財調査研究センター
- (9) 藤元信一郎「水稲農耕と突唇文土器」「日本における初期弥生文化の成立」 横山浩一先生退官記念論文集II 1991年
- (10) 出原忠正「前期考察」「高知空港拡張整備事業に伴う理蔵文化財発掘調査報告書」 第3分冊 1986年 高知県教育委員会

- (11) 高橋謙「遠賀川式土器」『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ 1987年 雄山閣
- (12) 出原忠三「〈土佐型〉壺の提唱とその意義」『遺跡』第32号 1990年 遺跡刊行会
- (13) 高橋謙「弥生文化のひろがり」『弥生文化の研究』9 1986年 雄山閣
- (14) 木村剛朗「久保畠・ツグロ崎下遺跡」「四万十川流域の縄文文化研究」 1987年 幡多理文研
- (15) 賀川光夫「東九州における押抜文土器と彌生式土器」『考古学雑誌』第37巻第1号 1951年
- (16) 高橋謙「東九州における突帯文土器とその周辺」『古文化談叢』第12集 1989年 九州古文化研究会
- (17) 高橋謙「弥生時代」『大分県史 先史篇Ⅱ』 1989年
- (18) 後藤宗俊「いわゆる下城式土器について」『台ノ原遺跡』 1975年 大分県教育委員会
- (19) 小田富士雄「弥生土器一九卅二」『考古学ジャーナル』第76号 1972年 ニューサイエンス社
- (20) 坂本嘉弘「縄文晚期刻目突帯文土器系の甕(深鉢)形土器について」『大野原の先史遺跡』 1984年 大分県教育委員会  
「いわゆる下城式土器について」『安心院宮ノ原遺跡』 1984年 安心院町教育委員会
- (21) 正岡勝夫、十危幸雄「日本の古代遺跡 22 愛媛」
- (22) 岡本健児「愛媛県宇和町深ヶ川の弥生土器と宇和島市伊萬山貝塚について」『西四国』 第2号 1968年 西四国郷土研究会

### 3. 西ノ谷遺跡出土の古式土師器について

#### (1) 分類

##### ① 壺

- I類：やや大振りで、口縁部はく字状に屈曲し直線的に外方に伸びる。叩き式形であるが、大部分をナデ消している。(155)
- II-A類：小型の壺で、口縁部はく字状に屈曲し比較的長く外方に伸びる。(141)
- II-B類：小型の壺で、口縁部は直立気味に立ち上がる。外面は丁寧なヘラミガキが施される。平底をとどめる。(152)
- III類：二重口縁を有するが、口縁は外反しない。(110)
- 背類：口縁下に三角突帯を貼付する。確実に壺となるかどうか疑わしいが、ここでは壺として扱う。(111)

##### ② 壺

- I-A類：頸部でく字状に屈曲し、口縁部が長く伸びる。叩きを施すが全面に残すものは少ない。また粘土帶の接合部を内・外面に明瞭に残す例が多く、ことに口縁部の接合部は外面に段を生じている例が顕著である。ほとんどが平底である。(114~118・120・122・124・129・142・144・145・154・156・157・163)
- I-B類：I-A類に比して、頸部の屈曲がゆるやかである。その他の特徴はI-A類と同様である。(112・113・123・153・164・165)
- II類：口縁部がく字状に屈曲するもの(121)と丸味をおびて外反するもの(119)がある。I類に比して口縁部は短い。また口縁部叩き出し手法によるもの(121)も見られる。(119・121・127・143)

##### ③ 鉢

- I類：平底、橢状を呈する。(150)
- II類：比較的浅い皿状を呈する。(158)
- III類：上胴部で内済し、頸部で外方に屈曲する。(130・136)

1区VII層及び2区XVI層の一括資料の土器組成及び組成比は表-3のとおりである。また

出土量の最も多い壳について、口縁部のみの破片である場合 I-A 類と I-B 類の判別が難しい。しかし I 類と II 類として見た場合は、明瞭に判別をすることが可能であり、1 区では I 類が 25 点 (92.6%) II 類が 2 点 (7.4%), 2 区では I 類が 22 点 (84.6%), II 類が 4 点 (15.4%) を占めている。

	1 区	2 区	計
壳	2 点	2 点	4 点 (5.9%)
兜	27 点	26 点	53 点 (77.9%)
鉢	4 点	1 点	5 点 (7.4%)
高杯	4 点	2 点	6 点 (8.8%)

表 5 1 区 VII 層及び 2 区 XVI 層出土土器組成表

## (2) 1 区出土の土器について

1 区では第 VII 棵・第 X 棵及び、第 VII 棵を切る砂礫層（以下、單に「砂礫層」と記す。）から古式土師器の出土がみられた。層位的には、第 VII・X 棵が砂礫層よりも古いことがまず確認できる。この前提に従い、第 VII・X 棵の土器から順に概観することとする。

第 VII・X 棵出土の土器には、壳・兜・高杯・鉢・手づくね土器の各器種が認められる。壳には外傾する二重口縁を有するもの（壳 III 類）と、口縁部直下外面に断面三角形の突帯を有し、タタキ調整痕を留めるもの（壳 IV 類）との 2 形態がある。兜は I・II・III 類の各形態がみられる。底部の形状は、唯・III 類の(106)により丸底と知れるのみである。口縁部の形態は口径に比して口縁部の立ち上がりが高く、長くのびる I 類が特徴的である。I 類壳では頭部に粘土帶の接合痕があり、内頸接合であるという特徴をもつものが多い。また外面の調整にタタキを採用するものは各類に認められ、II・III 類では明瞭にタタキ目を残すものがみられるが、I 類ではタタキ目を丁寧にナデ消すようであり、タタキを最終調整とする手法からは遠ざかりつつある様子がみてとれる。鉢は III 類が出土しているが、口縁部の接合方法に I 類兜との共通点が見いだせる。高杯は完形に復元できるものはみられないが、杯部は無段で、脚柱部外面は丁寧にヘラミガキされるもの(112)がある。

砂礫層出土の土器で器種の判明するものはやや少ないが、壳・兜・高杯・鉢の各器種がみられる。壳は小型壳(120)のみで、外面はミガキ調整である。兜には I・II 類がみられ、I-A 類が多数を占め、外面調整にタタキ目はみられない。鉢は I 類に分類されるもので、内外面ともミガキを施している。高杯は脚部のみ 4 点が出土しており、外面にミガキを施すものが 2 点ある。

以上、第 VII・X 棵及び砂礫層出土の土器について概観した。次に各器種ごとに両土器群の

特徴を抽出したい。まず、壺は両群間で系譜のつかめるものがみられない。壺はI・II類が両群に存在し、I類壺の頭部接合法は両群に共通する。また、I類壺外面のタタキ調整については、第VII・X層出土土器群ではタタキ目をナデ消す手法が採られる一方、砂礫層出土土器群ではタタキ目を留めるものは1点もみられない。鉢では砂礫層出土資料に精製品が含まれることを指摘できるが、高环では資料の制約もあり、明瞭な変化を抽出することは難しい。このように両土器群を型式的な時間軸上に位置付けるには資料的制約がありにも大きい觀がある。I類壺の製作技法の継承とタタキ技法の減少傾向、そして層位学的な前後関係を根拠に【第VII・X層出土土器群→砂礫層出土土器群】という図式を描出することも可能であろう。しかし、土石流にともなう砂礫層の堆積が数回にわたって観察されるような不安定な堆積状況においては、層位の上下関係のみで新旧を論ずるのは危険であろうし、また壳形品が殆どない中で両土器群の有する型式学的諸特徴によってこれを序列化することにも意義は見いだせない。ここでは特徴的な第VII・X層出土土器群の資料的有効性を述べるに留め、砂礫層出土土器群の位置付けについては新資料の追加を待ちたい。

### (3) 2区出土の土器について

2区では第XVI層及び第XXVII層から古式土師器が出土している。第XXVII層は砂礫層で、純文土器・弥生土器・土師器が混在した状態で出土しているが、第XVI層は安定した造物包含層と認定され、その出土遺物は一括りの高い土器群として扱うことができよう。次に両層出土の土器群についてそれぞれ概述する。

第XXVII層出土の土器には壺、壺、高环の各器種がみられる。壺はV・VI類の2種があり、VI類(150)は豊後地方に分布する安国寺式土器である。玉永光洋氏による編年<sup>(1)</sup>の弥生後期IIIないしIV期に位置付けられるものであろうか。壺にはI-A・II・III類があり、中でもIII類(149)は庄内式土器の口縁部形態に近似したもので、撇入土器と考えられる。高环には楕円状の杯部をもつものがみられる。

第XVI層出土の土器には壺、壺、高环、鉢の各器種が存在する。壺はI・II・B類の2形態がみられ、小型のII-B類(131)はタタキ調整の後、ミガキによって仕上げられる。壺はI類に限られ、口縁部の立ち上がりの高い一群によって古められる。底部の形態は平底・尖底状の平底・丸底の3種が混在する。外面調整にタタキ目を残すものが半数を占めるが、タタキ調整の後ミガキを施すものも存在し、タタキの減少傾向が現れ始めた段階といえよう。高环は杯部のみ2点出土しているが、いずれも外面をミガキ調整している。

以上が第XXVII層及び第XVI層出土土器群の概略である。上述したように第XXVII層は砂礫層であり、第XVI層はこれに一部接する状態で確かに上下関係を保っている。しかし、両層の取り扱いには1区の項で述べたような視点を援用しなければならない。すなわち、土石流

等に伴う比較的短期間のうちに形成された砂砾層等の堆積が多数みられるような層序においては、層位的上下関係をそのまま出土遺物の新旧関係に投影することは困難だということである。以上の視点に基づき、両層出土土器群を編年的に検討することには意義を見いだせないものと考える。

#### (4) 西ノ谷遺跡出土古式土師器の編年的位置付けの試み

上記では、1・2区の両層出土土器群の諸特徴を概観し、同時に一括遺物として信頼できる層位の抽出をおこなった。ここで、2区第XVI層は1区第VII層に対応するという層位的な観察所見に基づき両層出土土器群を一括し、西ノ谷遺跡出土古式土師器の高知県西部地域における位置付けについてみていただきたい。

上佐における古式土師器編年については、タタキ接法の盛衰を軸として弥生後期土器から土師器にいたる変遷を論考した岡本健児氏の業績<sup>(2)</sup>が挙げられる。岡本氏はその中で芳奈I・II式土器<sup>(3)</sup>を取り上げ、高知県西部ではタタキ技法の盛行しないことを指摘している。しかしその後芳奈式土器に匹敵する新資料には恵まれていない。また、高知平野周辺地域では出原忠三氏によって古式土師器の四期編年<sup>(4)</sup>が確立されており、西部地域の様相については一層関心が注がれている。西ノ谷遺跡出土資料はこのような研究の状況に何らかの進歩をもたらすものと考えられる。

西ノ谷遺跡1区第VII・X層、2区第XVI層出土土器群（以下、「西ノ谷遺跡出土土器群」と呼称する。）の各器種の形態、製作手法等の特徴をまとめると以下のようになる。

壺：I～IV類の四形底の壺形土器それぞれ1個体が出土しており、二重口壺、小型壺を含む。  
甕：I～III類の四形底の甕形土器が出土しているが、口縁部が長くのび、頭部に内傾の粘土帶接合痕をもつI類が特徴的であり、主体を占める。外面調整は、I類では18個体中11個体がタタキ調整痕を留めるが、ナデ・ミガキによってタタキ目を消しているものが2個体ある。一方、II・III類には全面にタタキ目を残すものがある。底部の形狀は平底・尖底の平底・丸底の3種が混在する。

鉢：無段のII類と頭部が屈曲して一段をなすIII類が出土している。III類は頭部に内傾する粘土帶接合痕を有する。

高环：完形に復元できるものはない。环部は無段で、脚柱部外面には細かいミガキ調整を施すものがある。

次に、甕形土器を中心に西ノ谷遺跡出土土器群と高知平野周辺地域の古式土師器との接点を探ってみたい。長くのびる口縁部と、頭部に内傾接合痕をもつI類甕は、現在のところ高知平野周辺では類例が見当らない。高知県西部地域における地域性と評価できよう。外面調整のタタキ技法については、確かにタタキ調整痕を残すものがほぼ半数を占めるが、最終調整として

採用されているものはⅡ・Ⅲ類型の2点に限られる。タタキ目を残したⅠ類型は、高知平野周辺のヒビノキⅢ式土器<sup>(15)</sup>（出原式編年Ⅰ期）に酷似し、搬入の可能性がある。底部の形状は平底・尖底状の平底・丸底の3形態が混在するが、これは高知平野周辺では弥生後期終末にみられた現象<sup>(16)</sup>で、後出的といえる。また器種組成をみると、壺：甕：鉢：高杯 = 4 : 22 : 3 : 7となり、甕の占める割合が圧倒的に大きい。これは遺跡の性格に起因するものと考えられるが、土製支脚・小型精製三種・また河内・吉備等からの搬入土器が多くみられないことは特筆すべきであろう。以上の所見によると、出原式編年Ⅰ期との併行関係を想定することができよう。しかし高知平野周辺地域と比較すると、①タタキ調整の減少傾向・②平底・丸底の混在状況・③土製支脚・小型精製三種・搬入土器の不在等の差異が指摘でき、これに加えてⅠ類型の存在が両者をより異質なものにみせている。

では、西ノ谷遺跡出土土器群と高知県西部地域の既知の土器群との併行関係はどこに求められるであろうか。甕の外面最終調整にタタキ技法が盛行しない点は、弥生後期終末の芳奈Ⅱ式土器との近似性が認められる。平底・丸底の混在状況を呈する点は、芳奈Ⅱ式土器に後出する様相である。また、頸部の接合方法は不明ながら、芳奈Ⅱ式土器には平底のⅠ類型の形態が存在する。以上のように、西ノ谷遺跡出土土器群は芳奈Ⅱ式土器に近似し、後続する要素が認められる。よって、【芳奈Ⅱ式→西ノ谷遺跡出土土器群】という系譜が辿れるものと考える。

また、型式設定はなされていないが、4世紀代に位置付けられた共同中山遺跡群の祭祀跡SX3・4・5<sup>(17)</sup>出土土器群には、タタキ調整痕を残すⅠ類型形態が存在し、平底・丸底の混在状況を呈している。そして、外面にタタキ目を留める鉢形土器が共伴することから、高知平野周辺地域の影響が考えられる。良好な一括資料の追加を得たために、詳細な検討はできないが、西ノ谷遺跡出土土器群に先行する可能性がある。その場合、芳奈Ⅱ式土器との関連が注目されるが、これについても資料の増加を待つて論及すべきであろう。

以上、西ノ谷遺跡出土土器群の既成の編年観・土器型式への比定を試みた。高知県西部地域における芳奈Ⅱ式からの変遷を見る限り、土器生産体制における弥生時代から古墳時代への断絶は認めることができない。Ⅰ類型の製作手法が芳奈Ⅱ式・西ノ谷遺跡・共同中山SX3・4・5段階で共通する現象は、高知平野における古式土器生産が「弥生時代の土器生産体制を止揚した新たな製作集団を形成することなく、弥生時代的な生産関係を引きずりながら展開した」<sup>(18)</sup>状況に等しいものであり、西ノ谷遺跡出土土器群は高知県西部地域における「伝統的第Ⅴ様式」<sup>(19)</sup>として位置付けることができる。

高知県西部地域の古式土器は、タタキ技法採用の点で明白なように、高知平野から的一元的な製作技法の波及によって変遷を遂げたものではなく、その背後には安國寺式土器をはじめとする東九州・西部灘内での土器群からの影響も複雑に絡んでいるものと予測される。また、西ノ谷遺跡出土土器群の段階以後、初期須恵器段階の共同中山遺跡群祭祀跡出土資料<sup>(20)</sup>との

問には、壺底部の完全な丸底化、頸部が外輪接合となるなどの型式的な断続が認められ、未確認の型式が存在することが推察される。今回は上記のような視点については言及できなかったが、今後、良好な新資料によって西ノ谷遺跡出土土器群をとりまく編年観を検証・補完し、一方で周辺地域を視野に入れた系譜問題についても充実していくことが課題であろう。

#### 註

- (1) 玉永光洋「大分県の弥生後期土器」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部第4回大会資料 1990年
- (2) 国本健児「南四国における印目のある弥生土器と土師器」『森直次郎博士古稀記念・古文化論集』下 1982年
- (3) 国本健児・木村剛朗「芳奈遺跡・芳奈向山遺跡」宿毛市教育委員会 1978年
- (4) 出原恵三「坪原遺跡」高知県香我美町教育委員会 1993年
- (5) 国本健児・廣田典夫「高知縣ひびのき遺跡」上佐山田町教育委員会 1977年
- (6) 出原恵三「上佐の弥生後期土器編年」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部第4回大会資料 1990年
- (7) 出原恵三・嶽田耕久・松田直樹・山本督也「其ノ中山遺跡群」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書I』高知県教育委員会 1988年
- (8) 同註(4)
- (9) 酒井龍一「古墳壹晩労働力の出現と煮沸用甕」『考古学研究』第24巻第2号 1977年
- (10) 同註(7)  
前田光雄・松田直樹・廣田佳久・江戸秀輝・藤方正治「後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書II」高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年



## 付章1

### 西ノ谷遺跡出土木製品の樹種について

山口誠治（大阪文化財センター）

#### （1）はじめに

西ノ谷遺跡出土の木製品の樹種について報告する。なお、出土した木製品の全体を把握しているわけではないが、古代人が使用していた木製品の樹種を知ることは古代の環境を知る上で大切なことである。今回出土した木製品は、鉢、えぶり、板材、柱材など弥生時代前期～古墳時代前期にわたる貴重な遺物である。

#### （2）樹種鑑定結果について

鑑定方法としては、木製品の木目・板目・板目方向の徒手切片を作製して生物顕微鏡により観察し、樹種の識別を行った。この時に注意したのは加工の痕跡を留めずに木製品の切片を作製することである。

その結果については以下の一覧表に示す。

表1 出土木製品樹種鑑定一覧

受入番号	器種	樹種名	時期
01	平鉢	コナラ亜属	弥生前期
02	鉢？	ケヤキ	古墳前期
03	えぶり状木器	コナラ亜属	弥生後期
04	木槌状	ムクノキ	古墳前期
05	両端有孔板状	ヤマグワ	弥生後期

#### [鑑定した樹種の組織的特徴について]

##### ①ヒノキ類（学名：*Chamaecyparis* sp.）1点

垂直・水平樹脂道を欠く針葉樹脂材であり、放射仮道管も仮道管内壁も欠き分野壁孔も腐食によって失われている。しかし、木口面の晚材部の幅がきわめて狭く、均質緻密な材質であることから判断した。

##### ②コナラ亜属（学名：*Quercus serrata*）2点

コナラ亜属は、道管が年輪界に沿って1～3列並ぶような環孔材であり、小道管は火炎状に

並んでいた。板目面での放射組織は單列放射組織と典型的な広放射組織であることを確認した。

③ヤマグワ（学名：*Morus australis*） 1点

木口面での観察では環孔材であることを確かめた。また、柔細胞が周囲状に数多く配列し、放射組織が1~6細胞列存在した。板目面では大道管が存在し單穿孔であり、板目面においては放射組織が典型的な桔梗形であった。

④ムクノキ（学名：*Aphananthe aspera*） 1点

散孔材で道管は単独ないし2~3個放射方向に複合し、年輪を通じて均等に分布しているのを観察する。板目面では单穿孔と輪方向柔細胞のストラドンと放射組織の異性や平伏細胞を有していた。板目面においては放射組織は平伏細胞、直立細胞を有していた。

⑤ケヤキ（学名：*Zelkova serrata*） 1点

木口面の年輪界に大道管が一列に並び、大道管外では小道管が多数集合して接線方向につながる環孔材である。道管の穿孔は單孔。小道管の内壁にらせん肥厚があり、放射組織は1~8細胞幅くらいで、ニレ科の特徴を示していた。

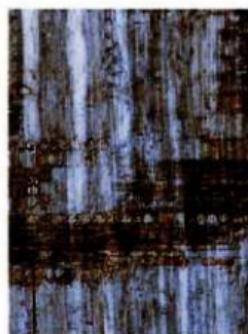
以上のことを報告する。

【参考文献】

- 1) 岩地謙・伊東勝夫著 (1988) 「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版



1-1 ムクノキ(No. 4) 木口面×20



1-2 左同

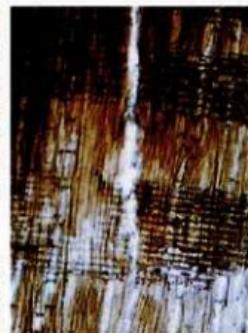


1-3 左同

板目面×20



2-1 コナラ亞属(No. 3) 木口面×20



2-2 左同



2-3 左同

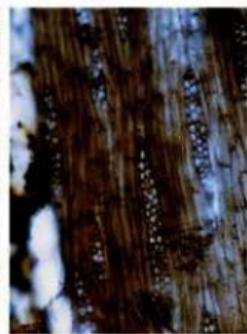
板目面×20



3-1 ケヤキ(No. 2) 木口面×20



3-2 左同



3-3 左同

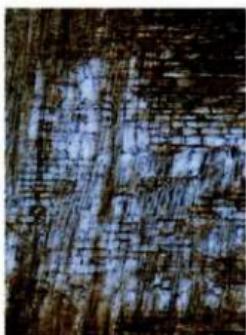
板目面×20

樹種細胞頸微鏡写真

PL 8



4-1 コナラ亞属(No. 1)木口面×20

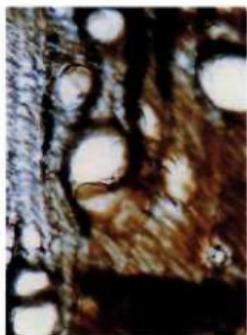


5-2 左同



5-3 左同

板目面×20



5-1 ヤマグワ(No. 5)木口面×20



6-2 左同



6-3 左同

板目面×20

樹種細胞顕微鏡写真

## 付章 2

### 底部圧痕と植物遺体

渡辺 誠

#### (1) はじめに

ここに報告する資料は、底部圧痕 1 件と植物遺体 5 件である。それらは 1992 年に高知県立埋蔵文化財センターによって発掘調査された、中村市西ノ谷遺跡より検出された資料である。弥生～古墳時代に属すが、個々の時期は個別に記すこととする。

#### (2) 底部圧痕 (Fig. 25-72, Fig. 47)

これは弥生前期新段階に属する光の底部圧痕である。底面自体は余形が残っており、直径 8.7cm である。細代編みの圧痕で、Fig. 25-72 は顎形である圧痕自体の投影、Fig. 47 は本来の形としての顎形に油粘土で形取りをしたものである。

その編み方は、「2 本 1 単位の素材を、「2 本越え、2 本潜り、1 本逆り」にした編み方である。縄文時代にはもっとも普遍的な編み方であり、弥生時代を経て現代まで引き継がれていることを、よく示している好資料である。カゴ類や穀物などに使われていたものの断片が、土器製作の際に転用されたのであろう。

#### (3) 植物遺体 (Fig. 48)

検出された植物遺体は次の 3 種である。大型の堅果類の種子のみである。

- くるみ科オニグルミ *Juglans mandshurica* Subsp. *Sieboldina* (MAXIM.) KITAMURA
- ぶな科イチイガシ *Quercus gilva* BLUME
- ぶな科ツブライ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky

いずれも野生植物であり、縄文時代以来食用に供されてきたものである。1 は主に東北日本の落葉広葉樹林帯、2・3 は主に西南日本の照葉樹林帯に優先する。

それらをサンプルごとに記すと、以下のとおりである。

資料 0 (Fig. 48-1) : 1 (×2倍)。古墳時代前期。

オニグルミの核 3 点である。内 1 点は完形であるが、腹面側に喰まれた痕跡が明瞭である (上)。他の 2 点は果核の片面のみである (下)。

資料1（同2）：SK2。弥生時代前期末。

種皮のなかに子葉（実）がつまり、花被もよく残っていて、イチイガシであることが明らかである。7点。

資料2（同3）：XIV層。古墳時代前期。

資料1と同じ条件でイチイガシであることの分かるもの1点。種皮がはがれているが、イチイガシ固有の発芽溝の確認できる子葉19点、左右に分かれた子葉で発芽溝の確認できる例3点、確認できない例8点である。最後の例も、他の種類が見られないことからイチイガシとみなしてよいであろう。

資料3（同4）：XXXIV層。古墳時代前期。

資料1と同じ条件でイチイガシであることの分かるもの7点である。

資料4（同5）：SK1。古墳時代前期。

左右のそろったツブライジ3点、片側のみの例4点である。

イチイガシとツブライジは、いわゆるドングリ類である。それらの多くはアク抜きをしないと食べられない種類であるが、ツブライジはわずかに甘みを含み、そのまで食べができる。またカシ類は水さらしによってアク抜きをする必要があるが、唯一の例外として、イチイガシのみはシイ類と同様にそのまままで食べることができる。

以上の資料が食用に供されたものでないことは遺存状態から明らかであるが、周囲に成育していたこともまた明らかである。水稻栽培段階に入っても、救荒食料として重視されていたと考えられる。またその材は、農具、家具、器具、および薪炭材などとして、さまざまに利用されていたと考えられるのである。

#### （4）おわりに

最後に、調査の機会をうけられ種々ご教示下さった高知県立歴史文化財センターの出原恵二氏、資料整理に御協力下さった名古屋大学大学院学生丹下昌之氏に対し、衷心より謝意を表する次第である。



Fig. 47 底部圧痕モデリング陽像（実大）

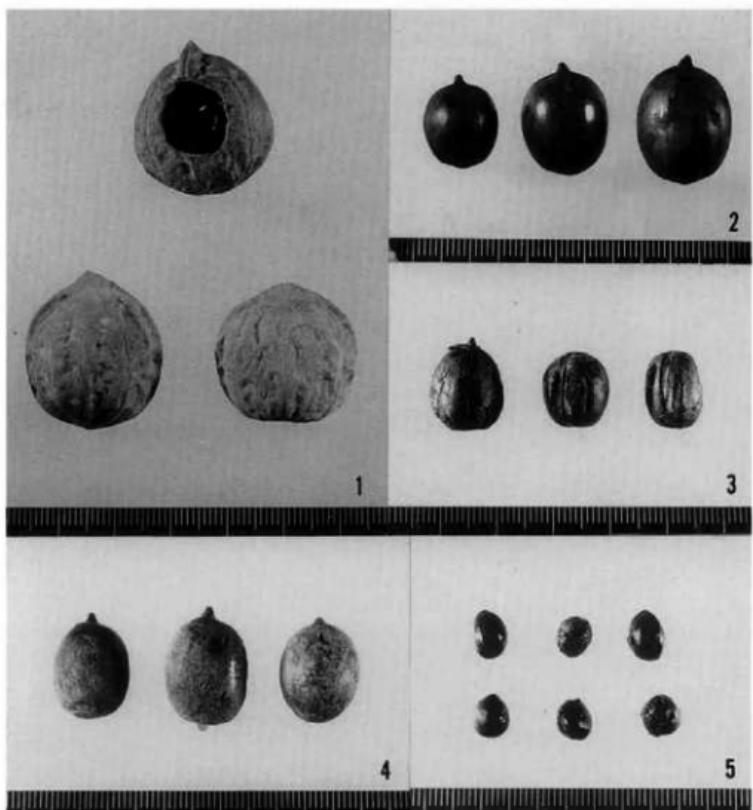


Fig. 48 植物遺体 (実大)  
1: オニグルミ, 2~4: イチイガシ, 5: ツブラジイ.

標本番号	地図番号	岩種	13種 基盤 別種 別種	分類	物 色 (石面)	特 徴	考 察
Fig15-22	SK 1	雲母片岩	26.4	III-A-尖 端	細・粗粒帶 系、黃白、黑 石 墨色	四極気味に立ち上がる上部部を 外側覆ける。 口付は大きめなカーブを描 いて外反。口付は丸くおさめ目 打。外曲カーブ、内曲上屈ヨ ロハク	
*	-23	*	22.3	*	細・粗粒帶 系、黃白、灰 色 墨色	口部は大きなカーブを描いて 外反。外斜片岩を口部に有す。 口付は丸く立たてた面をなし。 全面に削り跡すが、削面が複 雑な形状を示す。内側は複 雑な外曲アーチ、口コハク、内曲 部内曲右ドリ。削面内部はタテ 方向斜面ナガニコヨコガラドリ のハケ。	
*	-24	*	27.6	I	チ・ヤー・ト・片 岩、砂岩の小塊 石英の粗粒帶 墨色	口縁は大きめカーブを描いて外 反。口付下に断面アーチの削り突 起有す。口部端部をつまんで口 方向に丸くナギ。口付は削れ を呈す。口付下端に削れ。	
*	-25	*	19.4	VIII	チ・ヤー・ト・の粗粒 帶、小塊を多く 含む。 墨色	口部ははらかなカーブを描 いて外反。口付外端及び負・側 部間に複数の削離起突を有す。 内外斜カーブ(下端)・丸いハケ	
*	-26	*	-	-	砂岩の粗粒帶 石英・ガリ貝の粗 粒帶 墨色	底部の台形状を呈す。外斜カーブ のヘリカキ。内曲削面が直角 成直角成直角。	内曲覆ける。
Fig17-22	SK 2	*	-	-	-	底部はわざかに台形状を呈す。 外曲リニアで底部斜面のみタ テヘリミガサ。	
*	-28	*	10.6	VI-A-06-50	石英などの粗 粒帶を多く含 む。	口部は内側斜面に立ち上がり、 口付部は丸くおさめ頭の削れ目。 口縁にじっかりした削れ突起 を認め所に沿うように削付。 削面に複数組み合った削れを みることができる。内曲複合、 外曲複合リニア方向を基調と するハケ。内曲はオサを基調と し、一部リニア方向へリニア	内・外曲モードン の特徴。
*	-29	*	24.6	VI-A-06-50	石英・砂岩・均 石の粗粒帶 墨色	口縫端部をさしだして強くヨコ ナギ。口付外端に削れ目。口縫部 に削離台形の削れ突起付。 突起の削れは、直角軸のもの。 要指下ハケ調整。	
*	-30	*	24.6 25.2 9.0	*	石英・灰岩化ア ラバ・粗粒帶を 含む。 墨色	外側はしくれた底氷から西斜 面に立ち上がり、口縫に含む。 底部は丸くつまみを削りヨコ ナギ。口縫部は凹凸を呈す。口 付外端に削れ目。口縫部にじっか りした削れ突起。突起の上に一 丸いナギ。削面はタテ方向を基 調とするハケ。削面内部(下り) のハケ。(外側とは整体が異な り複数)	外曲全斜覆ける。
*	-31	*	打開石場 (3)	-	(玄武岩)	-	
Fig19-32	SK 1 岩壁 の上部	雲母片岩	20.0	I-A-55	石英・長石の粗 粒帶を多く含む。 墨色	口縫部は複合状に外反。口縫は 丸くおさめ頭の削れ目。上部部 にリセのヘリ削離。削面は右 下りを基調とする木綿のタテ・ハ ケ(ハキナタリ)。口縫部内 ヨコ方向のハケ。削面内部削 れ目。	外側は全斜覆ける が、底氷帶より下 が削れ目。

表6 遺物観察表3

標本番号	遺物番号	目録	法号 (cm)	分類	鉱物 色	特徴	備考
Fig19-33	SK1周辺 の土器	先	24.2	VIII	長石・石英・黄 鐵鉄鉱の粗粒 を多く含む。 褐色	口縁部は大きなカーブを描いて 外反。口端部は直面取り。口縁部 に墨跡起痕を有する材。内面ヨリ ヨナデ。外面ヨリ方向ハケ。	
* - 34	*	算	27.2	I	チャート・石英 の粗粒及 細粒	口縁部は側面方に外反。口縁部 をつまんで横方向に強くナガ ル。口沿は円滑をなし、外端に 鋸い粗目。口縁下にしつかりし た部分が充てん。口縁部外側 に墨跡起痕を有する。内面右下のハ ケ。腹部外縁右下のハケ。内 面横幅のハケ。等々	
* - 35	SK2周辺 の土器	東	14.8	I	砂岩・石英の粗 粒及 細粒	口縁部は僅く外反。口縁部外側、内 面ヨリヨナデ。内面右下のハケ。内 面ガタ。外面ナガ。	
* - 36	*	先	-		風化砂岩の小塊	外面は木理の良いいい溝整。	背面無風化部、擦 け。外端に側面取 り。口沿ヨリ粗目 (約7-14.5mm)
* - 37	SK2の 周辺	*	-		石英・長石の粗 粒及 細粒	石英・長石の粗 粒及 細粒を多く含む。	外面ヨリヨナデ。外端ヨリ方向ハケ。 外面ヨリ方向ハケ。外端ヨリ 内面ヨリ
* - 38	*	*	16.4	I-B-T	石英・長石の粗 粒及 細粒	口縁部は、大きなカーブを描いて 外反。端部を外方につまみ出 しヨリ方向に強いナガ。口沿部 をなし下端は斜面。上端部に 石英の沈積。その下に骨粉と土 砂による構成。断面及び内面 に軽度の接合部である。幅 約2cm。内側接合。内面ヨリナガ。	
Fig21-39	先	先	21.7	I-A-T	チャート・石 英・角閃石の粗 粒及 細粒	口縁部は側面状に外反し。内面 ヨリヨナデ。端部を丸め る。側面外縁ヨリカッタ。内面ヨリ 側面ヨリ	
* - 40	*	*	34.4	I-B-T	チャートの小塊	口縁部は側面状に外反し。口縁部 を多く含む。	
* - 41	*	*	21.3	*	砂岩の小塊。チ ャート石英の粗 粒及 細粒を多く含む。 褐色	口縁部は側面状に外反し。口縁部 をつまんで強ヨリナガ。口縫 部をなし下端に粗目。端部は ナタを基準とするハケ。上端部 に石英のラフ風化層(ハケ)有 る。内面口沿部斜面ヨリカッタ ヨリ方向のヨリカッタ。断面及 び上端部外縁ヨリ接合部を認める。 幅約2cm。内側接合。	*
* - 42	*	*	25.5	VII-A-T-C	石英・矽晶片岩 の粗粒等を多く 含む。 褐色	弱い側面ヨリ接合部を有す。口縫部を 外反。端部を外方につまみ出 し。口沿は水平を直面全す。外 縫に強い粗目。口縫下に側面取 り。角の粗目交換。断面外縁ヨリ方 向ハケ。断面及び接合部を認める。(幅約4cm。 内側接合。外側ヨリ)	*
Fig22-43	*	*	18.2	VII-B	砂岩の小塊。石 英・黑雲母・長 石の粗粒等を多 く含む。 褐色	砂岩の小塊。石 英・黑雲母・長 石の粗粒等を多 く含む。内面ヨリ ヨナデ。外面ヨリ	*

表7 遺物観察表4

標本番号	通説番号	岩種	Lith. 層序 (cm) 層厚 (mm)	分類	岩石 色調	特徴	備考
Ph22-11	無	火成	-	-	褐色の小粒。石英の風化物を含む。	火成岩は薄く白色をなし、三斜・斜長石を伴する。	
*	-45	*	-	-	黒褐色	外側はタマハカナ混合的なダマ。内面は黒い。	
*	-46	*	-	-	21.0 10-B-2c	頂部がくびれ。外側は大きく、外側に沿う。	
*	-46	*	-	-	18.6	外は火成岩をつまみ出しし。	
*	-46	*	-	-	濃赤～茶色	外は凹凸があり、内面は火成岩を呈す。外側は火成岩を呈す。	
Ph23-47	無石2	*	-	-	16.4 1-A-3	火成岩を帯びた風化物からなる白い塊。	内・外側同じ。
*	-48	*	-	-	16.4	火成岩を帯びた火成岩を呈す。	
*	-48	*	-	-	8.0	外は火成岩を呈す。	
*	-49	*	-	-	12.4	砂岩の小粒。石英の風化物を含む。	外側リテハク。内面はもやもや。外側に斜面。
Ph24-50	1群	火成	-	-	16.8 1-B-3	長石・石英・黄 閃石の風化物。	外線は火成岩に外層、内層に風化・外側に風化する。
*	-51	*	-	-	19.2	茶色	外線は火成岩を呈す。内層は風化物を含む。
*	-51	*	-	-	16.4	砂岩の風化物を含む。	外線は火成岩を呈す。内層は風化物を含む。
*	-51	*	-	-	16.8	長石・石英の風化物。	外線は火成岩を呈す。内層は風化物を含む。
*	-52	*	-	-	23.9 VII-B	長石・石英の風化物。	外線は火成岩に外層、内層に風化する。
*	-52	*	-	-	25.2	黄褐色	外線は火成岩を呈す。内層は風化物を含む。
*	-53	*	-	-	24.0 VI-B-2c	砂岩の風化物。	外線は火成岩に外層、内層に風化する。
*	-54	*	-	-	7.8	砂岩の風化物。	外線は火成岩に外層、内層に風化する。
*	-55	*	-	-	8.4	石英・長石・雲母の風化物を多く含む。	外線は火成岩に外層、内層に風化する。
*	-56	2群	-	-	13.2	石英・長石の風化物を含む。	外線は火成岩に外層、内層に風化する。

表8 遺物観察表5

採集番号	遺傳部分	岩種	10種 基点 延長 cm	分類	軸上 色調	特徴	備考
Fig24-52	2種	岩	13.0	I	石英・長石の細 粒岩を含む、 灰色	1)核部は灰く外灰。 2)核は四枚、 外縁部は灰。内側面ナガ。	
* - 58	*	*	13.2	*	*	1)核部は灰く外灰。 2)核は細かな 3)外縁部は灰。内側面ナガ。	
* - 59	*	*	19.2	II	チャートの粗粒 砂、小礫を含む、 灰色	チャート状に判別する1)核部、 核は1条の浅縦溝と、手に斜角 部は4条のへう形沈積とその 下に2条の側面突起を隠す。内 面にも1条の大筋。外側ナガハ ケ(ハケ)、底面、底縁部にドグ、 内縁ハケナガ。	内面は変帶まで斜 行。
* - 60	*	*	10.7	IV	長石・石英・矽 岩の細粒岩 灰色	風化帯。1)核部は灰く外灰。層 部をつまんで灰くコロナジ。外 面はナガハケナガヨヘラミガキ 内面は指印(?)コロヘラミガ キ。底面に核と帶面合部を認む。 (基上留幅3 cm)	外縁に欠損。
* - 61	*	岩	20.4	V1-A-D-S5	石英・矽岩の細 粒岩、 灰色	1)核部を外方につまみ出す。 2)核は凹状をなし軸部に頭目。 3)核下にしづかうした頭目突出 部は岩塊ごとにめ込みます。頭 付し、頭目全体は風化帯。周縁 外側ナガハケ。	
* - 62	*	岩	26.0	I	矽岩の小塊・粗 粒砂、 灰色	内側気泡に交もるがかった1)核部 から、1)核はなるべく外灰。 2)核部はナガヨヒリ内張を只見 1)核下に頭目突出。突端下をナ ガ。外縁有りのハケ。1)核 内面石打リハケ。側面内面ヨコ ヘタミガキ。	
* - 63	*	岩	9.4	*	チャートの粗粒 砂を多く含む、 灰色	頭部上半球状。底部は半球 外側ヨジ及び下引のハ ケ。	外側底部付近以外 は斜行する。
* - 64	1群	砂質石墨	長 6.6cm 幅 3.8 厚 0.8 重 31g	-	-	全面に鉛鉬。刃部は墨引され てない。	
Fig25-62	2種	岩	19.1	I-A-2	矽化砂岩・石英 の粗粒岩、 灰色	1)核は細胞状に外灰。 2)核は丸く膨らめる。1)核部内面ヨコハ ケ。外側面黒い板。側面外側ナ ガハケ。	外側黒ける。
* - 65	*	*	18.6	B-3	石英・矽岩の 細粒岩、 はい青灰色	1)核部をつまみ出し、端部に 細い筋目。上段には4条のへう 形沈積。上端部は頭目ハケ。中 段以下右側のハケ。内面はナ ガ。	
* - 66	*	*	21.6	I-B-2	石英・矽岩・花 崗岩の粗粒岩を 多く含む、 灰色	1)核部は細胞状に外灰。 2)核は丸く膨らめる。1)核部内面ヨコハ ケ。外側面黒い板。内面はヘタリナガ。	内・外側黒ける。
* - 68	*	*	26.6	I-B-3	矽岩の小塊・石 英・長石の粗 粒砂、 灰色	1)核部は細胞状に外灰。 2)核は丸く膨らめる。1)核部内面ヨコハ ケ。外側面黒い板。内面ヨコハ ケ。	外側黒ける。

表 9 遺物観察表 6

標本番号	遺物番号	器種	寸法 cm	分類	胎 色	特 徴	備 考
Fu25-59	2群	劍	22.4 — — —	I-A-(2)	砂岩の小塊、石 英、チャートの 塊、粗粒砂	口縁部は強く外反、口沿は丸く おさまる。側面外面タテハケ。 上側部内側ヨコハラミガキ。	側面擲ける
* -70	*	*	25.2 — — —	II-B-(2)	石英、角閃石、 斜長石の混 合、 粗粒砂	口縁部は口向外方につまみ出し。 口沿は曲を出す。外縁は弱い切 れ目、口縁内側に側面凹部。 上側部外側は4条のヘラ模状構 造に下りあり。外縁ハケ、内縁 タケ。	*
* -71	*	*	21.8 — — —	I-A-(3)	風化砂岩、石英 の混 合、粗粒砂、 赤同色	赤が気味の上側部から口沿を加 意状に外反、口沿は丸くおさめる。 口縁部は口向外ヨココト子、口 縁削り、側面外面タテハケ。内 縁はナマ。	*
* -72	*	*	— — 8.7	*	石英、長石の粗 粒砂等を多く含む、 赤同色	腹面白形状の底盤。 外縁に輪物状凹凸、内外縁ナマ。	側面被熱水支理け る。
* -73	*	蜜蠻石器	径 8.2cm 厚 2.5 深 0.4 重 15g	—	石岩		
* -74	3群	劍	— — —	I-A-(2)	墨色	口縁部は細意状に外反、口沿部 は丸くれた削り目。上側部は8 条までヘラ模状構造を認める。側 面外面タテハケ、内縁ヨコハラ ミガキ。	側面擲ける。
* -75	*	*	17.0 — — —	I-A-(2)	風化砂岩の小塊、 石英、長石の粗 粒砂を含む。	口縁部内外縁ヨコナマ、側面外 面修理の走・タテハケ。	*
* -76	*	*	21.4 — — —	II-B-(2)	石英の混 合、赤同色	口縁部は細意状に外反し、内 縁ヨコナマ、側面外面ヨコナ マ・タテハケ。側面削り直し調査者	
* -77	*	*	25.6 — — 25.8	III-A-(2)	砂岩を小量とす る粗・粗粒砂。	油面が差しきぐれ、口沿は削 って入りなまくアゴを結んで上 から上げる。口沿は底をなす。 口縁部外側はヨコハケだ。	
* -78	*	*	22.0 — — —	I-A-(2)	砂岩の小塊、石 英、長石の混 合、粗粒砂、 赤同色	口縁部内外縁ヨコナマ、側面外 面修理の走・タテハケ、内縁削 り直し調査者。	
Fu25-79	D質	*	16.1 — — —	I	石英・砂岩・角 閃石の粗粒砂 赤色	口縁部は強く外反、上側部外縁 ヨコナマ、側面外面タテハケ+ 4条のヘラ模状構造。 両面ハリナマ、口沿面取扱。	
* -80	*	*	11.1 — 15.4	III	石英、長石の粗 粒砂等、 赤色	側面中央に最大深をもち、口縫 部は口字形に彎曲。	
* -81	*	劍	19.0 — — —	III-A-(1)	チャート、石 英、長石の混 合砂等を多く含む、 赤色	口縁部は大きく外反、口沿は曲 取りハサク状全体で削り削目。上 側部に4条までヘラ模状構造を認 める。側面タテハケ、内縁は右下 弓のハケ。	
* -82	*	*	— —	I-B-(2)	砂岩、石英の粗 粒砂等、 赤茶色	口縁部をつまみ出しヨコナマ、 口沿部は削りをなし、端部に削 目。上側部外縁に7筋ヘラ模状構 造。底面底の下に側文文を有す。 外縁タテハケ。	

表10 遺物観察表7

標本番号	道標番号	岩種	延年 (年)	日界 基準 基準	分類	組 主 要 特 徴	特 徴	考 察
1662-30	D層	雲		19.2 22.8 -	H-3 H-3 H-3	石英・鈍閃石の 粗粒粒状、 透視色	最大径を保有に有す。D層部は 強く外反し、端部をつまみ出し、フ コナギ、D層部は透視を呈し、 端部に則り、上部部外縫に7条 のハラ模様、沈積帶下に剥落 の点文を配す。界面タテハク、 内面は落分的に有りリのハク	
-	-	-		18.0	H-3-B-3	チート・石 英・矽石の透視 粒状、 透視色	最大径を保有する。D層部は 大きく外反し、端部をつまみ出し てヨコナギ、D層部は内面を表 し、端部に則り、上部部に7条 のハラ模様、沈積帶下に剥落 の点文を配す。界面タテハク、 内面は落分的に有りリのハク	外縫付、板熱帶 系
-	-	-		36.2	I-3-B-3	砂岩、鈍閃石の 粗粒粒状、 透視色	D層部は粗粒化に外反、端部を つまみ出しヨコナギ、D層部は 強く外反し、端部をつまみ出し ヨコナギ、D層部は内面を表し てヨコナギ、D層部は内面を表 し、端部に則り、上部部7条のヘ タ模様、沈積帶下に剥落 の点文を配す。D層部内面ヨコナ ギ、タテナギ、D層部外縫有りリの ハクナギ。D層部外縫下りの ハク	外縫側
-	-	-		19.0	I-3-B-Y	砂岩の小窓、チ ート・鈍閃石の 粗粒粒状、 透視色	D層部は粗粒化に外反、端部を つまみ出しヨコナギ、D層部は 強く外反し、端部をつまみ出し ヨコナギ、D層部は内面を表し てヨコナギ、D層部は内面を表 し、端部に則り、上部部7条のヘ タ模様、沈積帶下に剥落 の点文を配す。D層部内面ヨコナ ギ、タテナギ、D層部外縫有りリの ハクナギ。D層部外縫下りの ハク	外縫側
-	-	-		26.5	I-A-3	砂岩の小窓、石 英の透視粒状、 透視色	D層部は粗粒化に外反、端部を つまみ出しヨコナギ、D層部は 強く外反し、端部をつまみ出し ヨコナギ、D層部は内面を表し てヨコナギ、D層部は内面を表 し、端部に則り、上部部7条のヘ タ模様、沈積帶下に剥落 の点文を配す。D層部内面ヨコナ ギ、タテナギ、D層部外縫下りの ハク	外縫側
-	-	-		21.6	I-A-L	石英・チート・ 鈍閃石の透視粒 状、透視色	D層部は強く外反、D層部は 強く外反、D層部は内面を表し てヨコナギ、D層部は内面を表 し、端部に則り、D層部外縫 ヨコナギ、剥落部面タテハク、 内面ヨコナギ、ヨコナギ	外縫側
-	-	-		18.0	I-3-B-3	石英・鈍閃石・ 長石の透視粒状、 透視色	D層部は字形に外反、端部をつま み出しヨコナギ、D層部は内面 を表し、端部に則り、D層部外縫 ヨコナギ、剥落部面タテハク、 内面ヨコナギ、ヨコナギ	外縫側
-	-	-		19.6	I-A-E	チートの直角 斜面多く含む、 透視色	D層部は、丸を表したヨコナ ギを繰り外反、D層部は内面を表 してヨコナギ、D層部は内面を表 し、端部に則り、上部部外縫を1 帯強し、沈積帶下に3条の剥落 の点文、外縫タテハク(ハケトス ケ)、内面タテハク	外縫側
-	-	-		20.2				
-	-	-		21.6	I-B-E	チート・石英・ 長石の細粒、 透視色	D層部を多方向につまみ出しヨコ ナギ、D層部は外反、D層部は内面を表 してヨコナギ、D層部は内面を表 し、端部に則り、上部部附近 ヨコナギ、D層部内面ハク、 剥落部面タテハク、内面及外 縫面に粘土岩質石部脈を認める。	外縫側
-	-	-		22.0	H-E	石英・鈍閃石・ 長石・チートの細 粒、透視色	D層部をつまみ出しヨコナ ギ、D層部は内面を表し、端部 に則り、上部部に6条のヘタ集 合部、外縫タテハク(ハケトス ケ)、内面タテハク	外縫側
-	-	-		19.4	I-A-D	石英・鈍閃石・ 長石・チートの細 粒、透視色	D層部は丸くおさめ細い端部、上 部部外縫に複数のハラ模様を7 本まで含み、外縫タテハク(ハ ケトスケ)、内面ヨコナギ、ヨ コナギ後剥落性を有する可逆性 あり。	外縫側

表11 遺物観察表8

場所番号	遺物番号	種別	寸法 器高 径長 幅広 cm)	分類	胎土 色調	特徴	備考
Fu26-94	D層	甕	24.0 — — —	I-B-3	砂岩の小塊、オ リヤー、角閃石 の粗粒結晶、 淡茶色	口縁部は強く外反し、端部をつ まんで膨らむ。口沿は直をなす。 外面タテハケ。内面ヘクチギを 有する。	内面は今面復元。 カーボンカーパル ト付着。
Fu27-95	+	+	17.4 — — —	VII-B	角閃石、石英の 粗粒結晶、砂岩 の小塊	口縁部はゆるやかに外反し、外面 にしつこいした突起を點附。内 面に沈窓あり。突起の上下をつ まんで膨らむ口沿。	
+	-96	+	18.4 — — —	VI-A-20	砂岩の小塊、角 閃石、石英、铁 石の粗粒結晶、 淡茶色	口縁部部をつまんで膨らむ口沿 で、口沿は直をなす端部に斜傾。 口縁下にしつこいした横肉帯附	
+	-97	+	23.4 — —	VI-B-1-36	石英、角閃石の 粗粒結晶、砂岩の 粗粒結晶	口沿は多少下面をなし、斜面片 形の突起點附。突起の下に、ヨ コギサ、頭部外表面の粗いタテ ハケ。主に右側へハラシギキ。	
+	-98	+	18.4 — —	VI-B-30	角閃石、砂岩、 オリヤー、石英の 細粒結晶、 淡茶色	上縁部に波状線を有し、内面底 部に立ち止まる。口沿は直をなす。 口縁下に頭部外表面の粗いタテ ハケ。内面は指紋による少少	内面下を面復元する。
+	-99	+	— — —	VIII	オリヤー、石英 の粗粒結晶、 淡茶色	口縁部はゆるやかに外反し、端部 を下方につまみ出す。外面によ り上方で膨らむ、底部の側壁起立全 周附	
+	-100	+	22.1 — — —	II	砂岩の小塊、石 英、角閃石の粗 粒結晶、 淡茶色	口縁部に向かって直線的に外方 に立ち止まる。口縁部は膨らまな ず	
+	-101	+	— — — 8.0	オリヤー、石 英、角閃石、石 英の粗粒結晶、 淡茶色	外面ハラシギキ	外側は塗り、内面 はカーボン付着、 外側に褐色斑点、側 面脚、長軸— 7.2±3.9mm 6.1±4.0mm 6.0±4.0mm	
+	-102	+	— — — 9.2	石英、長石、石 英の粗粒結晶を 多く含む、 紫色	端部部に指紋状痕あり。外側に アンペックの上部		
+	-103	+	— — — 6.8	オリヤーの少 量、粗粒結晶を 多く含む、 淡茶色	端部部に指紋状痕あり。外側右 下のハラシギキ	断面品の可視性あ り	
+	-104	+	— — — 7.6	オリヤー、砂岩 の小塊、石英、 角閃石の粗粒結晶、 蓝色	外面タテハケ	外面標ける、外成 型けなし	
+	-105	+	— — — 9.3	長石、石英、角 閃石、オリヤーの 粗粒結晶、 蓝色	輪向凸凹状の底足、外面タテハ ケ、内面ナガ		
+	-106	+	— — — 8.0	石英、長石、オ リヤー、角閃石 の粗粒結晶、 蓝色	外面タテハケ	内面の底足の左側 けず、輪向内、外 面標けなし	
+	-107	+	— — — 10.0	石英、長石の 細粒結晶、 蓝色	外端部の粗粒		

表12 遺物観察表9

標本番号	遺植部位	岩種	日付 西暦 年月 日	分類	粘土 頁岩 石炭	特徴	備考
Pig2-108	D層 D層 石炭	火成岩 火成岩 石炭	昭和1.0 昭和1.3 — — —	III	石炭 結晶片岩	全表面に被覆されている。刃部は鋸い。	
Pig3-110	VB層 岩	— — — —	昭和1.8 — — —	IV	チャートの堆積 チャートの小層	上半は砂岩で、底部は灰岩。 表面に断面・角形の突起、外 面下部に右上りの凹み、1mm幅 の青色	
* -111	*	*	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —
* -112	*	火成岩	— — — —	IV	砂岩地の粗粒砂 を少量含む。	直立風化の日付部がよくえら る。表面は部分的に削除 され、側面は上部は右上 りの印字ナガナナ部分にハサ カツナナナナ。	
* -113	*	*	— — — —	— — — —	— — — —	粗粒砂を少量含 む。 茶色	日付部は直立風化でよくえら がる。表面は左上に外反、刃 部はほとんどない。刃部は 内面ヨコハケ、外面は、にぶい 風化が左等々ナナに見られる。日 付部全体が明瞭に残る。
* -114	*	*	— — —	IV-A	チャート・石 英・角閃石の堆 積物少見 茶色	日付部外側面は側面観者。日付 部はナガナナ。	
* -115	*	*	— — —	IV-A	石英・風化多石 の堆積物を少量 含む。 淡茶色	日付部は直立風化で左方にさ かう上がり。刃部はよくえらがる。内 面は右上りの印 字、外側は左等々ナナ。	外側削ける。
* -116	*	*	— — —	IV-A	— — —	— — —	— — —
* -117	*	*	— — —	IV-A	風化砂岩地の粗 粒砂を少量含 む。 淡茶色	日付部は直立風化で左方にさ かう上がり。刃部は左上にあらめる。内・外側 削除直面観者。	内・外側削ける。
* -118	*	*	— — — —	IV-A	石英・砂岩の堆 積物を少量含 む。 黄茶色	わざかに内面左側に左上上がり。 刃部は左上にあらめる。外側削除 直面観者。外側はヘッカ型像に よる妊娠あり。	外側削ける。
* -119	*	*	— — —	IV-B	砂岩・石英の堆 積物を含む。 淡茶色	日付部は丸味半帶びて外反、粗 粒砂を含む。 刃部は左上にあらめる。日付部外側面観 者ナガナ。外側ヨコハケ。	内・外側に張け カーボンを多く保 有する。
* -120	*	*	— — —	IV-B	砂岩をほとんど 含まない。 淡茶色	砂岩をほとんど 含まない。刃部をもった上側から、日付 部は左上にあらめ、刃部は左上 にあらめる。日付部内外側面観 者ナガナ。	
* -121	*	*	— — —	IV-B	チャートの小層 を含む。 淡茶色	チャートをもつた上側から、全 く刃部に限る。全面印字(右上 り)、刃部が黒い、刃部に 柄上端合板を認める。	側面削除下部は全 面削ける。熟人品 の可能性あり。
* -122	*	*	— — —	IV-A	砂岩をほとんど 含まない。 淡茶色	側面をほとんど 含まない。刃部をもつた上側から、全 く刃部に限る。全面印字(右上 り)、刃部が黒い、刃部に 柄上端合板を認める。	外側削ける。
* -123	*	*	— — —	IV-B	風化砂岩・石英 を多く含む。 淡茶色	日付部は、ゆるやかなカーブを 構成して外反。内面には接合時に 生じた段があり。外側ナガ。内面 削除直面。	外側全面削ける

表13 遺物観察表10

標本番号	通称番号	岩種	15種 基準 成因 別種	分類	地 上 熱 石 炭	特 徴	考 察
Fug31-124	VII-4	炭	24.2	I-A	チャコを主とする無鉱物を含む。茶色。	1)縫隙は直線的に立ち上がり。縫隙近くで外灰、縫隙部は丸くおさめる。2)縫合部縫隙面に斜面を張る者、外縫口ロハク、内縫口サ。	
Fug32-125	*	*	-	-	風化帶岩石の無鉱物を多く含む。灰茶色。	むずかしくが張る。内、外縫口アーチ調整を試みる。縫合面下平にヘリカギ、斜面に接合面を認める。	
*-126	*	*	-	-	鉄閃石の無鉱物を含む。灰茶色。	外縫口アーチをテラテ方向ハラミガキ。内縫口アーチ及びハラミ調整。	
*-127	*	*	-	18.6	石英、閃長岩の縫合部。無鉱物。灰茶色。	1)縫隙部は最大幅。外縫口右半分を斜面とす。内縫口テラテ方向の次第に無鉱物部に走る。丸底。	外縫口斜面は斜面は全角張れる。
*-128	*	*	-	20.4	無鉱物をほとんど含まない。灰茶色。	上縫隙部は斜面を有す。外縫口テラテ方向の無鉱物部をハリカギ。下縫口にヘリカギをとじたヘリカギ。内縫口アーチ、側面に接合部を認める。	外縫口丸底。内縫口斜面は成化した無鉱物部着。
*-129	*	*	-	19.2	石英、チャコ、トマス岩の縫合部。無鉱物。灰茶色。	1)縫隙部は左から右に向かって斜面を呈する。右縫隙部は斜面を認める。接合部を認む。縫隙部外側強度。ヨココド。縫隙部内側面接合部。縫隙部。	外縫口全面強しく埋ける。
*-130	*	律	-	17.2	石英、閃長岩の縫合部を含む。灰茶色。	1)縫隙部は直線的に立ち上がり。2)縫隙部丸底を認める。3)縫隙部縫合部を認む。縫隙部外側強度。	
*-131	*	高炉	-	-	石英、閃長岩の縫合部を多く含む。灰茶色。	縫隙部は、縫隙部から直線的に開くタイプ。内、外縫口サ。	外縫口。
*-132	*	*	-	16.2	チャコ、重石炭の縫合部。無鉱物。灰茶色。	縫隙部から直線的に立ち上がる。縫隙部は丸底を認む。縫隙部と右縫隙部の左から右にかけて斜面を認む。縫隙部の左半分を斜面とす。外縫口ロハク、内縫口サ。	外縫口全面強しく埋ける。
*-133	*	*	-	-	石英、閃長岩の縫合部を含む。灰茶色。	縫隙部から右縫隙部斜面。ヨシタシス状の縫隙部を認める。外縫口アーチ調整を試みる。内縫口ヘリカギ。内縫口ヘリカギによる接合。	
*-134	*	*	-	-	風化帶岩石の小塊。石英無鉱物。	縫隙部から大きく開く斜面。	
*-135	*	*	-	16.6	石英、長石、黒雲母の縫合部。無鉱物。灰茶色。	1)縫隙部は直線的に立ち上がり。2)縫隙部丸底を認め。縫隙部の接合部は丸底。外縫口テラテ、内縫口サ。	
*-136	*	昇	-	17.2	石英、風化帶岩石の縫合部。無鉱物。灰茶色。	縫隙部が張り出し。1)縫隙部は直線的に立ち上がる。2)縫隙部丸底を認め。1)縫隙部縫合部内面に斜面を認める。縫隙部縫合部を認む。縫隙部外側ヘリカギ。縫隙部内側ヘリカギオブナヘリカギ。	外縫口。
*-137	手づくり 土器	-	5.3 5.0 6.0	-	チャコ、長石、風化帶岩石の縫合部を多く含む。灰茶色。	1)縫隙部内外面側面を削る。外縫口の三分が削る。	

表14 遺物観察表11

種別番号	遺物番号	器種	土質 器の 割合 条件	分類	胎土 色 (有無)	性 質	名 称
Fig22-138	NH 制	壺	—		風化砂岩の小標 雲母・長石の細 粒砂岩 淡灰色	平底、内面ハケ、外面ナマ調整	
*	-439	管玉	4.2		(暗色)		
		全般	6.3				
		全輪	0.35				
		全周	0.5				
		重量	0.64				
		孔径	1.5mm				
		全般	10.2		(暗色)		
*	-440	理石	1.5				
		全輪	4.5				
		全周	4.5				
		重量	620g				
Fig33-141	砂礫壺	壺	17.0	B-A	石英・角閃石・ チタイトの細粒 砂岩 灰色	口縁部はく字状に凹凸、直線的 に立ち上がり、口付は丸い。瓦 盤半球の側面。断面は口縁部が 台面を認む。内面は指紋状灰離 岩、側面外縁ハケ溝壁。	側面擦ける。
*	-442	壺	14.2	B-A	砂岩・チタイト の小標、石英・ 角閃石の細粒砂 岩 淡灰色	内面に丸底を認めた様をなし。 く字底に外傾し、口付は面をなす。 底盤内外面ミクナゲ。側面有上 り、内面有下りハケ。	
*	-443	*	13.2	B	チタイトの細 粒砂岩を多く含む 灰色	口付はく字底に外傾、口付は丸 く弧底。	
*	-444	*	20.4	B-A	チタイトの粗粒 砂岩を多く含む 淡灰色	口が張り出た。口付は直線的に 立ち上がり、口付は丸い。上縁 及び口縁部側面合歓を認む。 接合部材表面に指紋状灰離 岩、内面有下りハケ。	内・外面擦して擦 ける。
*	-445	*	17.0	*	石英・長石の細 粒砂岩 淡灰色	口縁部は内面に凹凸をなして、く 字底に凹曲、直線的に長底はま むとされる。端部は丸い。	
*	-446	高杯	—		砂岩の小標、角 閃石・石英の細 粒砂岩	直線的に下傾する脚部から斜傾 は屈曲して外反。底部は屈取り	内・外面部分的に カーボン付着。
*	-447	*	脚底深さ10.0		砂岩小標 石英・ 角閃石の小標 淡灰色	脚部は、上部から大なるカーブ を描いて外反。端部は丸くむき める。	
*	-448	*	—	—	*	比較的底廣、脚部は脚底部から 大きくなびを描いて外反、底 部は丸くおさめる。	
*	-449	*	—	—	*	脚底部はエンタラス状を呈す。 底盤は強く加熱して外反、外縁へ リヒキ。	
*	-450	*	—	—	*	チタイトの小標、内面して立ち上がり、脚底を呈す。 脚部は丸くおさめる。内外 面ヘリヒキ。	
		重量	9.8±1				
			6.2±1				
			—				
			3.8±1				

表15 遺物観察表12

## 2区

標本番号	地質区分	岩種	日標 器高 法線 傾斜 角(度)	分類	岩上 色調 (石目)	特 徴	備 考
Ply 10-152	XVI带	安	10.5 15.0 14.3 2.6	H-B	石英斑綠色 黃茶色	やや暗の出た偏光色の鋼鉄を 有し、日標部は直線的に立ち上 がり、端部は丸くおさめ。鋼 鉄及び内面に明瞭な柱状合板 脈を認む。内面は、主に粗面 並板面、下半は丁寧なコア ド。日標部前面吹ききりヨリケ 、側部外側は吹ききりハウチガキ。	側部外面上手。 タマノ状に炭化物 を含む。
* -153	*	安	16.2 - 16.8 -	I-B	石英の繊・纖維 を多く含む。 暗茶色	日標は、くひれ部から直線的に 立ち上がる。端部は丸くおさ める。上部部後P/Lは側部前面 に立ち上りの吹ききり。くひれ部は造 ナド。上部部及び側部内面均 所存する。	前面は全面吹ける
* -154	*	*	13.9 23.0 16.4 1.3	I-A	チャート、風化 巣岩の標巣を 多く含む。 暗茶色	断面形を示す側部から、日標 はわざかに凸凹模様に長く立ち 上がる。端部は丸くおさめる。 側部外側下部より吹ききり、上半 はナド。側部前面のくひれに點 状接合部を認む。側部中間に 接合部で2.2mm。側部内面下 半はヨコナナメに指吹き吹き者	*
* -155	*	安	13.2 - 20.8	I	石英・チャートの 繊・纖維を 含む。 淡茶色	日標部は側部前面に棲てもな くて字板には無し。直線的に立ち 上がる。端部は丸くおさめ。側 部前面及び側面に吹き きり接合部を明瞭に認む。約 6.5mm。外側はナドを意識して 内面には吹ききりに指吹き吹き者	*
* -156	*	安	17.2 - - -	I-A	巣岩・長石の網 状構造 淡茶色	日標部は直線的に立ち上がる。 前面に上部部及び側部の合 板全明瞭。壁面は側部前面、上 部部外側は丸く上りの吹ききり。(側 部接合部附近は断面吹ききりナド)	*
* -157	*	*	18.8 25.5 19.2 4.4	*	石英・角閃石の 網状構造	日標部は、くひれに外側も長く 立ち上りかくは落部付近でわざかに 外れ。端部は丸くおさめ。最 大径は上部部で有る。側部内 面及び側面に吹ききりの接合部を 明瞭に認む。(約4~5mm) 側 部外側吹き皮吹き。接合部で方 向が変わる。側部内面吹ききり	*
* -158	*	体	15.0 - - -	B	石英・角閃石、 風化巣岩の繊 維構造 淡茶色	吹ききりに内面して立ち上がる。 日標は丸く、側部吹き皮吹き。	*
* -159	*	巣岩	17.6 - -	*	石英・角閃石、 長石の繊・纖維 巣岩の小 塊	端部から丸吹きをして立ち上 がり、日標は丸く外側に有り。側 部は丸くおさめる。側部内面吹ききりコア ド側部外側は丸く上がる。	*
* -160	*	*	37.4 - - -	*	巣岩小塊、角閃 石、長石の繊 維構造 淡茶色	日標部はゆるやかに斜版。端部 は丸くおさめる。側部外側に 弱い吹ききり。側部内面吹き皮吹きの ナド。外側は下へラミガキ。柱 状部との断面を観察可。	*
* -161	*	巣岩	- - - -	*	チャートの小 塊・巣岩を多 く含む	丸底・内外面ナド。	
* -162	*	巣岩	- - - 8.0	*	巣岩の小塊、巣 岩を含む 淡茶色	短く、わずかに凹状を見る底 部。	

表16 遺物観察表13

標本番号・遺族番号	岩種	日付 年月 日付 年月	高さ mm	分類	特徴	特徴	備考
Fu09-160 XVI列	變	16.5. 1. A 27.9	-	チャート・砂岩 の小片離多く含む。地に有光、 枝条などの地衣 苔類、 底面茶色	口縁部は長く立ち上がり、縁部 内面はわずかに内凹し、口縁内 外側には方向的明いナガ。底面 外側は粘土層が見と考えられる 部分は、4cm以上ある。 4cm以上ある。	外底付近以降は全 面黒ずむ。	*
* -165	*	22.0. 1. B 27.8 29.5	-	砂岩の小塊、石英、 長石の細、粗粒 砂岩 底面茶色	底面のくびれは深く、口縁は内 外側とも方向的明いナガ。底面 外側は粘土層が見と考えられる 部分は、4cm以上ある。 ナガの方向のハリが強め、口縁部 内面はコマナガ。	*	*
Fu09-162	*	19.2. 1. B 23.7 19.0 4.1	-	砂岩の小塊、石 英、角閃石の粗 粒砂岩 底面茶色	底面のくびれは深く、口縁は内 外側とも方向的明いナガ。底面 外側はナガ、下部はタテハリ、 ヘリミガラを有す。	外表面黒ずむ。	*
Fu09-163 XXVII列	淡緑	36.1	-	石英、チャート、 角閃石、長 石の細、粗 粒を多く含む 底面茶色	口縁部が外側に肥厚、周縁部を 除く、他のタイプである。	*	*
* -168 XXVIII列 上層	變	15.0 21.6 15.9 1.0	-	チャート・砂岩 の小塊、粗 粒を多く含む 底面茶色	口縁部は内面に縦をなしてぐるぐる付 因に屈曲、口縁部内外側口ナガ、壁に ナガ。口縁部外側面下部ナガ。 ナガ、周縁部内面に屈曲した 状態者、周縁部底面下部ナガ。 内面に粘土層の段階を認む。(約 3.5cm)	外底付近以降全 面黒ずむ。	*
* -169 XXVIII列	變	-	-	砂岩、石英、チ アートの細、粗 粒、 底面茶色	砂岩、石英、チ アートの細、粗 粒の細粒、反対する山形文 状態。	*	*
* -170	*	-	-	チャート	口縫部がまみ上げ、 ナガ。	断面品	*
* -171	*	-	-	チャートの粗粒 砂岩	チャートの粗粒 砂岩を含む。底面 ナガ。	*	*
* -172	*	-	-	チャート、砂岩、 内・外面ナガ の粗粒、小塊 底面茶色	チャート、砂岩、 内・外面ナガ の粗粒、小塊 底面茶色	内・外面黒ずむ。	*
* -173	*	-	-	長石、石英、チ アートの細、粗 粒、 底面茶色	長石、石英、チ アートの細、粗 粒、 底面茶色	口縫部内面に縦をなしく字状に ナガの細、粗 粒。	*
* -174	*	-	-	砂、粗粒砂を含 む、 底面茶色	砂、粗粒砂を含 む、 底面茶色	口縫部外壁、口縫部面タテハリ、 内面水牛及び下部ナガのハリ。ナ ガの方向の凹凸が現れる。	*
* -175	*	-	-	石英、チャート の粗粒砂を含 む、 底面茶色	石英、チャート の粗粒砂を含 む、 底面茶色	口縫部丸味を帯びて外張、縫 隙の粗粒砂を含 む、 底面茶色	*
* -176	*	-	12.1	-	石英、チャート の粗粒砂を含 む、 底面茶色	粗粒外壁よりの明きナガ部分的 ナガハリ。内面はタテハリ、 粗粒砂	*

表17 遺物観察表14

解説番号	地層名	岩性	法厚 mm	鉱物 組成 %	分類	地表 上 部 材 質	特徴	備考
Fm14-177	XXVII層	灰	16.0	■	チャートの颗粒 を多く含む 風化色	風化の少ない表面から口は高く 外反、底面は丸くおさめる。口 縁部埋立出し、内面はリナフ。		
*	-178	*	-	-	*	弱風化帶灰岩、外面有土色の明 き、内面は白い球体によるクチ カヌの状態。		
*	-179	*	14.6	II	長石・砂岩・有 色・熱因岩の集 積物岩 に富む砂	口は加熱丸味を帯びて外反。口 縁部内外面はリナフ、側面内部 はハケ、外面はハケ+リナフ	外曲線ける	
*	-180	*	-	-	チャート・砂岩 の小塊・細顆粒 を多く含む 風化色	チャート・砂岩・外面有土色の明 きの小塊・細顆粒・内面有土色のハケ及リナフ、側 面に粘土岩の結合部を認む。H= 4.5~6.0cm		
*	-181	*	-	-	チャート・頁岩 5.0	外面上部は引きをタテアマで直 の粗粒砂を含む。下・外曲線及び水平方向の埋立。 風化色	外曲線ける	
*	-182	白灰	-	-	チャート・砂岩 2.4	わざかこぼれんじ土壁、外曲線 の小塊粗粒砂、 風化色	外曲線が外方側が異なる 面傾ける	
*	-183	*	-	-	砂岩の小塊・有 色・チャート角 2.4	北極的風合いを有し、外曲線 の小塊は弱い傾斜をなす。内面有土 外曲線は直角のハケ。		

表18 遺物観察表15

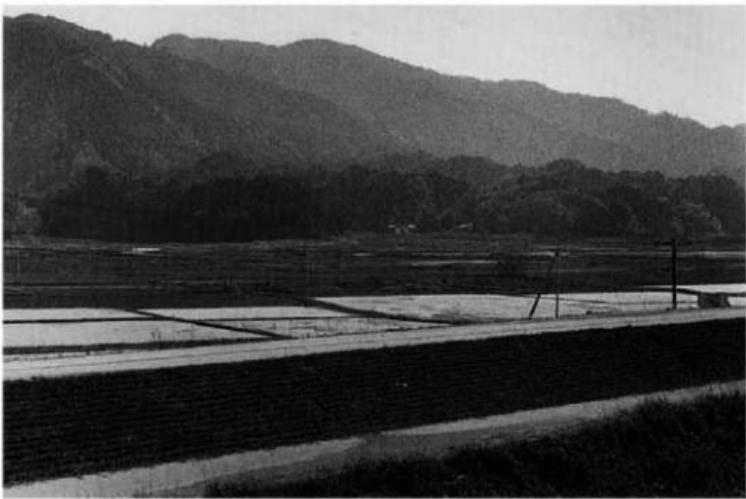


# 写 真 図 版





西ノ谷遺跡全景（北東から）



同上（北から）

PL10



1区 東壁



1区 南壁

PL11



1区 南壁



1区 TR3 北壁セクション (SD 1付近)

PL12



1区 弥生前期 1～3群の遺物出土状況（北から）



1区 弥生前期 集石 2 検出状況



1区 弥生前期土器集中出土状况



同上 (52)

PL14



SK 1 検出状況



同上



SK 1 遗物出土状况

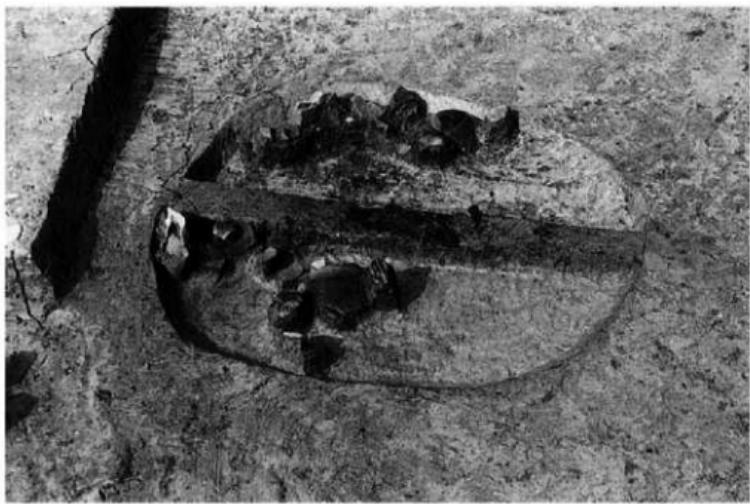


同上

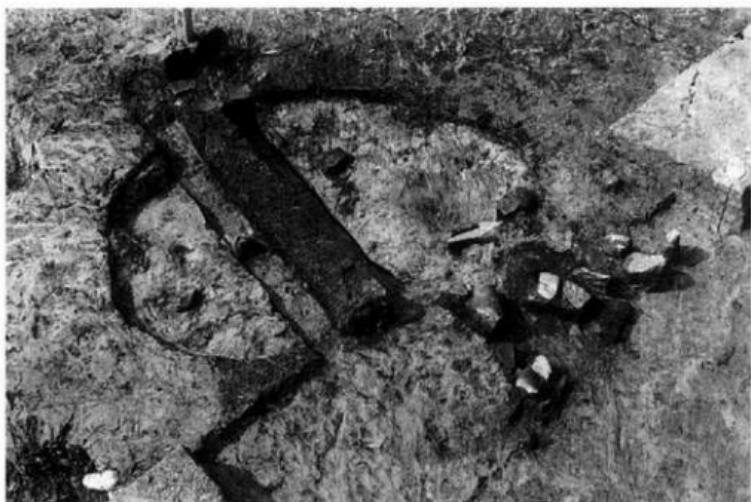
PL16



SK 1・2 遺物出土状況（北西より）



SK 1 遺物出土状況

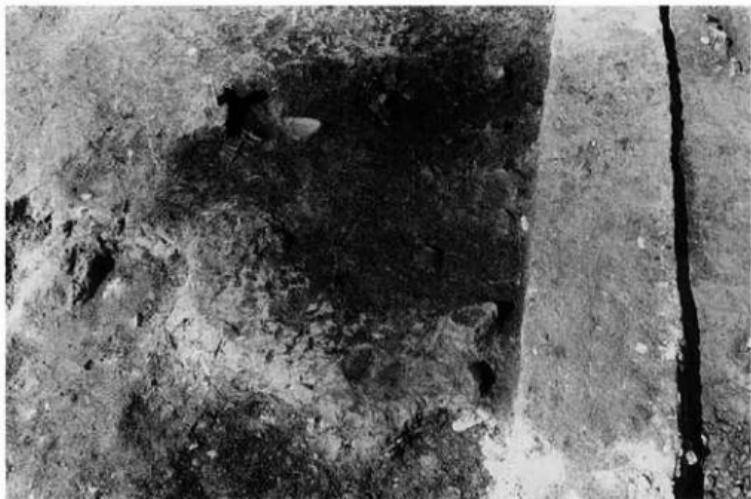


SK 2 遺物出土狀況



SK 1 遺物出土狀況 (23 - 24)

PL18



SK 2 検出状況

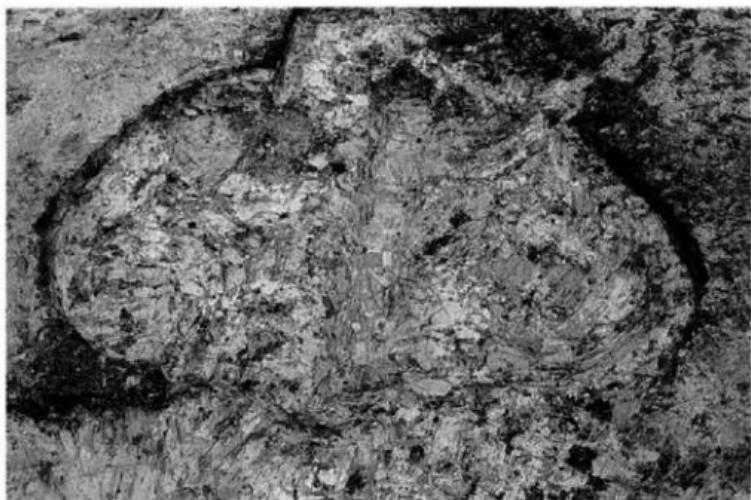


SK 2 セクション及び遺物出土状況

PL19



SK 1 完掘状況



SK 2 完掘状況

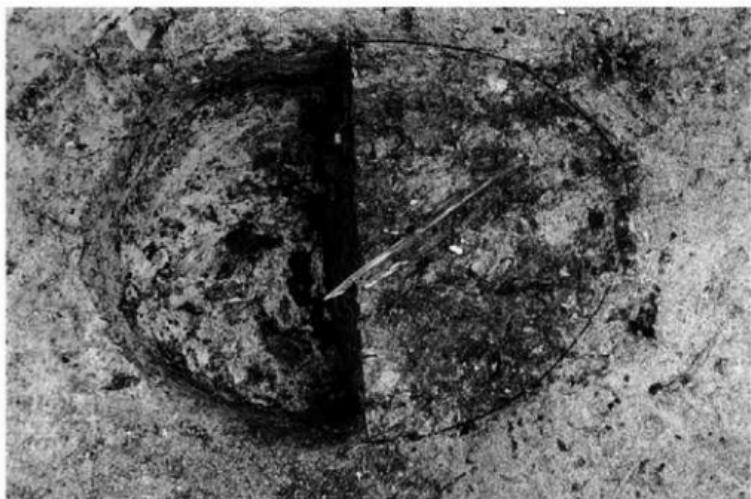
PL20



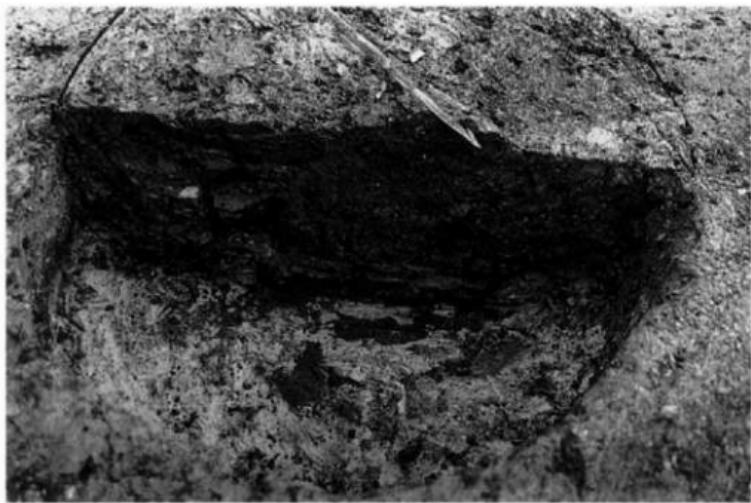
1区 古式土師器出土状況（VII層）



同上



SK 3 半截状况

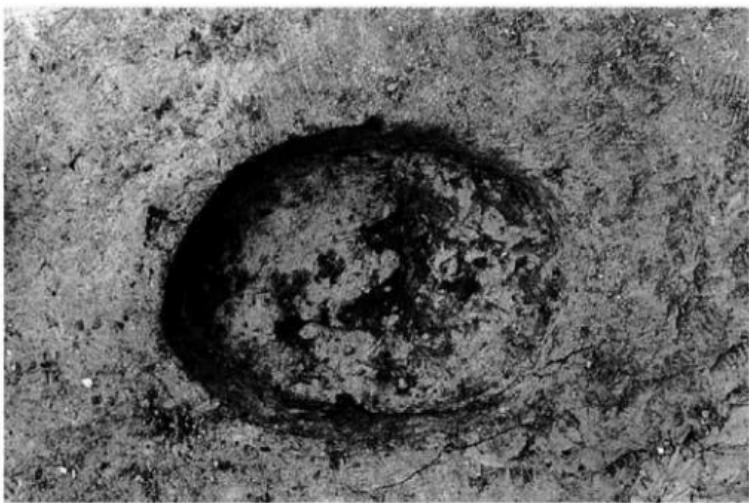


SK 3 半截断面

PL22



SK 3 ドングリ出土状況



SK 3 完掘状況



1区 古式土師器出土状況（VII層）



同上

PL24



1区 古墳時代前期遺物出土状況



同上



1区 完掘状況（北より）



1区 調査後の断ち割り

PL26



2区 西壁セクション



2区 完掘状況（北東側半分）



2区 完掘状況（北東側半分）

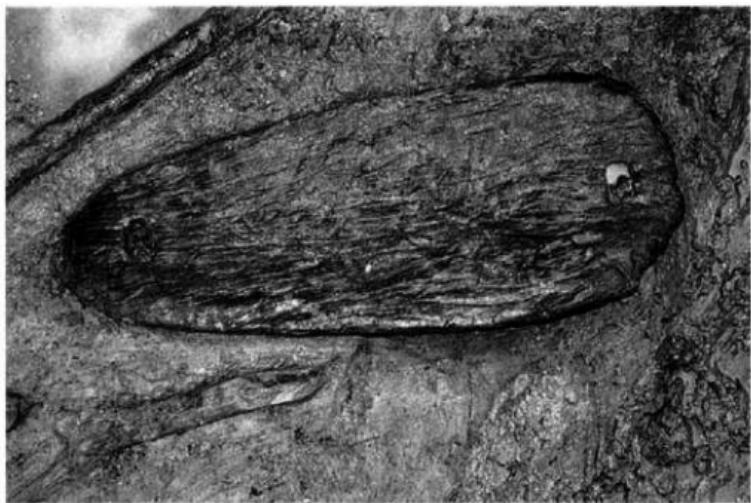


同上 （南西側半分）

PL28



2区 木製品出土状況



同上



2区 古墳時代前期土器出土状況



同上

PL30



2区 古墳時代前期土器出土状況



同上



2区 古墳時代前期土器出土状況



同上

PL32



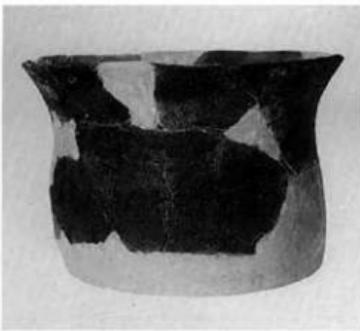
2区 古墳時代前期土器出土状況



2区 エブリ出土状況



37



46



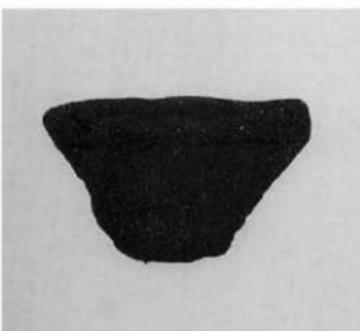
50



63



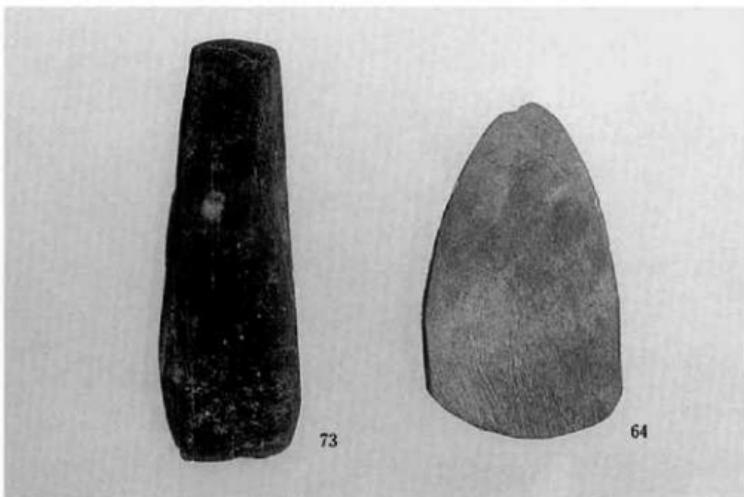
72



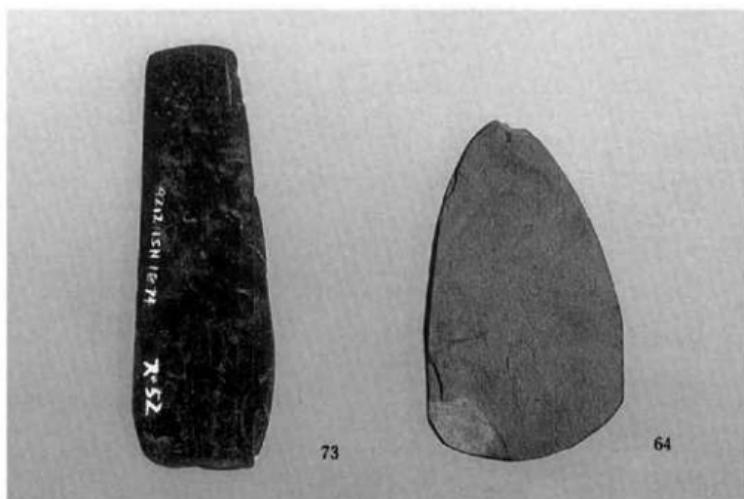
167

縄文土器 (167) 及び弥生前期土器 (37・46・50・63・72)

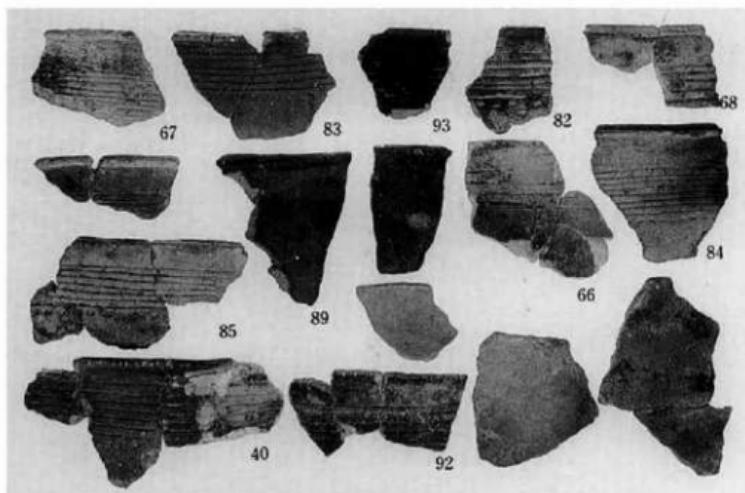
PL34



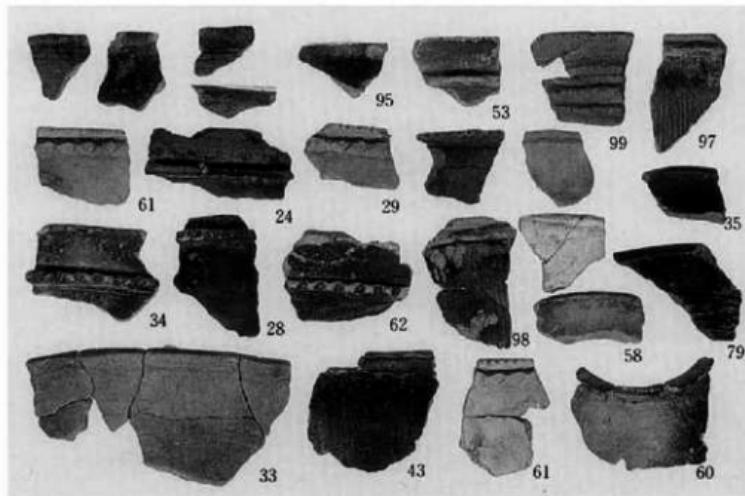
弥生前期石器



同上裏面

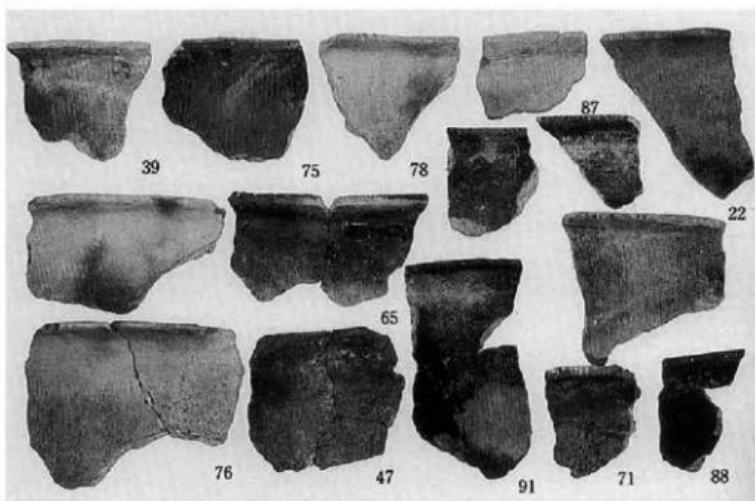


弥生前期土器

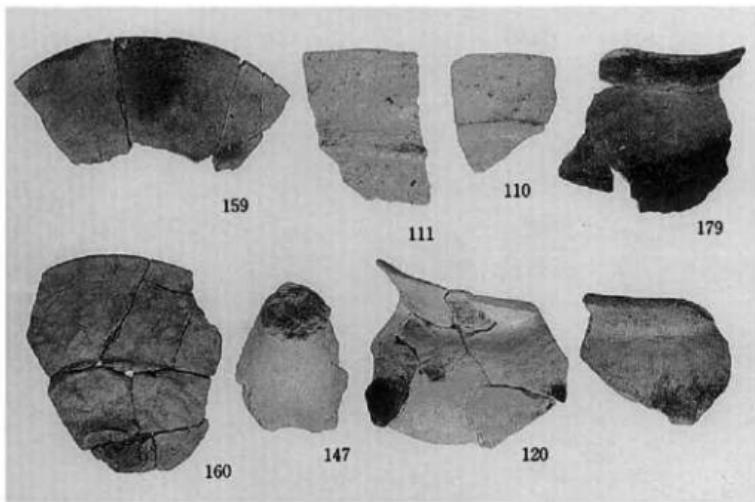


同上

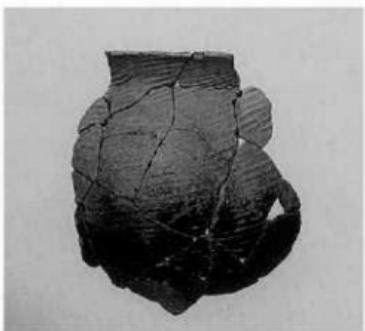
PL36



弥生前期土器



古墳時代前期土器



121



127



144



152



153



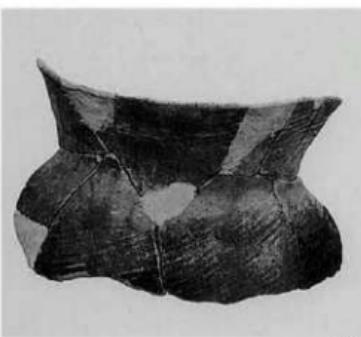
154

## 古墳時代前期土器

PL38



155



156



163



164



165



168

古墳時代前期土器

中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ

西ノ谷遺跡

第1分冊

発行日 1993年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会  
助高知県文化財整理文化財センター

印刷 (株)西村精書堂